

熊田子之四郎著

博文館 寄贈本



東洋近世史全

東京 博文館藏版

天下之大無
為平邦國
先首為是

五下之大黎元
為萃邦國之先
元首為元

無常の海に舟を建

舟を建てて海を渡る

支那近世史

栗田實



凡例

一此の支那近世史は、清朝の祖先、かつて満州の一酋長たりし時より、筆をおこして、日清戦争の以前までの、歴史を述べたるものなり。

一國政、學術、宗教、風俗等は、今日清朝が、萎靡不振に至りし、重なる原因なるを以て、聊、其要を悉したり。

一此書を著すにあたりて、参考に供したるは、和、漢、洋の書籍數十種にして、其中に信すべきものを取り、成るべく、誤謬の少からんことを期したるを以て、實事上

(二)

の欠點は、蓋少かるべし。

一目下、我國人が清國の歴史、地理等を研究すべき必要あるは、論をまたず。讀者幸に、此の書によりて、多少の益あらば、豈獨、著者一人のよろこびのみならんや。

明治廿八年二月

著者識

凡

例

支那近世史目錄

緒論

頁

第一章	清廷ノ起原……………	一〇
第二章	太祖及ビ世祖……………	一一
第三章	聖祖ノ治蹟……………	四五
第四章	世宗及ビ高祖ノ外征……………	五六
第五章	嘉慶ノ亂及ビ回部ノ騷擾……………	七三
第六章	鴉片ノ戰爭……………	八四
第七章	長髮賊ノ亂……………	九二
第八章	英佛同盟軍トノ戰爭……………	一〇三
第九章	大日本トノ關係……………	一一九
第十章	清佛戰爭……………	一三二
第十一章	天津條約……………	一三九
第十二章	國政……………	一四五

支 那 近 世 史

(一)

(二)

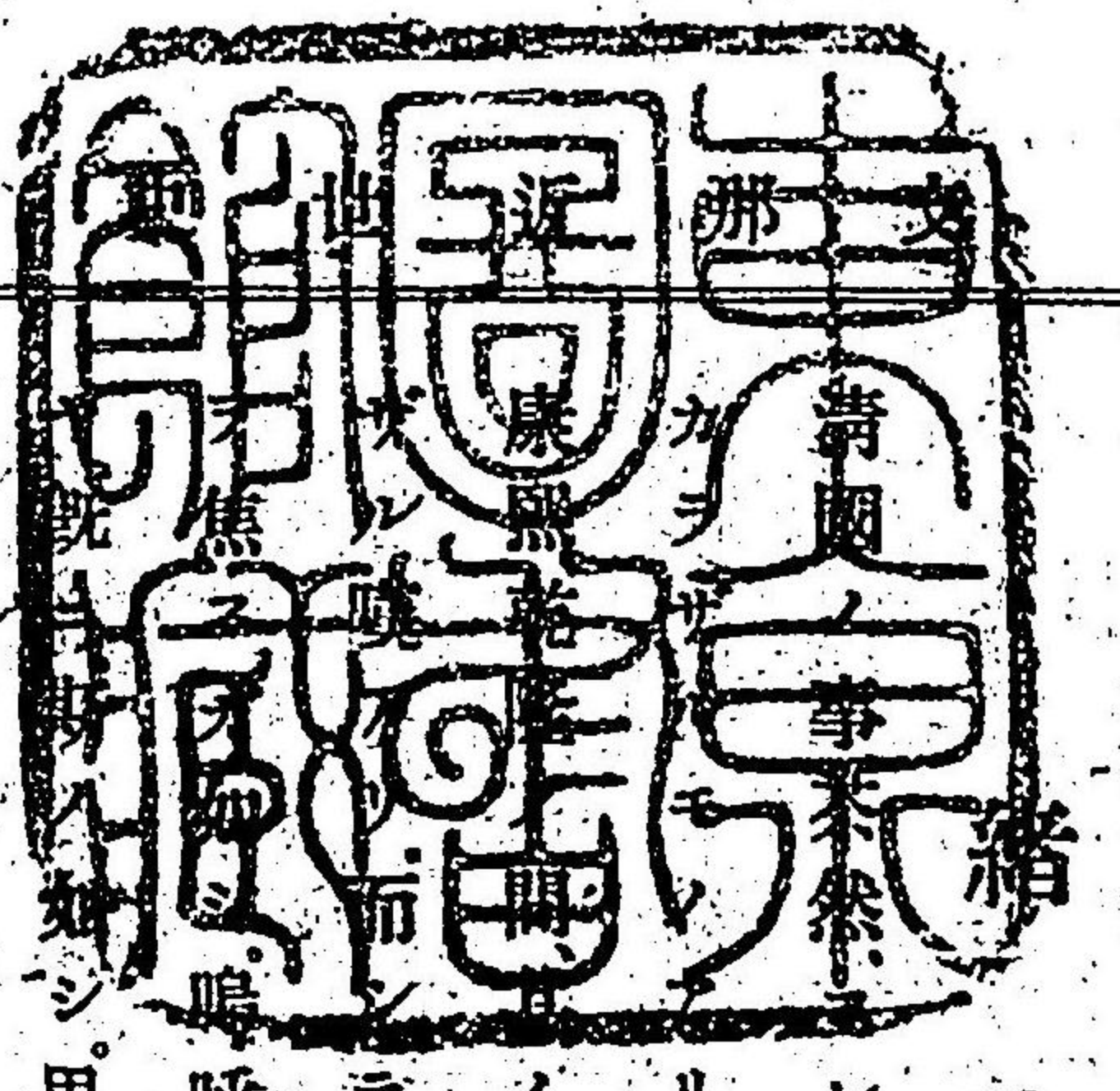
一、	政府組織	一四五
二、	賦稅、附、度、量、衡	一五五
三、	內治	一六〇
四、	外交	一六一
五、	刑法	一六五
六、	學制	一六八
七、	兵備	一七一
八、	國民族籍	一八〇
第十三章	學術	一八六
第十四章	宗教	二〇〇
第十五章	風俗	二一七
第十六章	殖産、通信	二三八
第十七章	地誌	二四六

録

支那近世史目錄畢

支那近世史

熊田子之四郎著



論

レヲ言フニ忍ビザルモノアリ。躍然、コレヲ言ハザルベ
 リ。何ヲカ、茶然、コレヲ言フニ忍ビザルモノトスル。曰ク、
 政、頗、靚ルベシト雖、其ノ後、朝政、漸、廢弛シテ、尾大掉ハ
 テ、外患、日ニ月ニ、コレニ乗ジ、其ノ勢タルヤ、烈火ノ、双眉
 呼、漢人、蚤ニ、文華ヲ以テ、自、誇リテ、中華ト稱ス。而シテ、今
 フニ忍ビズト云フ所以ナリ。何ヲカ、躍然、言ハザルベカラサルモノトス
 ル。曰ク、古來、支那ハ、万世、一系ノ帝統ヲ有セズ。故ニ、姓ヲ代フルコト、數多
 ニシテ、權アルモノハ、政ヲ握リ、之レナキモノハ、政ヲ失フ。戰フテ、而シテ、

(一)

勝ツモノハ、天下ヲ有テ、争ウテ、而シテ、敗ル、モノハ、天下ヲ喪フ。故ニ、天下ハ、常ニ、絲紛縷折シテ、ソノ、群雄割據、鹿ヲ、中原ニ、逐フ時ニ、當ツテハ、聚歛、日ニ甚シク、生民、罪ナクシテ、塗炭ニ、陥リ、老弱男女、流離顛沛、號哭ノ聲、野ニ、充ツ。目アルモノヲシテ、視ルニ、忍ビズ。耳アルモノヲシテ、聽クヲ肯シ、セザラシム。

目下、清廷、人ヲク、唯、虛禮、是レ、重シシ、空威、是レ、張ルノ、ミニシテ、而シテ、天下、土崩瓦解、復、理ム、ベカラズ。南人ハ、踊躍シテ、北人ハ、悲哀ス。實ニ、亡國ノ兆タリ。此ノ、兆タルヤ、蓋、清廷ノ、タメニハ、悲ム、ベキニ、似タリトイヘドモ、天下ハ、天下ノ、天下ニシテ、一人ノ、天下ニアラズ。況ヤ、二十世紀ニ、程遠カラヌ、今日ニ、當リテハ、世界ノ、潮流ト、共ニ、進マザル、ベカラザルニ、彼レ、支那ノ、老朽固陋ナル、舊套ヲ、墨守シテ、文明ノ、化ニ、進ム、能ハザレバ、一、韋帶水ノ、我ガ、大日本國ニ、於イテハ、隣邦ノ、義務トシテ、之レヲ、誘掖セザレバ、他年、其ノ、強隣ニ、當ル、ベカラザルヲ、以テ、熱心、コレガ、救厄ノ、策ヲ、メグラ

シ、ハ、ニ、時期ハ、遂ニ、到着セリ。是レ、躍然、言ハザル、ベカラザル、所以ナリ。

按スルニ、支那ハ、四百五十萬方英里ノ、面積ト、五億万ノ、人口トヲ、有シ、其ノ、地タルヤ、已ニ、沙漠、人、亦、擾多ナリ。而シテ、四千餘年間、其ノ、文物ヲ、保存スル、古國ナレバ、其ノ、間ニ、起リシ、出來事、亦、從ツテ、渺シトセズ。而シテ、載藉、コレヲ、記スコト、稍、詳ナリ。今、ソノ、載藉ヲ、見ルニ、此ノ、國ノ、風俗、習慣、政令、制度、宗教等ハ、大ニ、我ガ、國ニ、相類スル、モノアリ。是レ、吾人ガ、其ノ、由來ノ、事蹟ヲ、索窮考攻スルノ、要アルト、同時ニ、又、不老不死ノ、長壽翁タル、歴史ニ、就キテ、之レヲ、質サ、ソル、ベカラザル、所以ナリ。殊ニ、現今、清廷、其ノ、鼎ノ、輕重ヲ、問ハル、ハ、ニ、際シテハ、近世ノ、歴史ヲ、研究スル、モノ、豈、其ノ、必要ナシトセシヤ。

支那ハ、地形、又ハ、人種ニ、ヨリテ、支那本部、滿洲、蒙古、伊犁、西藏ノ、五大部ニ、分ツヲ、得。支那本部ハ、中國、中華、漢土等ノ、名アリテ、直隸、山東、山西、甘肅、江蘇、浙江、安徽、江西、福建、廣東、廣西、湖南、湖北、河南、四川、貴州、雲南、臺灣ノ、十九

省ニ分チ、滿洲ヲ、盛京、吉林、黑龍江ノ三省ニ分ツ。蒙古ハ吳昆ノ大沙漠ヲ以テ、内外ヲ分界シ、南ヲ內蒙古ト稱シ、北ヲ外蒙古ト稱ス。伊犁亦、天山ヲ以テ、南北ヲ區劃シ、其ノ南ヲ、天山南路ト稱シ、其ノ北ヲ、天山北路ト稱シ。シガ近年、新疆省ヲ設ケタリ。西藏亦、之レヲ二分シテ、東方ヲ前藏ト稱シ、西方ヲ後藏ト稱ス。西藏ノ地勢、西方ハ、高クシテ、高燥ナレドモ、東方ハ、コレニ反シテ、卑濕ナリ。山ノ大ナルモノハ、印度ノ境ニ喜馬拉山アリ。中央ニ崑崙天山アリ。北ニ阿爾泰山アリ。コレヲ四大山脈ト云フ。喜馬拉山ハ、西藏ノ高土ニ踞坐シ、雲障高ク、半空ニ入ル。實ニ世界第一ノ高峯ニシテ、東邦ノ巨鎮タリ。而シテ、祈連、賀蘭、興安、南嶺、北嶺等ノ峻峯モ、亦相對峙シテ、各一方ニ雄ヲ競ヘリ。

二大河アリ。一ヲ黃河トイヒ、一ヲ楊子江トイフ。共ニ源ヲ西方ノ高山ヨリ發シ、紆曲シテ、海ニ朔宗ス。黃河ハ、古ヨリ、濁流漲奔ヲ以テ名アリ。而シテ、其ノ汎濫ノ患アルハ、灌溉ノ便アルニ由ル。埃及ノ乃流ト、何ゾ、異ナラ

ンヤ。

氣候ハ、地ノ曠漠ニヨリテ、大ニ差等アリ。南部ハ、二十四五度ヨリ、殆、二十度ニ垂ントス。故ニ、其ノ炎熱堪フベカラズト雖、之レニ反シテ、北部ハ、四十五度以上、五十度ニ至ル處アルヲ以テ、寒冷殊ニ甚シ。伊犁ハ、乾燥降雨少ク、西藏ハ、高燥、氣清シ。寔ニ、地球ノ脊髓骨ナリ。地理學者、之レヲ屋背ニ比スル、理アリト謂フベシ。

支那近世史 (五)

支那人ハ、我ガ日本人ト等シク、黄色人種ナレドモ、其ノ祖先ハ、一樣ノ種族ニアラズ。之レヲ類別スレバ、五種アリ。曰ク苗人種。曰ク漢人種。曰ク滿洲人種。曰ク蒙古人種。曰ク回々人種。コノ五人種ハ、實ニ、支那四千有餘年間ノ歴史ヲ充タシ、モノナリ。苗人種ハ、資性暗昧ニシテ、殺戮鬪爭ヲ是レ事トス。之レヲ、奈何ゾ、多智優力ノ漢人種ト、頡頏スルヲ得ンヤ。初メ、黃河、楊子江畔肥饒ノ地ニ棲息セシガ、漢人種ノ、西北部ヨリ、東南ニ向ツテ侵入スルヤ、勢、兩立スル能ハズ。遂ニ、江南入地ニ、驅逐セラレタリ。漢人種

ハ、漢土即支那本部ヲ一統シ、文化ノ指導者トシテ、比較上開明ノ域ニ進
 ミ、大ニ他ノ人種ヲ凌駕スルニ至レリ。滿洲人種ハ、滿洲地方ニ住ス。土地
 頗寒クシテ、漢土ト趣ヲ異ニスレドモ、其ノ狀貌、骨格、漢人種ト同ジキモ
 ノアリ。晋ノ末世ニ及シテ、勢漸猖獗、北朝ノ如キハ、滿洲人種ノ勢力、中外
 ヲ傾ケタリ。支那當代ノ愛親覺羅氏、亦、コノ種族ヨリ、勃興シテ、支那全土
 ヲ席卷シ、終ニ君臨シテ、政ヲ行フニ至レリ。蒙古ハ、一ニ韃靼ト稱ス。此ノ
 人種ハ、蒙古及青海地方ニ住シ、牧畜ヲ業トシ、水草ヲ逐フテ、轉移ス。性頗
 猛犇ニシテ、鬪争ヲ好ム。漢代ノ匈奴、唐代ノ突厥ハ、ミナ、コノ種ナリ。此ノ
 種ヨリ起リテ、中國ヲ一統セシモノヲ、元ノ太祖トナス。回々人種ハ、伊犁
 地方ニ住スルモノニシテ、蒙古人種ニ似タリトイヘドモ、回々教ヲ信奉
 スルヲ以テ、特ニ、コノ區別アルノミ。唐ノ時、吐蕃、回鶻、屢邊境ヲ侵シ、ガ
 吐蕃ハ、西藏人種ニシテ、回鶻ハ、回々人種ナリ。
 我が邦、天孫統ヲ垂レ、天神之ヲ輔ケ、四方ノ蠻民悅服シ、君臣ノ分、自然ニ

定マル。故ニ、帝統綿々トシテ、數千年來、赤曾テ、姓ヲ改メズ、其ノ君ヤ、至靈
 特尊ニシテ、其ノ臣ヤ、純忠果敢ナリ。渠ノ漢土ノ群雄割據シテ、民人擾然
 タルガ若キモノ、比ニアラザレバ、我レヲ以テ、彼レヲ論ジ、彼レヲ以テ
 我レニ擬スル能ハザルヤ、必セリ。然リトイヘドモ、我が尊キ所以ヲ知ラ
 ント欲スレバ、必先彼ノ然ラザル所以ヲ知ラザルベカラズ。是レ、兩史併
 セ讀ミ、双書兼テ誦スル要アル所以ナリ。
 支那ハ、前述ノ如ク、茫邈タル曠土ニシテ、高低寒暄、其ノ度ヲ同ウセズ。加
 之、地形上、天然ノ區劃ト、人種上、自然ノ差別アリ。故ニ、勢、胡越ノ狀ナシト
 セズ。宜ナル哉。夏禹、九五ニ登リシ以來、五千有餘年間、姓ヲ代フコト數十
 夏、殷、周ノ外、其ノ永キモノ、概、二十世、三百年ニ上ラズ。唐、宋、明、是レナリ。其
 ノ短キモノ、二三世、十年ニ過キズ。秦、五代、是レナリ。ソノ本、既ニ堅カラズ。
 故ニ、其ノ季、常ニ乱ル。是レヲ以テ、帝トイヒ、王トイフモノハ、皆是レ、弧劍
 ヲ提ゲテ、擾乱ヲ定メタル創業ノ英傑ナラザルハ、ナク、後昆ハ、多ク、是レ、

堅城ヲ抱イテ、顛覆ヲ速キタル、滅國ノ庸王ナラザルハナシ。清ノ太祖、年二十五、兵ヲ起シテ、四隣ヲ侵シ、遂ニ滿洲諸族ヲ統一シテ、明ニ入り、僅ニ四万五千ノ兵ヲ以テ、明將揚鎬ガ三十万ノ兵ヲ敗リシモ、太宗ガ十万ノ兵ヲ以テ、朝鮮ヲ降シ、明ニ入り、兗州ニ至リ、十八州ヲ下シ、モ世祖ガ明將、吳三桂ヲ援ケテ、李自成ヲ敗リ、三桂ノ爵ヲ進メテ、平西王トナシ、虛名ヲ與ヘテ、實權ヲ握リ、都ヲ北京ニ遷シテ、即位セシモ、皆創業ノ英傑、劍戟ヲ提ゲテ、擾乱ヲ定メタルモノナリ。

此ノ如ク、愛親覺羅氏ハ、北偏滿洲ノ地ヨリ起リテ、乾綱ヲ握リシユエ、漢人、動モスレハ、心服セザル傾向アリ、而シテ、清廷亦之ヲ看破シタルガユエニ、儒學ヲ獎勵シ、文物ヲ隆盛ニシ、以テ、天下ノ民心ヲ變和收攬セント欲シ、一代ノ碩學鴻儒ヲバ、皆其ノ闕下ニ集メタリ。サレバ、后世、清朝ノ隆ヲ説クモノ、必指テ、康熙、乾隆ノ二代ニ屈ス。然リト雖、一隆一替、一起一伏ハ、蓋、數ノ免ル可ラザル所ニシテ、乾隆帝高宗マデヲ、清朝積極的ノ世ト

ナシ。仁宗ヨリ、宣宗、文宗、穆宗ヲ、~~今~~上帝ニ至ルマデヲ、清朝消極的ノ世トナスベシ。宣宗ノ道光十九年、廣東總督林則徐、英人ガ東印度ヨリ、齋ヲセル鴉片ノ輸入ヲ禁シ、又、英人ノ貿易ヲ禁セシヨリ、兩國、遂ニ干戈ヲ動カシ、清軍大敗シ、償金二千六百万兩ヲ出シ、廣東、厦門、福州、寧波、上海、五港ヲ開キテ、英國ノ貿易場トナシ、香港ヲ割キテ、英國ニ讓リ、事熄ムヲ得タルガ如キ、寔ニ國運廢弛ノ始ニシテ、道光三十年、長髮賊ノ起ルヤ、兵結ブコト、十五年、害ノ及ブモノ、十六省、英、米、將士ノ力ニ藉リテ、僅ニ傾カザルヲ得タリ。文宗ノ咸豐十年、英佛ノ軍艦、芝罘ニ來リ、北塘ヲ陥レ、太沽ヲ破リ、尙進ンデ、天津ヲ降シ、北京ニ入り、圓明園ヲ燒キ、償金千八百万兩ヲ得タルガ如キ、穆宗ノ同治十一年、我が大日本、兵艦五隻ヲ出シテ、臺灣ニ向ケ、辯談數回、償金五十万兩ヲ得シガ如キ、今帝ノ光緒七年ニ、伊犁ノ事ヨリ、魯國ト談判ヲ開キ、兩國、兵ヲ境上ニ出シ、モ、清廷九百万兩ノ償金ヲ約シケレハ、終ニ戰ハズシテ、止ミタルガ如キ、近クハ、光緒十年、安南

ノ事ヨリ、佛國ト兵ヲ構ヘ、互ニ勝敗アリ、遂ニ十箇ノ條約ヲ結ンデ、兵ヲ解キシガ如キ、皆冥頑不靈ノ然ラシムル所ニシテ、而シテ、自其ノ國体ヲ腐蝕スル、媒タラザルハナシ。今日、我が天日本、清國ヲ征スル所以ノモノ、亦故アルカナ。

第一章 清廷ノ起原

清ノ太祖愛新覺羅氏、名ヲ努爾哈齊トイフ。其ノ先ハ、滿洲ノ族長ナリ。世々、長白山ノ下ニ住ス。相傳フ、山下ニ一池アリ、三人ノ天女來タリテ、池ニ浴ス。長ヲ恩古倫トイヒ、次ヲ正古倫トイヒ、季ヲ佛古倫トイフ。時ニ神鵲アリ、朱果ヲ銜ミ來リテ、季女ノ衣上ニ置ク。季女取リテ、之ヲ口中ニ含ミ、忽腹ニ入ル。遂ニ身メルアリテ、一男ヲ生ム。男生レテ、能ク言フ。母、遂ニ空ヲ凌ギテ去ル。衆、之ヲ奇トシ、其ノ奉ジテ具勒トナシ、布庫里雍須ト

名ツク。初メ、長白山ノ東、俄朶里城ニ居ル。其ノ後、數傳シテ、肇祖名ハ都督孟特穆ニ至リ、赫圖阿拉後ノ興京ニ移ル。興祖名ハ都督福滿ヲ經テ、景祖名ハ安覺ニ至リ、漸諸部落ヲ併吞セリ。景祖名ハ塔克世ヲ生ム。顯祖ハ、則太祖ノ父ナリ。太祖長シテ、武略アリ。能ク兵ヲ用フ。國人稱シテ、聰明貝勤トイフ。

明ノ萬曆十一年、太祖年二十五。時ニ滿洲圖倫城ニ、尼堪外蘭トイフモノアリ。陰ニ明ノ寧遠伯李成梁ヲ誘ウテ、沙克城ヲ攻メ、其ノ主ヲ殺シ、進ンデ古勒城ヲ攻ム。其ノ城主阿太章京ガ妻ハ、太祖ノ伯父禮敦ノ女ナリ。景祖女孫ノ害セラレンコトヲ恐レ、顯祖ト偕ニ往イテ之ヲ救フ。尼堪外蘭、城ニ至リ、紹キテ曰ク、阿太ヲ殺シテ來リ降ル者ハ、此ノ城ノ主ト爲サン。ト。城中、遂ニ阿太ヲ殺シテ降ルモノアリ。成梁、盡ク之ヲ屠リ、尼堪外蘭、又景祖顯祖ヲ害ス。太祖大ニ怒リ、外蘭ヲ得テ、甘心セント欲ス。明人肯ゼズ。且、曰ク、外蘭ヲ以テ、滿洲國主ト爲サント。太祖、乃兵ヲ率キテ、外蘭ヲ圖倫城ニ攻ム。外蘭敗走ス。其ノ后、外蘭ヲ執ヘテ、太祖ニ送ルモノアリ。太祖乃

之ヲ斬リテ、仇ヲ復セリ。此ノ時ニ嘗リ諸國分裂シ、英雄四方ニ起リ、強ハ弱ヲ凌ギ、衆ハ寡ヲ併セ、紛擾復制スベカラズ。明因リテ、龍虎將軍ノ印ヲ給シ、且、誤リテ二祖ヲ害セシヲ以テ、自後、歲々、銀八百兩、蟒服綬十五疋ヲ輸ス。太祖近隣ノ諸部ヲ定メント欲シ、十五年、先哲陳部ヲ攻メ、次イデ、完顏部ニ克チ、漸、滿洲ノ五部ヲ服シ、遂ニ建州ヲ有ツ。此ノ時ニ當リ、葉赫、烏拉等ノ九國、太祖ノ國富ミ、兵強キヲ嫉ミ、且、其ノ志ノ少ナカラザルヲ見、害ノ己ニ及バンコトヲ悞レ、カヲ戮セテ、之ヲ滅セント謀リ、兵三萬ヲ合セ、路ヲ分チテ來リ侵ス。國人太ニ悞ル。太祖酣寢シテ、且ニ達シ、詰朝出デ、自戰ヒ、大ニ敵兵ヲ破リ、斬首四千餘級、馬三千、鎧冑千餘ヲ獲、吳喇ノ貝勒布古泰ヲ擒ニセリ。是レヨリ軍威大ニ震ヒ、遠近懾服シ、葉赫、哈達等ノ四部、使ヲ遣シ、前好ヲ締ビ、婚媾ヲ結ハシ、コトヲ乞ヒ、葉赫ノ布場、古貝勒ハ、妹ヲ以テ太祖ニ進メ、金台石貝勒ハ、女ヲ以テ太祖ノ次子ニ妻サンコトヲ願フ。仍リテ、太祖之

ヲ許シ、四國モ相繼ギテ誓ヒ、盟好ニ背カザルヲ約ス。二十七年、初メテ、明貢ヲ絶チ、唯、舊ニ依リテ、互市ヲナス。太祖意ヲ政治ニ留メ、蒙古ノ字ヲ以テ滿文ヲ創シ、之ヲ國中ニ頒行シ、或ハ、國中ノ貧窶ヲ賑恤ス。是レヨリ先布占泰釋サレテ、國ニ歸リ、吳喇國ノ主トナル。此ニ至リテ、盟ニ背キ會テ、太祖ノ聘セシ布塞貝勒ノ女ヲ娶ラント欲ス。太祖之ヲ聞キテ、大ニ怒リ、大兵ヲ率キテ之ヲ征シ、其ノ五城ヲ拔ク。布占泰、僅ニ身ヲ以テ免レ、葉赫ニ投ズ。太祖、乃、葉赫ニ諭シテ、布占泰ヲ捕ヘテ、來リ獻セシム。葉赫亦命ヲ聽カズ。是ニ於テ、太祖兵四萬ヲ率キテ、又之ヲ征ス。葉赫、援ヲ明ニ乞フ。明廷遊擊馬時楠ヲシテ、火器ニ熟スル者千人ヲ率キテ、之ヲ援ケシム。太祖戰ツテ、其ノ七城ヲ下シ、遂ニ師ニ誓ヒテ、明廷ヲ誓トス。明ノ万曆四十三年、太祖年五十八、元ヲ建テ、天命トイヒ、國ヲ滿洲ト稱ス。群臣尊號ヲ奉リ、覆育列國英明皇帝トイフ。時ニ、海西ノ四國、略平クト雖、葉赫、獨、明ヲ恃ミテ、下ラズ。明亦、其ノ地ヲ以テ、北關トナス。太祖、謀ヲ設ケ

テ、大ニ明兵ヲ破リ、兵ヲ休スルコト二年、天命三年、師ヲ興シテ、明ヲ討ツ。七大恨ヲ以テ、天地ニ誓告ス。其ノ書ニ書ク。我元祖父、未嘗損明之邊上一草一寸土也。明無端起、毀邊陲、害我之祖父。恨一也。明雖起、毀我尙欲修好、設碑勒誓、凡滿漢人等、毋越疆圍、敢有越者、見即誅之。見而故縱、殃及縱者、詎明復諭、誓言違、兵越界、衛助葉赫恨二也。明人於清河以南、江岸以北、每歲竊偷疆場、肆其攘、我邊警行、誅明負前盟、責我擅殺、拘我廣寧使臣、綱古里方吉納、挾取十人、殺之邊境、恨三也。明越境以兵助葉赫、俾我已聘之女、改適蒙古、恨四也。柴河、三盆、撫安三路、我累世分守疆土之衆、耕田藝穀、明不容刈獲、遣兵驅逐、恨五也。邊外葉赫、獲罪于天、明乃偏信其言、特遣使臣、遣書詬置、肆行凌侮、恨六也。昔哈達助葉赫、二次來侵、我自報之、天既授我哈達國矣、明又黨之、挾我以復其國、已而哈達之人、數被葉赫侵掠、大列國之相征成也、順天心者勝、而存、送天意者敗、而亡、何能使死于兵者、更生得其地者、更還乎、天道大國之君、即爲天下共主、豈獨主于一人而已、初、扈倫

諸國合侵我、故天厭扈倫、啓靈、惟我是眷、今明助天譴之葉赫、抗天意、倒置是非、妄爲割斷、恨七也。欺凌日甚、情所難堪、因此七大恨之故、是故征之。

ト、太祖、天ヲ拜シ、其ノ書ヲ焚キ、步騎二万ヲ率キテ、興京ヲ發シ、撫順城ヲ圍ミ、明ノ遊擊李永芳ヲ降シ、其ノ城ヲ夷ゲテ還ル。次イテ、復、清河城ヲ拔キテ、副將鄒儲賢等万余人ヲ斬ル。明、太祖ノ兵勢、日ニ盛ナルヲ聞キ、四年、遼東ノ經路、楊錦兵二十四万ヲ、瀋陽ニ集メ、路ヲ分チテ、來リ攻ム。各部ノ將各、兵六万ヲ率キ、總兵杜松、渾河ヨリ、撫順關ニ入リ、李如柏、清河ヨリ、鴨綠關ニ入リ、馬林ハ、開原ヨリ、三岔口ニ入リ、劉綎、南京路ヨリ、寬甸ニ入リ、皆、都城ニ向ハントス。太祖、乃、盡、各路ノ兵ヲ城中ニ集メ、戒嚴シテ、明兵ノ來ルヲ待ツ。明將杜松、素ヨリ、勇名アリ、敵ヲ輕シ、首功ヲ立テント欲シ、期ニ先チ、夜ニ乘ジテ、撫順關ヲ出デ、日ニ百餘里ヲ馳セ、渾河ニ抵リ、馬ニ策チテ、經ニ度ル。河流急ニシテ、溺死スルモノ、甚多シ。松兵二万ヲ以テ、界藩城ヲ圍ミ、別ニ、兵三万ヲ分チテ、薩爾滸山ニ屯セシム。太祖、大具勒等

ニ命ジ一万五千人ヲ以テ界藩ヲ援ケシメ、親、四万五千人ヲ率キテ、薩爾
 汗ノ大營ヲ攻ム。明兵、巨礮ヲ連發シ、接戰數刻、遂ニ晡ニ至ル。時ニ、疆
 尺ヲ辨ゼズ、明兵、乃、炬ヲ列シテ、戰ヲ挑ム。太祖ノ兵、暗ヨリ明ヲ擊チ、
 萬矢盡ク中ル。而シテ、明兵、明ヨリ暗ヲ擊チ、銃礮皆樹林ニ當ル。太祖ノ兵、
 遂ニ晦ニ乘ジテ、塹ヲ踰エ、棚ヲ拔キ、明兵三萬餘ヲ破ル。已ニシテ、右翼ノ
 界藩ヲ助ケシモノ山上ノ兵ニ合シ、山下ノ兵ヲ夾ミテ、敵陣ヲ衝ク。杜松流
 矢ニ中テ死ス。明ノ北路ノ兵、之ヲ聞キテ、急ニ尙間崖ニ據リ、營ニ三濠ヲ環
 ラシ、火器ヲ濠外ニ列シテ、防禦トナス。太祖、又馳セテ、尙間崖ニ赴キ、明兵
 三萬ニ遇フ。乃、山麓ニ陣シ、馬ヲ下リテ步戰ス。未、令ヲ傳ヘザルニ、敵兵突
 至ス。是ニ馳テ、諸旗馬ヲ縱チテ馳突シ、人々、自戰ヲ爲ス。已ニシテ、諸具勒
 ノ兵、陣ヲ貫キテ敵背ニ出デ、表裏夾擊シ、呼聲天地ニ震フ。明兵、遂ニ大ニ
 破レ、傷ヲ負ウテ溺ル、モ、ノ算ナシ。河水、爲ニ赤シ。太祖更ニ兵ヲ進メテ、
 藩宗顏ノ軍ヲ、菲芬山ニ破リ、馬林、殘卒ヲ收メテ、開原ニ走ル。明ノ楊鎬、之

ヲ聞キ、急ニ檄ヲ飛バシテ、李如柏、及ビ劉綎ノ二軍ヲ止ム。然ルニ、綎ノ軍
 已ニ險ヲ涉リテ、深入シ、都城ヲ距ル五十餘里ノ處ニ營シ、未、敗報ヲ得ズ。
 太祖軍ヲ移シテ之ヲ擊ツ。明軍殊死シテ戰ヒ、綎遂ニ戰死ス。而シテ其ノ
 康應乾ノ步兵、朝鮮ノ兵二萬ニ合シ、富察ノ地ニ營シテ、力戰ス。時ニ、大風
 石ヲ走ラシ、沙塵ヲ揚ケ、目ヲ開クコト能ハズ。火器、皆、反射ス。太祖ノ兵、勢
 ニ乘シテ、之ヲ衝キシカバ、應乾大ニ敗レテ、遁レ去ル。朝鮮ノ元帥姜功烈、
 殘兵五千ヲ以テ來リ降ル。此ノ役、明天下ノ力ヲ傾ケ、盡、宿將猛士ヲ徵ジ、
 力戰五日ニシテ、三路皆破ラル。太祖ノ兵、僅ニ數百人ヲ損セシニ過ギズ。
 兩朝ノ興廢、實ニ此戰ニ定レリトイフ。此ノ年四月、遂ニ開原ヲ拔キ、士馬
 ヲ界藩城ニ休シ、七月ニ至リ、復鐵嶺ヲ陷ル。時ニ太祖ノ疆域、西ハ遼ヨリ、
 南ハ朝鮮ニ至リ、東ハ海ヨリ、北ハ黑龍江ニ至レリ。
 是ニ於テ、明廷、楊鎬ノ罪ヲ治シ、熊廷弼ヲ以テ之ニ代フ。時ニ、遼藩ノ諸城、
 土民、盡奔竄シ、數百里ノ間、人跡ナシ。廷弼、程ヲ兼ネ、雪ヲ冒シ、偏ク形勢ヲ

閱シ守備ヲ修メ軍令ヲ嚴ニシ固ク守リテ漫ニ出テ戰ハズ兵十八萬ヲ
 集メ以テ機變ヲ伺フ太祖亦兵ヲ按ジ攻メザルコト歲餘明廷弼ノ出テ
 戰ハザルヲ咎メ應泰ヲ以テ之ニ代フ應泰モト吏事ニ長ズルモ將材ニ
 非ズ天命六年春大舉シテ瀋陽ヲ攻ム明總兵賀世賢善ク戰ヒ身十四矢
 ヲ蒙リテ陣沒シ城遂ニ陷ル總兵董仲揆陳策等兵ヲ率キテ來リ援ヒ渾
 河ニ次ス太祖ノ兵急ニ攻メテ之ヲ圍ム明兵火器ヲ發シテ憤闘ス已ニ
 シテ銃丸皆盡ク之ニ乗ジテ太祖ノ兵萬矢環射ス仲揆等及ヲ揮ヒ突進
 十餘人ヲ殺シテ死ス蓋シ此ノ役明萬人ヲ以テ太祖ノ數萬ノ兵ト戰ヒ
 力屈シテ敗ルト雖兵ヲ遼左ニ交ヘシ以來第一ノ激戰ナリ
 太祖ノ兵勝ニ乗ジテ遼陽ヲ攻ム袁應泰水ヲ引キテ濠ニ注ギ自出テ戰
 フテ敗レ又城ニ入りテ固ク守ル太祖命ジテ水源ヲ塞キ濠ヲ渡リ銃丸
 ヲ冒シテ城ニ登ル明兵炬ヲ照シテ之ヲ拒ギ且ニ達シテ城遂ニ陷ル經
 略袁應泰印ヲ佩セテ自焚死シ御史張銓執ヘラレ屈セズシテ死ス是ニ

於テ遼河以東七十餘城悉下リ太祖遂ニ都ヲ遼陽ニ遷ス明帝之ヲ聞キ
 テ大ニ駭キ前ニ熊廷弼ヲ劾セシ諸臣ヲ誦復庭弼ヲ家ヨリ徵ス庭弼
 三方節制ノ策ヲ立テ廣寧巡撫王化貞ト議合ハズ化貞曰ク願クハ兵六
 萬ヲ得一舉シテ敵兵ヲ蕩平セント兵部尙書張鶴鳴之ヲ信ジ悉其ノ言
 ニ從フ廣寧ノ兵十四萬アリ然ルニ庭弼ガ關上一卒ナシ徒ニ經略ノ虛
 號ヲ擁スルニ過キズ十月氷合スルニ及ビ太祖ノ兵河ヲ渡リテ南ス張
 鳴鶴廷議シテ庭弼ヲヤメ專化貞ニ任セントス已ニシテ太祖ノ兵清平
 堡ヲ陷ル化貞中軍孫功得ヲ信ジ悉廣寧兵ヲ發シテ得功ニ與フ得功陰
 ニ太祖ニ通ジ譏リテ曰敵騎廣寧ニ薄ルト化貞之ヲ聞キ城ヲ棄テ單
 騎出テ走リ大河ニ至リ熊廷弼ニ逢ヒ化貞大ニ哭ス庭弼且笑ヒ且憤リ
 乃手兵五千人ヲ以テ化貞ニ授ケテ殿ヲラシメ盡積聚ヲ焚キ難民數十
 萬ヲ護シテ關ニ入ル得功ハ太祖ノ兵ヲ迎ヘテ廣寧ニ入ル是ニ是テ錦
 州清河以下四十餘城悉降ル明王化貞及ビ熊廷弼ヲ逮ヘ大學士孫承宗

ヲ以テ、遼東ヲ經略セシム。承宗、才、廷弼ニ及バズト雖、頗、器局アリ。袁崇煥
 ヲシテ、寧遠城ヲ開キ、關外二百里ノ地ヲ守ラシム。承宗、又諸將ニ命シテ、
 要害ヲ守ラシメ、城堡數十ヲ修メ、甲冑弓礮ヲ造リ、練兵十一万、屯田五千
 頃ヲ開ク。是レヨリ先、太祖、都ヲ瀋陽ニ遷シ、兵ヲ按ジテ、出デ戰ハズ。陰ニ
 隙ヲ伺フ、時ニ明ノ太監魏忠賢ノ黨孫承宗ヲ排斥シ、高第ヲ以テ之ニ代
 ラシム。高第、寧遠ヲ棄テント欲ス。崇煥死ヲ以テ誓ヒ、固守シテ其ノ城ヲ
 去ラズ。天命十二年、太祖十三萬ヲ率キテ、寧遠ヲ攻ム。崇煥諸將ヲ會シ、血
 ヲ出シテ誓ヲ書シ、上下死ヲ決シテ固守ス。太祖ノ兵、楯ヲ戴キ進ミ攻メ、
 矢石雨下スレドモ退カズ。崇煥、鬪卒ニ命シ、西洋ノ巨礮ヲ發セシメ、一發
 數百人ヲ傷ク。三日再ビ攻メテ、再ビ却キ、遂ニ圍ヲ解キテ軍餉及ビ舟二
 千餘隻ヲ焚キテ、瀋陽ニ還ル。太祖、兵ヲ起シテヨリ以來、戰捷タザルナシ。
 然レドモ、唯、寧遠ヲ攻メテ志ヲ得ズ、憚ハザルコト數日、八月ニ至リテ、太
 祖崩ズ。時ニ年六十八。

太祖ノ兵ヲ用ヒントスルヤ、必、諸具勸ト共ニ、野ニ適キ、地ニ盡シテ、事ヲ
 議シ、馬ニ上リテ、令ヲ傳フ。五大臣ヲ以テ、政ヲ議シ、十大臣ヲシテ、事ヲ執
 ラシム。令簡ニシテ、迅速ナリ。故ニ事停セズ。罪アレバ、必、罰シ、功アレバ、必、
 賞ス。決シテ、親疎ヲ問ハズ。興京ノ内城ニハ、宗室勳戚ヲ置キ、外城ニハ、宿
 衛ノ親兵万餘ヲ駐ム。此外ニ、遠迎十餘万户ヲ遼河ノ東西ニ散處セシメ、
 以テ、平時ニハ、耕獵ニ從事シ、事アレハ、徵發ニ應セシム。人々、自、兵トナリ、
 又、自、餽ヲ爲ル。故ニ、太祖養兵ノ資ヲ要セズ。軍實ニ窮セズシテ、遂ニ能ク、
 清ノ基業ヲナス。蓋、偶然ニアラザルナリ。

第二章 太宗及ビ世祖。

太祖、已ニ崩ジテ、其ノ第八子皇太極立ツ。之ヲ太宗トイフ。母ハ、孝慈皇后
 納喇氏、葉赫國ノ女ナリ。太宗長シテ、狀貌奇偉、亦能ク兵ヲ用ユ。而シテ、天

性好ミテ典籍ヲ讀ム。其ノ七歲以后ニ至リ、太祖家事ヲ委セシニ、太祖ノ指示ヲ煩サリキトイフ。是ニ至リ、諸貝勒ノ請ニ依リテ、位ニ即ク。時ニ年二十五。改元シテ天聰トイフ。其ノ元年正月、貝勒阿敏ヲシテ、朝鮮ヲ征セシム。是レヨリ、先太祖、明兵ト戰ヒシトキ、朝鮮、姜宏立ヲシテ、兵ヲ以テ、明ヲ助ケシム。太祖、之ヲ富察ノ野ニ破ル。姜宏立、乃、手兵五千ヲ以テ、太祖ニ降ル。太祖、其ノ部將十餘人ヲ、朝鮮ニ歸シ、書ヲ以テ、國王季暉ニ諭シテ、去就ヲ決セシム。朝鮮報ゼズ。却リテ、屢太祖ノ兵ニ抗セリ。太祖崩ズルニ及ビ、使ヲ遣シテ、吊セズ。此ニ至リ、朝鮮ノ叛人韓濶、鄭梅ノ二人ヲ、鄉導トナシ、師ヲ率キテ、鴨綠江ヲ渡リ、先、毛文龍ノ兵ヲ、鉄山ニ破リ、次イテ、義州、定州、及ビ、漢山城ヲ拔キ、其ノ軍民數萬ヲ屠リ、糧百餘萬ヲ焚キ、長驅シテ、青泉江ヲ渡リ、安州ニ克チ、師ヲ平壤ニ進ム。城中ノ士民悉、逃ル。遂ニ大同江ヲ渡リ、中和ニ至リ、二月、黃州ニ次ス。國中ノ士民、大ニ恐レ、援ヲ明ニ求メ、又、使ヲ遣シテ、成ヲ、太宗ニ求ム。明ノ遼東巡撫袁崇煥、舟師及ビ、精兵九千

ヲ遣リ、以テ、朝鮮ヲ援フ。太宗、明將ノ虛ヲ窺ハシ、コトヲ恐レ、親、出デ、兵ヲ遼河岸ニ觀シ、以テ、明兵ニ備フ。時ニ阿敏等ノ兵、已ニ朝鮮ノ國都ニ逼リ、國王李倭妻ヲ携ヘテ、江華島ニ遁レ、使ヲ遣シテ、罪ヲ謝シ、更ニ倭ノ族弟原昌、秦李覺等ヲシテ、馬、及ビ、虎皮、豹皮、綿綢等一萬五千ヲ獻ス。是ニ於テ、又、使ヲ遣シテ、江華島ニ往カシメ、盟約シテ、兄弟ノ國トナル。初メ、朝鮮ノ成ヲ求ムルヤ、諸貝勒、明ト、蒙古トノ兩敵、太宗ノ隙ヲ伺フヲ以テ、其ノ請ヲ許シ、速ニ兵ヲ撤セント欲ス。然ルニ、阿敏、朝鮮ノ城郭、宮殿ノ壯麗ヲ慕ヒ、肯テ、師ヲ旋サズ。是ニ於テ、諸貝勒、密ニ議シ、先、朝鮮ト盟ヲ結ビ、而シテ、后、阿敏ニ告ク。阿敏、己ノ盟ニ預ラザルヲ怒リ、兵ヲ縱チテ、抄畧ス。太宗、阿敏ニ諭シテ、之ヲ止ム。乃、兵三千ヲ分チテ、義州ヲ成ラシメ、此ノ年四月、振旅シテ、還ル。后、倭ノ請ヲ許シ、義州ノ兵ヲ撤シ、更ニ議シテ、春秋ニ歲幣ヲ輸サシム。

明ノ遼東ノ巡撫袁崇煥、使ヲ遣シテ、即位ヲ賀ス。太宗、亦、書ヲ以テ、之ニ報

ズ其書ニ曰ク
 欲山海關以西聽漢人遼河以東我制之滿漢各自爲國原無爭中原之心如
 欲畫疆定約修好息兵其尊卑稱謂我當讓爾主一格其幣我以東珠棧貂明
 以金銀鍛布若干ト然レドモ崇煥太祖ノ朝鮮ニ事アルニ乗ジ使ヲ遣シ
 テ和ヲ議シ以テ其ノ虛ヲ覘ハント欲ス太宗之ヲ知リ和議遂ニ要領ヲ
 得ズシテ止ム五月明ヲ攻メテ大凌河城ヲ取ル時ニ城工未ダ竣ラズ守
 兵皆逃ル進ンデ錦州ヲ攻ム克タズ袁崇煥城内ヲ守リ滿桂尤世録等城
 ヲ背ニシ濠ニ據リ火器ヲ列シテ防戦シ壘堅ウシテ動カズ諸貝勒退カ
 ント乞フ太宗怒リテ曰ク我が軍城ヲ攻メテ克ダズ野戦又勝タズンバ
 何ヲ以テカ國威ヲ張ラント侍衛ニ命ジテ盾ヲ持シ大呼シテ馳セ進マ
 シム諸軍殊死シテ衝突シ貝勒數人傷ヲ負ウテ力戦ス滿桂數矢ニ中リ
 テ退カズ殺場相當ル遂ニ兵ヲ收メテ還ル初メ太祖兵ヲ起シテヨリ明
 軍皆風ヲ望ンデ潰エ敢テ戦守ヲ議スルモノアラズ戦守ヲ議スルハ崇

煥ヨリ始マル然ルニ崇煥魏忠賢ノ黨ニ劾セラレ一旦其ノ職ヲ退キシ
 ガ明ノ崇禎元年魏忠賢ノ誅セラレシヲ以テ復出テ師ヲ督シ數使ヲ遣
 シ來リテ款ヲ議ス然レドモ議遂ニ決セズ三年又大舉シテ明ヲ伐チ崇
 煥ニ沙河ニ逢フ激戦數刻互ニ殺傷アリ時ニ天大ニ暑ク清兵進ム能ハ
 ズ遂ニ反間ヲ放チテ曰ク太宗ノ深ク入ルハ崇煥ト成約アルニ由ルト
 明帝素ヨリ崇煥ノ檀ニ毛文龍ヲ殺セシヲ疑フ此ニ至リ崇煥ヲ召シテ
 獄ニ下シ復孫承宗ヲ起シテ關門ヲ守ラシム時ニ滿桂歩騎四萬ヲ督シ
 テ永定門外ニ陣シ濠棚ヲ嚴ニシテ之ヲ守ル太宗ノ兵宵明ノ旗幟ヲ冒
 リ黎明不意ニ乗ジテ其ノ營ヲ衝キ滿桂戰死ス太祖究追セズ兵ヲ移シ
 テ東ス明年明ノ馬世龍各路ノ兵二十萬ヲ統ベ承宗ノ兵ト椅角シ太宗
 ノ師ヲ班セシヲ機トシ五月滯州ヲ攻メ人ゴトニ一柳ヲ斫リ立ロニ其
 ノ濠ヲ埋メ大礮ヲ發シテ城蝶ヲ摧ク守將圍ヲ潰シテ走ル貝勒阿敏明
 軍ノ勢盛ナルヲ見テ援ケズシテ遁ル遵化ノ諸將亦明軍ニ破ラレ明遂

ニ關内ノ四城ヲ復ス。太宗之ヲ聞キ、テ大ニ怒リ、五年、始メテ大礮ヲ鑄リ、秋、復明軍ト大凌河ニ戰フ。敵陣固ウシテ動カズ。太宗、親、兩翼ノ勁兵ヲ率キ、先、宋偉ガ營ヲ衝ク。營中、火器ヲ發シ、聲天地ニ震フ。左翼礮ヲ避ケ、右翼ノ后ニ隨テ進ム。宗偉殊死シテ、戰ヒ、太宗ノ前鋒、死傷甚多シ。更ニ、左翼ヲ麾キ、大礮、火箭ヲ以テ、吳襄ヲ攻ム。時ニ、黑雲起リ、風西ヨリ來ル。襄ノ軍勢ニ乘ジテ、火ヲ縱チテ、我ガ陣ニ逼ル。忽、大雨アリ。風亦反シ、却テ敵ヲ燬ク。太宗ノ右翼、宋偉ノ營ヲ攻メ、力戰シテ、晡ニ至リ、遂ニ其ノ營ニ入ル。明軍、遂ニ大ニ敗ル。太宗ノ伏兵、其ノ走路ヲ截チテ、之ヲ殲ス。時ニ、副總兵祖太弼、死士百餘人、滿語ニ通ズル者ヲ率キ、服ヲ變ジ、髮ヲ辮ミ、夜、太宗ノ營ニ入リテ、火ヲ放ツ。麾下驚擾ス。侍衛親軍、力戰シテ、之ヲ却ク。大弼ハ、大壽ノ弟ニシテ、萬人敵ト稱ス。嘗テ、五百騎ヲ以テ、錦州ニ突入シ、及テ太宗ノ馬ニ加ヘキ。已ニシテ、大凌河、援盡キ、糧絶エ、人馬ヲ食スルニ至リ、大壽、遂ニ來リ降ル。是レヨリ、先、陝西大ニ饑エ、盜賊蜂起シ、邊軍餉ニ乏シキ者、之

ニ應ジ、東西多事、明廷、遂ニ制スベカラザルニ至レリ。
六年、明、登州ノ參將孔有德、耽仲明等、舟師ヲ以テ來リ降ル。明年、廣鹿島ノ副將尙可喜、亦降ル。三人ハ、毛文龍ノ部將ナリ。袁崇煥、曾テ、文龍ヲ殺セリ。故ニ是ニ及ベリ。九年、貝勒多爾袞、獨、漢國ヲ降シ、朔州ヨリ、寧武ヲ破リ、入リテ、代忻、應、悼ノ四州ヲ略シ、明兵六千人ヲ斬ル。時ニ、外藩四十九、貝勒、尊號ヲ奉ラント乞フ。太宗曰ク、朝鮮ハ、兄弟ノ國ナリ、與ニ議スベシト。乃、英俄爾泰ヲ使トナシ、書ヲ賫シテ、行カシム。英俄爾泰、朝鮮ニ到リ、國王ニ見エント乞フ。王、接見セズ。又、兵ヲ設ケテ、防守ヲ嚴ニス。群臣、之ヲ聞キテ、大ニ怒リ、大兵ヲ起シテ、朝鮮ヲ滅サント請フ。太宗諭シテ止ム。此ノ年、崇德ト改元シ、國號ヲ建テ、大清ト稱ス。時ニ、太宗年四十八、詔シテ天下ニ大賑シ、太祖ヲ尊ビテ、武皇帝ト云ヒ、親戚功臣ヲ封シ、大ニ軍功ヲ賞ス。
太宗再ビ、朝鮮ヲ征セント欲シ、先、明ヲ伐チテ、其ノ援ヲ挫ク。此ノ年、秋、武英郡王、河濟格等ニ命ジ、路ヲ分チテ、獨石口ヲ踰エ、居庸ニ入り、昌平ヲ拔

キ、燕京ニ迫リ、遂ニ十二城ニ克ツ。此ノ間五十六戰、皆勝タザルナク、人畜十八萬ヲ俘ニセリ。二年春、太宗兵十萬ヲ率キテ、朝鮮ヲ征ス。是レヨリ先、太宗明ノ諸島ヲ伐タシト欲シ、兵船ヲ朝鮮ニ徵ス。李倅曰ク、明國猶吾父也。助人之攻、吾父之國可乎ト。命ヲ奉ゼズ。其ノ后、毛文龍ノ部將孔有徳、耿仲明等、來リ降ルニ及ビ、糧ヲ朝鮮ニ徵ス。復命ヲ奉ゼズ。倅乃京畿ヲ始メ、三道ニ十二城ヲ城キ、義州ノ約ニ負ク。此ニ至リ、檄ヲ朝鮮ニ馳セ、敗盟ノ罪ヲ咎メ、睿親王多爾袞ヲ先鋒トナシ、太宗親代善ト進ンデ臨津江ニ至ル。時ニ江水初メテ合シ、六師齊シク濟ル。李倅大ニ駭キ、妻子ヲ江華島ニ移シ、國都ヲ棄テ、南漢山ノ城ヲ保ツ。急ヲ明ニ告ケ、並ビニ國中ニ檄シテ、勤王セシメ、固守シテ、以テ外援ヲ待タシト欲ス。時ニ明ノ國中、流賊四方ニ起リ、隣邦ヲ援クル能ハズ。加フルニ朝鮮諸道ノ援兵、相繼ギテ奔潰シ、各城食糧將ニ盡キントス。清兵勢ニ乘ジテ、南漢山城ヲ圍ミ、四路並ビ進ミテ、諸道ヲ略取シ、且、島城ヲ破リ、王妃王子ヲ獲タリ。李倅乃出デ降リ、

二子ヲ質トシ、清ノ正朔ヲ奉シ、歲時貢獻ヲ約シ、一ニ明國ノ舊制ノ如クス。二月、振旅シテ西セリ。

三年八月、太宗睿親王多爾袞等ニ命ジテ、兩路ヨリ、明ヲ伐タシム。多爾袞、明ノ督師、廬象昇ノ兵ト保定ニ戰ビ、又、鉅鹿ニ戰フ。象昇血戰兩日、丸盡キ、矢折ル、手ツカラ、十數人ヲ格殺シテ死ス。清兵進ンデ、山東ニ到リ、運河ヲ渡リ、濟南ヲ破リ、明ノ德王ヲ執ヘ、凡五十餘城ヲ降シ、俘虜數十萬、白金百餘萬ヲ獲タリ。明ノ德王盛京ニ到ル。太宗命ジテ、書ヲ明ノ崇禎帝ニ贈リ、和ヲ請ハシムレド、遂ニ報ゼズ。

四年春、清兵杏山ヲ圍ム。明ノ副將金鳳、兵三千ヲ以テ之ヲ守ル。清軍大砲ヲ以テ、四面攻撃ス。城兵支フル能ハズ。金鳳遂ニ戰死セリ。明兵ヲ用ヒシヨリ以來、才臣熊庭弼、袁崇煥、孫承宗ノ如キ、皆罪ヲ獲テ、其ノ職ヲ去リ、洪承疇、祖太壽、金鳳等、皆其ノ人ニ非ズ。清適和ヲ請ウテ、兵ヲ息メ、ト欲スレバ、明氣ヲ負ウテ許サズ。故ニ、明兵百戰、皆敗レ、遂ニ天下ヲ失フニ至レ

太宗謂ヘラク、屢大軍ヲ勦スモ、明ノ尺寸ノ地ヲ獲ザルハ、皆山海關ノ阻隔スルニ由ル、之ヲ取ラント欲セバ、先關外ノ四城ヲ取ルニ如カズト、六年、多爾袞、豪格等ニ命ジテ、錦州ヲ攻メシム、二人城ヲ距ル三十里ノ處ニ營シ、私ニ兵士ノ交番家ニ遣ルヲ許シ、又四出シテ、人民ヲ抄略ス、太宗之ヲ聞キテ、大ニ怒リ、鄭親王濟爾哈朗ヲシテ、之ニ代ラシム、濟爾哈朗長圍ヲ築キテ、城ニ逼ル、城將祖太弼病ンデ戰フ能ハズ、錦州急ヲ告ク、明ノ薊遼ノ總督洪承疇、曹變蛟、吳三桂等、八總兵、軍十三萬馬四萬ヲ率キテ、寧遠ニ集リ、進ンテ、松山ニ到ル、太宗之ヲ聞キテ、親大軍ヲ率キテ、赴キ援フ、晝夜程ヲ兼ネ、六日ニシテ到リ、先、筆架關ノ積粟ヲ奪ヒ、敵ノ糧道ヲ絶ツ、太宗敵兵ノ糧ヲキテ、必走ランコトヲ計リ、其ノ夜諸軍ヲシテ、塔山、杏山等ノ諸處ニ潛伏セシメ、親大軍ヲ督シ、橫列シテ以テ待ツ、次夜、吳三桂等ノ六總兵、果シテ列ヲ亂シテ逃グ、清ノ追兵、其ノ后ヲ躡シ、伏兵、其ノ前ヲ邀

ヒ殺傷甚多シ、六總兵皆潰エ、杏山ニ走ル、曹變蛟、松山ニ入り、洪承疇ト共ニ固守シ、屢出デ、圍ヲ突キ、皆遂ニ志ヲ得ズ、變蛟、又牙營ヲ突キ傷ヲ得テ逃ル、太宗、杏山ノ兵、寧遠ニ奔ランコトヲ料リ、伏ヲ設ケテ、之ヲ破リ、前ノ戰、敵兵五萬三千餘人ヲ殺ス、死傷狼藉、海中ノ浮屍、雁鶩ノ如シ、七年、松山ノ副將夏承德、質子ヲ送リテ、內應ヲ爲ス、清兵、城ニ入り、洪承疇、祖太樂等ヲ生禽シ、曹變蛟亦戰死ス、次デ、錦州ヲ降シ、又杏山ヲ陥ル、是ニ於テ、明國大ニ震ヒ、始メテ、和議ヲ決シ、官ヲ遣ハシテ、錦州ニ到ラシム、太宗報セズ、明復前議ヲ申子、使ヲ遣ハシテ、盛京ニ至ラシム、太宗之ヲ召見シ、宴餞禮ノ如クス、然レドモ、和議遂ニ敗レ、十月、貝勒阿西泰ニ命ジテ、明ヲ伐タシム、左翼ハ界山ヨリ入り、右翼ハ厂門ヨリ入りテ、薊州ニ會シ、山東袁州ニ到リ、三府十八州ヲ下シ、俘虜金銀數百萬ヲ獲テ還ル、清兵、去冬、邊ニ入リテヨリ、數月、甲ヲ釋カズ、乃、八年三月ニ至リ、初メテ、營州ニ入りテ、士卒ヲ休メ、鞍ヲ解キテ、馬ヲ春山芳草ノ間ニ縱ツ、明萬曆ヨリ以後、連年、兵

起リ天下兵餉ノ半ヲ竭シテ、以テ關東ニ用フ。而シテ、中原盜賊蜂起シ、到ル所、城ヲ破リ、藩ヲ陷ル。清ノ諸將、此ノ機ニ乘ジ、直ニ燕京ヲ取ラント請フ。太宗之ヲ許サズ。兵ヲ按ジテ、時ノ到ルヲ待ツ。此ノ年八月太宗歿ス。時ニ年五十二。

世祖、名ハ福臨、太宗ノ第六子、母ヲ康和皇太后トイフ。位ヲ繼キ、順治ト改元ス。時ニ明ノ崇禎十七年ナリ。世祖睿親王多爾袞ヲシテ、奉命大將軍トナシ、兵ヲ率ヒテ、中原ヲ經略セシム。是レヨリ、先明ノ流賊李自成、兵ヲ擧ケテ、四方ヲ抄略シ、莽ニ諸郡ヲ陷レ、遂ニ燕京ニ逼リシヲ以テ、明帝、寧遠ノ總兵吳三桂ヲ召シテ、兵ヲ統ベ、京師ヲ衛ラシム。三桂、寧遠ノ兵民五十万ヲ率キテ西シ、日行數十里ニシテ、豐潤ニ到ル。時ニ李自成、已ニ燕京ヲ陷レ、僭シテ帝ト稱シ、國ヲ大順ト號ス。明、三桂、清軍ノ進ムト聞キ、敢テ進マズ。會流賊二万ノ兵、山海關ニ向フ。三桂、乃、兵ヲ回シテ之ヲ擊チ、其ノ衆八千ヲ降シ、急ニ使ヲ遣シ、書ヲ多爾袞ニ贈リテ、援兵ヲ乞フ。時ニ多爾袞、

未、寧遠ニ到ラズ。三桂ノ書ヲ得ルニ及ビ、即日、兵ヲ進メテ、沙河ニ次ス。李自成、自、精銳二十万ニ將トシ、東シ、又、白廣恩ヲシテ、二万騎ヲ將キテ、繞リテ關外ニ出デ、夾ミテ三桂ヲ攻メシム。三桂、先、擊チテ賊ヲ破リ、五百騎ヲ率キテ多爾袞ニ見エ、大軍ノ關ニ入ランコトヲ乞フ。多爾袞、三桂ヲシテ、賊ヲ背ミシム。三桂、乃、關ヲ開キテ、出デ戰ヒ、互ニ殺傷アリ。翌日、大ニ戰フ。賊衆、北山ヨリ海ニ至リテ陣ス。清軍到ル者、賊兵ノ半ニ及ハズ。多爾袞、強敵輕ズ可カラザルヲ以テ、三桂ニ命ジテ、先、中堅ヲ衝カシメ、清軍、銳ヲ蓄ヘテ、以テ待ツ。此ノ日、自成、明ノ太子ヲ狹ミテ、西山ニ屯ス。多爾袞、英豫ノ二王ヲ率キテ、東山ニ上リ、馬ヲ立テ、戰ヲ見ル。賊、兩翼ヲ張リテ、三桂ヲ圍ムコト數重。三桂ノ軍、血戰數十合、呼聲天ニ震フ。午ニ及ビ、塵砂大ニ起リ、兩軍ヲ辨セズ。已ニシテ、風止ミ、英豫ノ二王、鐵騎二万ヲ率ヒテ、横ヨリ陣ヲ突ク。向フ所、皆摧陷ス。賊辮髮ヲ見テ驚キテ曰ク、滿州兵ナリト。陣遂ニ動キ、自成、先走り、賊衆盡ク潰エ、斬獲數万、更ニ三桂ニ命ジテ、二万騎ヲ

以テ之ヲ追ハシム。自成永平ニ至リ、使ヲ遣シテ和ヲ議シ、詐リテ偽太子ヲ還ス。三桂、益兵ヲ進ム。自成、京師ニ入リ、三桂ノ家ヲ屠リ、明ノ諸王ヲ殺シ、宮殿ヲ焚キテ、西ニ遁ル。多爾袞、三桂及ビ英豫二王ニ檄シ、程ヲ兼テ、長驅シ、賊ニ慶都ニ及ブ。賊精兵ヲ以テ、死戦ス。時ニ、大風、忽然トシテ起リ、天地、晝晦ク、賊ノ旌旗、皆折ル。清軍風ニ乗ジテ、奮撃シ、復、大ニ之ヲ敗リ、賊ヲ山西ニ走ラス。是ニ於テ、師ヲ班シ、五月ニ至リ、多爾袞、燕京ニ入リ、捷ヲ盛京ニ奏ス。翌年、自成障關ニ到リ、西安ヨリ、湖廣ニ走リ、豫親王ニ攻メラレ、軍破レ、僅ニ十餘騎ヲ以テ、九宮山ニ匿レ、后、遂ニ、郷民ニ殺サレ、餘衆盡ク降レリトイフ。

世祖、多爾袞ノ捷報ヲ得テ、盛京ヲ發シ、燕京ニ到リ、都ヲ此ノ地ニ定メ、天地ニ發告シテ、皇帝ノ位ニ即ク、詔シテ、中外ニ大赦シ、盡、明ノ弊政ヲ除キ、文武ノ衣冠、暫ク、明ノ制ニ從ハシム。時ニ、順治元年十月ナリ、吳三桂ノ爵ヲ進メテ、平西王トナシ、尋、イデ、大舉シテ、流賊ヲ討センコトヲ議ス。乃、英

親王阿濟格ヲ、靖遠大將軍トナシ、三桂、尙可喜等ト、大同邊外ヨリ、陝西ノ背ニ出デ、豫親王多鐸ヲ以テ、定國大將軍トナシ、孔有德等ト、河南ヨリ、潼關ヲ攻メテ、西安ニ會セシム。此ノ冬、葉臣等出デ、賊ヲ破リ、悉、山西ヲ平ゲ次ギテ、眞定大名等ノ寇ヲ削平シ、畿南始メテ定マル。肅親王亦、軍ヲ濟南ニ駐メ、兵ヲ遣シテ、山東ノ諸郡ヲ定メ、悉、官吏ヲ置ク。豫親王ノ軍、孟津ヲ渡リ、賊將張有聲ヲ走ラシ、陝州ニ進ミ、關外ノ地ヲ收メ、李自成ヲ潼關ニ破ル。豫親王、更ニ師ヲ移シテ、英親王及ビ三桂ト、江南ヲ征ス。是レヨリ先、明ノ福王山松賊ヲ避ケテ、南京ニ至リ、立テ帝ト稱シ、弘光ト改元シ、兵部尙書史可法ヲ召シテ、事ヲ理セシム。多爾袞、屢書ヲ致シ、テ之ヲ招ケドモ、可法書ヲ報ジテ、屈セズ。此ニ至リ、清兵南下スト聞キ、明ノ睢州總兵許定國、瓜州ノ鎮將高傑ヲ殺シテ、降リ、自嚮導ト爲ル。河南ノ群邑、風ヲ望ミテ皆降ル。清軍進ンデ、三河口ヲ陷ル。史可法、高傑ノ兵ヲ楊成ニ收メ、兵ヲ督シテ、清軍ニ當ル。豫親王、屢書ヲ貽リテ、招ケドモ、應セズ。拒守七晝夜、清

軍數百ヲ傷ク。豫親王大ニ怒リ、大礮ヲ發シテ、城ノ西北隅ヲ崩ス。礮聲雷ノ如シ。可法督戰シテ退カズ。清兵積尸ヲ踐ンデ登リ、城遂ニ陥リ。可法遂ニ之ニ死ス。清兵留ルコト十日、殘兵ヲ屠リテ南シ。五月、楊子江ヲ渡リ、遂ニ鎮江ヲ陷レ、南京ニ抵ル。福王已ニ蕪湖ニ走リ、其ノ諸臣留ルモノ、皆迎ヘ降ル。豫親王、軍ヲ城外ニ駐ムルコト十日、始メテ城ニ入り、史可法ヲ祠リテ、其ノ忠ヲ旌シ、瓜州ノ兵十三萬、淮安ノ兵ヲ下シ、又福王ヲ追フ。明ノ靖南侯、薰得功拒キ戰ヒ、矢ニ中リテ死シ。總兵田雄、福王ヲ擁シテ、出デ下リ、江南盡平ク。豫親王、又兵ヲ分チテ、貝勒博洛ヲシテ、明ノ潞王常洵ヲ抗州ニ追ヒ、淮王常清ヲ降シテ、浙西ヲ定ム。豫親王、乃制ヲ承ケテ、南京ヲ攻メテ、江南省トナシ。七月、福王ヲ俘ニシテ凱旋セリ。

此ノ年順治二年、貝勒克德渾ニ命ジテ、平南將軍トナシ、江南ヲ鎮守セシメ、令ヲ海内ニ下シテ、剃髮セシム。其ノ略ニ曰ク、向來剃頭之制不急、姑聽自便者、欲俟天下定、始行此事、朕已籌之熟矣、君猶

父也、民猶子也、父子一体、豈可違異、若不歸一、不幾爲異國人乎、自今布告之後、京城限旬日、直隸各省地方、自都文到日、亦限旬日、盡行剃髮、若惜髮爭辨、決不輕貸。

是レヨリ先明ノ唐王聿鍵、帝ヲ福建ニ稱ス。南都陷ルニ及ビ、鄭鴻達之ヲ奉シテ關ニ入ル。安南伯鄭芝龍、禮部尙書黃道園、勸メテ位ニ即カシメ、隆武ト改元ス。魯王亦、兵部尙書張國維等ニ迎ヘラレ、監國ヲ紹興ニ稱ス。時ニ薙髮ノ令下ルニ當リ、降將王國寶、吳兆勝、李成棟等、勢ニ乘ジテ、虐ヲ逞クセシカバ、明ノ遣臣、兵ヲ起シテ、松江、吳江、宜興、太湖、崇明、崑山、嘉定、嘉興、江陰等ノ諸處ニ據リ、並ニ表ヲ唐王ニ通シ、遙ニ其ノ除拜ヲ受ケ、或ハ遠ク魯王ノ節制ヲ受ケ、清ニ抗スルモノ、十餘万アリ。之ヲ上下江士民ノ師トイフ。次キテ、明ノ益王、建昌ニ據リ、永寧王、撫州ニ據リ、兵部侍郎楊廷麟ハ、贛州ニ據リ、各兵數万ヲ擁シテ、以テ清兵ニ抗ス。之ヲ江西ノ師トイフ。是ニ於テ、清、李成棟、洪承疇、吳兆勝、金聲植等ニ命ジテ、之ヲ討セシム。諸將

兵ヲ率キテ進討シ、轉戰敵ヲ破リ、遂ニ上下江ヲ定ム。
 三年肅親王豪格ニ詔シテ靖遠大將軍トナシ、平西王吳三桂ト共ニ張獻
 忠ヲ四川ニ征シ、且勸博託ヲ征南大將軍トナシ、浙東福建ヲ征セシム。肅
 親王三月ヲ以テ西安ニ到リ、五月漢中ニ入り、進ンデ四川ニ至リ、獻忠ヲ
 西充ニ襲ウテ、之ヲ殪シ、兵ヲ分チテ、賊營百三十ヲ破リ、遂ニ四川ヲ定ム。
 貝勒博親王ハ三月ヲ以テ、杭州ニ到リ、八月金華ヲ攻メ、馬士英、方國安等
 ヲ擒ニシ、進ンデ衢州ヲ破リ、蜀樂安王等ヲ擒ニシテ、浙東ヲ定ム。博託、更
 ニ兵ヲ進メテ、福建ヲ征ス。初メ、唐王ト鄭氏ニ立テラル、ヤ、閩粵ノ兵糧
 皆、其ノ掌握ニ在リ。唐王、以テ、爲ス有ラント欲シ、大學士黃道周ヲ遣シ、關
 ヲ出デ、兵ヲ募ラシム。黃道周、徒手、濟スコト能ハズ。遂ニ婺源ニ敗死セリ。
 時ニ、湖廣ノ總督河騰蛟、所部ノ兵三萬ヲ率キテ、唐王ニ歸ス。唐王大ニ喜
 ビ、騰蛟ヲ大學士ニ進メ、定興伯ニ封ズ。騰蛟、乃、諸將ヲ部署シ、湖ノ南北ヲ
 鎮セシム。所謂十三鎮ナリ。時ニ、楊廷麟、惟リ、江西ニ在リ、兵二萬ヲ以テ、贛

ニ據リ、吉安ヲ陷レテ、之ヲ守リ、軍頗振フ。騰蛟ハ、唐王ニ湖南ニ幸センコ
 トヲ乞ヒ、廷麟ハ、江西ニ幸センコトヲ請ヒ、浙中ノ諸將ハ、衢州ニ幸セン
 ニトヲ請フ。唐王、芝龍ノ恃ムニ足ラザルヲ知リ、亦閩ヲ棄テ、贛ヨリ、楚
 ニ入り、騰蛟ニ倚ラント欲ス。此ノ年、夏、杭州ノ大兵、浙東ヲ渡リ、降將金聲
 桓、吉安、撫州ニ克チ、楊廷麟、萬元吉、退キテ、贛州ヲ守ル。已ニシテ、清軍、浙東
 ヲ定メ、魯王ヲ走ラシ、芝龍、陰ニ欺ク、洪承疇ニ通ジ、海寇ニ託シテ、安平ニ
 還リ、盡、關隘水陸ノ諸防ヲ撤ス。是ニ於テ、清兵、衢州、廣信ノ兩路ヨリ、長驅
 シテ入り、大學士黃鳴峻ヲ、浦城ニ斬ル。時ニ、贛、已ニ清兵ニ逼ラレ、閩ヲ援
 フニ及ハズ。唐王、井州ニ走ル。清ノ前鋒統領努山、明軍ノ旗幟ヲ冒シ、馳ス
 ル。ト七晝夜ニシテ、之ニ及ビ、遂ニ唐王ヲ執フ。王食ハズシテ死ス。芝龍、
 福州ニ到リ、降ヲ乞フ。是ニ於テ、清師、已ニ福建ヲ定メ、復、軍ヲ遣シテ、惠潮
 贛州ノ兩路ヨリ、粵ヲ攻ム。明ノ兩廣總督丁魁楚、湖廣總督河騰蛟等、桂王
 由榔ヲ擁シ、帝ヲ肇慶ニ稱セシメ、永曆ト改元セリ。初メ、蘇觀生、魁楚ト議

合ハズ別ニ唐王ノ弟聿鏗ヲ立テシガ旬日ニシテ敗レ、惟桂王西南ニ據
 リテ十餘歳ニ至ル、其ノ間李成棟尙可喜等ニ攻メラレ、王遂ニ孤殘、自支
 ヘズ各所ニ奔竄シ、遂ニ緬甸ニ入ル。聖祖ノ康熙元年、吳三桂、緬甸ヲ征ス
 ルニ當リ、緬甸奔應ニ執ヘラレ、遂ニ三桂ニ殺サレヌ。
 是レヨリ先、桂王ノ亂ヲ避ケ、桂林ニ走ルヤ、李成棟之ヲ追撃シテ、王ヲ武
 崗ニ走ラシ、以テ廣東ヲ定ム。已ニシテ靖南王耽精神、明兵ヲ進メ、武崗ヲ
 攻メテ、桂王ヲ廣西ニ走ラス。五年二月、清軍進ンデ湖南ヲ定ム。時ニ、金聲
 桓、李成棟ノ變起リ、廣西、廣東皆反キテ、明ニ附ク。是ニ於テ、清軍退キ、兵ヲ
 分チテ、江西ニ赴キ、孔有德師ヲ班シテ、京ニ回リ、總兵徐勇ヲ留メテ、長沙
 ヲ守ラシム。初メ、金聲桓ノ江西ヲ徇ヒ、李成棟ノ廣東ヲ徇フルヤ、王貝勒
 多爾
 遜、藩ノ舊臣、章天子、修養甲ヲシテ、事ヲ偕ニセシム。而シテ、攻城野戰
 ノ功皆、聲桓、成棟ノ力ナリ。然ルニ、事平クニ及ビ、章天子、江西ニ巡撫タリ、
 修養甲、廣東ニ總督タリ、聲桓、成棟ハ、總兵提督トナリテ、其ノ節制ヲ受ク

ルニ過ギズ。二人、快々トシテ樂マズ、天子及ビ巡按董成學、尤貨ヲ好ミ、武
 士ニ驕ル。此ノ春、聲桓、遂ニ副將王得仁ト與ニ、巡按ヲ殺シ、江西ヲ以テ反
 ス。李成棟之ヲ聞キ、總督修養甲ヲ脅カシテ、亦廣東ニ據リテ叛ス。並ニ髮
 ヲ蓄ヘ、衣冠ヲ易ヘ、檄ヲ遠近ニ移シテ、表ヲ桂王ニ通シ、永歷ノ年號ヲ奉
 シ、各兵十餘万ヲ擁シ、上游ニ據ル。是ニ於テ、江寧震動ス。明ノ遺臣、亦諸方
 ニ起リ、騰蛟ハ湖南ニ起リ、堵胤錫ハ衡州ヲ取り、進ンデ長砂ヲ圍ム。守將
 徐勇、兵三千ヲ以テ敵ノ數万ニ當リ、晝夜拒戰シテ之ヲ却ク。其ノ他、李占
 春、楊大展等、各兵數万ヲ率キテ、遙ニ相應シ、聲勢頗張ル。然レドモ、聲桓、成
 棟ノ衆、皆流賊ノ餘、遂ニ遠略ヲナサズ。清廷、征南大將軍、譚泰、鄭親王、濟時
 等ニ命ジ、耿尙、二王及ビ孔有德等ノ兵ト偕ニ、賊ヲ討タシム。初メ、聲桓ノ
 反セシトキ、惟贛州亂ニ從ハズ。是ヲ以テ、聲桓、王得仁ト共ニ、九江ヲ陷レ、
 又贛ヲ攻ム。時ニ、清軍二十万水陸並ヒ進ミ、九江ヲ復シ、南昌ヲ擣ク。聲桓
 回リテ之ヲ救ヒ、城ニ入リテ拒守ス。清兵、長濠ヲ掘リテ、之ヲ圍ム。得仁、兵

二万ヲ引テ、直ニ九江ニ赴キ、清兵ノ餉道ヲ絶タントシテ、成ラズ。十月、南昌糧盡キ、成陳大舉シテ、譚ヲ攻メ、軍敗レテ、信豐ニ走ル。翌年正月、南昌陥リ、金聲桓、王得仁等、皆死シ、李成棟ノ師、復信豐ニ潰ユ。成棟、大ニ醉ヒテ、馬ニ上リテ、河ヲ渡ル、甲重クシテ、人馬共ニ溺死ス。是ニ於テ二人、皆滅ビ、餘賊相尋ギテ平ク、其ノ后、蜀賊孫可望、李定國ノ乱アリ、共ニ大兵ヲ擁シテ、一時娼媼ヲ極メシト雖、遂ニ破レ走リ、孫可望ハ清ニ降リ、李定國ハ百折屈セズ、遂ニ緬甸ニ走ル。是ニ於テ、天下漸定レリト雖、鄭成功獨リ節ヲ持シテ降ラズ。

鄭成功ハ、芝龍ノ子ナリ、我が國ノ正保三年、芝龍長崎ニ來リテ、將軍家光ニ書ヲ奉リ、以テ、援兵ヲ乞フ。幕議之ヲ許サズ。芝龍曾テ、肥前ニ在リ、平戸ノ人田川某ノ女ヲ娶リテ、一子ヲ生ム。是レ則、成功ナリ。成功父ニ從ヒ、明ニ赴キ、唐王聿鍵ヲ奉シテ、兵ヲ起ス。唐王曾テ、成功ノ背ヲ撫シテ曰ク、惜ムラクハ、一女ノ卿ニ配スルナキヲ、卿當ニ忠ヲ我が家ニ盡スベシト。尋

イデ、姓ヲ朱ト改メ、忠孝伯ニ封セララル。中外皆、國姓爺トイフ。父芝龍、清ニ降ラントスル時、成功痛哭シテ諫ム。芝龍聽カズ。是ニ於テ、慷慨兵ヲ募リ、孔廟ヲ拜シ、巨艦ニ乗シテ去ル。兄ノ子鄭彩、鄭聯等ト、兵ヲ擁シテ、浙閩ノ間ニアリ。唐王滅ブルニ及ビ、使ヲ湖南ニ遣シテ、桂王ニ朝シ、其ノ正朔ヲ奉シ、延平郡王ニ封セララル。此ノ時ニアタリ、閩師盡、成功ニ降リ、東南海寇皆、其ノ號令ヲ聞ク。成功、閩ニ在リ、清師舟山ヲ攻ムルノ隙ニ乘ジ、大舉シテ、沿海ニ寇シ、進シテ、章州ヲ圍ム。次イデ、清ノ都統金礦ト海澄ニ戦ヒ、大ニ其ノ軍ヲ破リ、戰艦三百ヲ、吳淞口ニ奪フ。時ニ、張名振、張煌言等、魯王ヲ奉ズルナリト雖、明ノ遺臣漸、亡ビ、獨、成功海上ニマリテ、雄ヲ稱セルノミ。十年ニ至リ、世祖芝龍ニ命ジテ、書ヲ作り、其ノ諸子ヲ招カシム。彩、聯等皆、降ルモ、成功拒ミテ、命ヲ奉ゼズ。更ニ福州ヲ攻メ、舟山ヲ破リテ、之ニ據ル。十五年、成功、清軍來リ、攻ムルト聞キ、大ニ兵備ヲ修メ、鎮江ヲ取り、金陵ニ入り、撤ヲ遠近ニ移ス。近隣ノ諸郡風ヲ望ミテ、款ヲ納レ、東南大ニ震フ。世

祖六師ヲ集メ、南苑ニ幸シテ、親征ヲ議ス。時ニ崇明ノ總兵梁化鳳成功ノ不意ニ乗ジテ、夾撃セシガバ、成功大ニ敗レ、甘輝之ニ死シ、海艘五百ヲ失フ。成功遂ニ餘艦ヲ以テ海上ノ權ヲ占ム。此ノ冬、劉之源ヲ以テ、鎮海大將軍トナシ、鎮江ニ駐防セシム。清兵モト、水戰ニ習ハズ、暈眩船ニ堪ヘズ。成功之ニ乗ジ、橫擊遂ニ清軍ヲ破レリ。然レドモ、成功海上ニ崎嶇スル十餘年、遂ニ志ヲ得ズ。乃、台灣ニ據リテ、恢復ヲ謀ラント欲ス。張煌言、成功ニ書ヲ貽リテ曰ク、奔此十數万生靈、不收而爭夷島乎、且安一隅、將來金厦兩門、亦不可守也ト。成功已ニ、台灣ヲ得テ、紅夷ノ襲來ヲ虞リ、内渡ニ暇アラズ。爲ニ沿海稍事ナキヲ得タリ。聖祖ノ康熙二年、成功、臺灣ニ卒シ、明家三百年、忠臣ノ殿トナル。其ノ后、子鄭經ヲ經テ、孫克塽ニ至リ、兄弟鬪ヲ爭ヒ、遂ニ兄克塽ヲ殺セリ。克塽尙、幼弱ニシテ、事ヲ決スル能ハズ、水師提督臺灣ヲ討ズルニ會シ、克塽出テ降ル。是ニ於テ、鄭氏三世、凡三十八年ニシテ、明ノ遺族盡キ、中國盡清ノ版圖ニ歸セリ。

是レヨリ先、順治十八年正月、世祖養心殿ニ崩ズ。時ニ年二十四。帝篤ク儒術ヲ好ミ、手ニ卷ヲ釋テズ。燭ヲ秉リテ、夜半ニ至ル。曾テ、禮部ニ諭シテ曰ク、今天下漸定、朕將與文教崇儒術以開太平ト。天下ニ詔シテ遺書ヲ購求シ、大清律令ヲ定メ、資政要覽内則衍義ヲ制シ、又、祖宗聖訓孝經衍義等ノ諸書ヲ編セリ。蓋、清ノ文運、世祖ヨリ、漸ク隆盛ニ赴ケリ。事ハ、載セテ學術ノ部ニアリ。

第三章 聖祖ノ治蹟

聖祖、世祖ニ嗣キテ立ツ。諱ハ、玄暉。世祖ノ第三子、母ハ、孝慈皇后、修氏ノ出ナリ。世祖、大漸ナル時立テ、皇太子トナリシガ、是ニ至リテ、位ニ即キ、其ノ明年、康熙ト改元セリ。初メ、太祖、兵ヲ起シテヨリ、三世大凡五十餘年ヲ經テ、聖祖ニ至リ、流賊ヲ征シ、明ノ遺族ヲ平ケ、遂ニ海内ヲ一統シ以テ、帝業

ヲ大成セリ。故ニ史家帝統ヲ數フル聖祖ヲ以テ清ノ第一世トナス。康熙八年平南王尙可喜上疏シテ藩ヲ撤シテ遼東ニ歸老センコトヲ請フ。是レヨリ先可喜老イテ病ミ兵事ヲ以テ其ノ子之信ニ屬ス。而后子ノ爲ニ制セラレ一令ヲ出ス能ハズ。此ニ至リ其ノ客金光ノ計ヲ用ヒ以テ此ノ請ヲ爲ス。帝之ヲ許シ盡其ノ藩兵ヲ撤シテ籍ニ回ラシム。時ニ平西王吳三桂ハ雲南ニ在リ靖南王耿精忠ハ福建ニ在リ。帝尙可喜ノ請ヲ許シ、ヲ聞キ俱ニ自安ンゼズ。二人亦上疏シテ藩ヲ撤センコトヲ請ヒ以テ朝旨ヲ探ル。帝廷臣ニ勅シテ之ヲ議セシム。皆曰ク從フ勿キニ如カズト。惟戸部尙書米思翰兵部尙書明珠刑部尙書莫洛等藩ヲ徙スベキヲ主張ス。帝以爲ラク藩鎮久シク重兵ヲ握ルハ國家ノ利ニ非ズ。且三桂ノ子精忠ノ諸子皆京師ニ宿衛セシヲ以テ諒ニ能ク變ヲナス無シト。遂ニ其ノ請ヲ允シ藩ヲ山海關外ニ徙ス。三桂實ハ己ノ功ニ矜リ朝庭必其ノ藩ヲ徙サルヲ期セリ。命下ルニ及ビ大ニ愕キ陰ニ士馬ヲ勒シ郵傳ヲ禁遏シ密ニ其ノ子應熊ヲ京都ヨリ召ス。應熊肯テ行カズ。使者乃庶子世璠ヲ携ヘテ滇ニ歸ル。

十二年冬三桂遂ニ雲南ニ據リテ叛シ巡撫朱國治ヲ殺シ檄ヲ遠近ニ移シ自天下都招討兵馬大元帥ト稱シ明年ヲ以テ周ノ元年トナシ髮ヲ蓄ヘ衣冠ヲ易ヘ旗幟皆白シ貴州巡撫曹申吉雲南提督張國忠等皆賊ニ從フ。變報京ニ到ル。舉朝震動ス。大學士索額圖諸臣ノ撤藩ニ贊セシ者ヲ誅セント乞フ。帝許サズ。勅シテ吳三桂ノ官爵ヲ削リ中外ニ宣示シ其ノ子應熊及ビ家屬ヲ獄ニ下シ承順郡王勒爾錦ニ命ジテ寧南靖寇大將軍トナシ師ヲ統ベテ荊州ニ至リ又西安將軍瓦爾喀ニ命ジテ騎兵ヲ率キテ蜀ニ赴カシメ大學士漢洛ヲシテ陝西ノ軍事ヲ經略セシム。三桂亦諸將ヲ遣シ四出誘煽セシカバ襄陽總兵楊嘉來襄陽ヲ以テ賊ニ應ジ廣西將軍孫延齡桂林ヲ以テ降リ四川ノ巡撫羅森等四川ヲ以テ賊ニ應セリ。福建ノ耿精忠之ヲ聞キテ亦反ス。是ニ於テ六省皆陷リ賊勢日ニ盛ンナリ。

時ニ官軍荆襄武昌宜昌ノ諸郡ニ雲集スルモ敢テ江ヲ渡リ賊鋒ニ當ル
 モノナシ時ニ西藏ノ達賴喇嘛奏シテ曰ク三桂モシ窮蹙シテ降ヲ乞ハ
 ヲ其ノ死ヲ釋サルベシ尙竟ニ鷓鴣張セバ土ヲ裂キテ兵ヲ罷ムルニ如カ
 ズト蓋三桂達賴ニ諷シテ已ニ代リテ請ハシメ以テ子孫ノ誅ヲ免レン
 ト欲セシナルベシ帝嚴斥シテ許サズ詔シテ三桂ノ子吳應熊ニ死ヲ賜
 ヒ西洋人南瓊仁ニ命ジテ多ク火礮ヲ制シテ行軍ノ用ニ利セシム三桂
 兵ヲ分チテ諸州ヲ陷レ三十餘城ヲ降ス帝乃貝勒尙善ニ命ジテ安遠靖
 寇大將軍トナシ順承郡王ヲ助ケ分チテ岳州ノ賊ヲ討タシメ安親王岳
 樂ニ命ジテ定遠平寇大將軍トナシ江西ニ出デシメ又簡親王喇布ヲ以
 テ揚威大將軍トナシ師ヲ統ベテ江南ヲ鎮セシム此ノ時ニ當リ京師ノ
 禁旅皆南征シ宿衛ノ空虛ナルニ乘ジ蒙古察哈爾ノ反アリ大學士圖海
 ニ命ジテ滿州ノ家丁數萬ヲ發シテ之ヲ征セシム圖海塞ヲ出デ賊巢ニ
 到リ令ヲ下シテ曰ク察哈爾ハ元ノ後裔ニシテ珍寶山積ス爾等之ヲ破

ラハ富ハ百倍セント衆踴躍シテ一百ニ當ラザルナシ遂ニ之ヲ破リテ
 歸ル時ニ官軍漸勢ヲ得康親王傅貝子福建ヲ取ル初メ精忠ノ事ヲ起ス
 ヤ海寇鄭經ト約シテ潮惠ヲ圍ム此ニ至リ精忠鄭經ト隙ヲ生ジ遂ニ官
 軍ニ乘ゼラル精忠ノ兵屢敗レ台灣海寇復虛ニ乘ジテ其ノ后ニ逼ル精
 忠爲ス所ヲ知ラズ使ヲ遣シテ降ル是レヨリ先討寇將軍尙之信反シテ
 三桂ニ降り其ノ父尙可喜ヲ幽シ三桂ノ招討大將軍ノ號ヲ受ケ幟ヲ易
 ヘ服ヲ改メシガ父可喜ノ憤死スルニ及ビ軍民ヲ率キ薙髮シテ歸順ス
 三桂之ヲ攻メテ敗績ス圖海亦定遠大將軍トナリ往キテ兩師ニ莅ミ王
 輔臣ヲ平涼ニ破リ虎山墩ヲ奪セテ輔臣ヲ降ス三桂亦張勇ニ破ラレ漢
 中ニ還ル此ノ后安親王岳樂將軍勒爾錦等屢賊ト戰ヒ互ニ勝敗アリト
 雖官軍遂ニ江西廣東福建等ヲ定メ賊ノ境宇日ニ蹙ル三桂時ニ年六十
 七財用耗竭シ川湖ノ賦稅兵餉ニ供スルニ足ラズ情竭キ勢屈シ四方ニ
 輕セラレシコトヲ恐レ乃帝號ヲ竊ミテ自娛マント欲ス其ノ下亦爭ウ

テ勸進ス。遂ニ十七年三月朔ヲ以テ位ニ即キ、昭武ト改元シ、國ヲ大周ト稱シ、長沙ヨリ衡州ニ徙リ、改メテ定天府トナシ、百官ヲ置キ、諸將ヲ封ズ。帝之ヲ聞キ、諸軍ノ曠日持久ヲ憤リ、親征ヲ議ス。已ニシテ三桂死スト聞キ、其ノ議遂ニ罷ム。三桂ノ孫世璠滇ヨリ到リ、始メテ喪ヲ發シ、僭號シテ、洪化ト改元ス。是ニ於テ諸將進ンデ賊軍ヲ討ズ、世璠遂ニ敗レテ、雲南ニ奔リ、尙兵數万ヲ擁シ、象ヲ以テ陣ニ交フ。官軍進擊シテ、大ニ之ヲ敗リ、象反リテ賊軍ヲ踐ミ、擒斬殆ト盡ク。然レドモ賊城ニ入リテ死守ス。官軍長圍ヲ築キテ、之ヲ攻ム。城中食盡キ、援絶チ、内應スルモノアリ。世璠遂ニ爲スベカラザルヲ知リテ自殺ス。官軍世璠ノ首ヲ函シテ闕下ニ獻ジ、三桂ノ骸骨ヲ折シテ海内ニ頒示シ、雲南、川湖是ニ至リテ、全ク平ク。清廷命ジテ師ヲ班シ、天下ニ大赦ス。時ニ康熙二十年十月ナリ。

帝、已ニ吳三桂ノ乱ヲ平グ、尋イデ又水師提督施琅ニ命ジテ台灣ヲ擊チテ、鄭克塽ヲ下ス。康熙二十七年、武昌ノ親兵夏逢龍ノ反アリシガ、湖廣提

督徐治都討チテ、之ヲ平グ。其ノ翌年、俄羅斯來リ、黑龍江ノ經界ヲ議定ス。是レヨリ先、俄羅斯東部ノ羅刹火器ヲ以テ來リ、黑龍江城ニ據ル。清兵之ヲ圍ム。死守シテ去ラス。時ニ荷蘭ノ貢使、京師ニ在リ、本國ハ俄羅斯ノ近隣ナリト稱ス。乃書ヲ蘭使ニ托シテ、其ノ國汗ニ達ス。明年、俄羅斯汗、上疏シテ、和ヲ乞フ。命ジテ兵ヲ撤セシム。此ノ年、使者果シテ到リ、始メテ清ノ大臣索額圖ト、黑龍ニ會議シ、石ヲ立テ、條約七條ヲ定メ、五体ノ文ヲ、黑龍江ノ西岸ニ勒ス。是ニ於テ、東北數千里化外不毛ノ地、盡、版圖ニ入ル。俄羅斯ハ、即露西亞國ナリ。

康熙二十九年、帝親厄魯特ノ噶爾丹ヲ征ス。噶爾丹勇略アリ、大兵ヲ擁シテ、諸郡ヲ併吞シ、天山南北ノ土地ヲ有シ、更ニ喀爾喀ヲ占領セント欲シ、兵ヲ阿爾泰山ニ集メテ、其ノ隙ヲ伺フ。會喀爾喀ノ首長、隣會ト事ヲ生セシカバ、噶爾丹之ニ乘ジテ、兵三万ヲ發シテ、喀爾喀ヲ襲撃ス。喀爾喀之ヲ拒キテ、勝タズ、奔リテ、清ニ降ル。次イデ噶爾丹モ亦入貢セリ。帝諭シテ、喀

爾喀ノ侵地ヲ返サシメントス。噶爾丹詔ヲ奉セズ。却リテ喀爾喀ヲ討ズルヲ名トシテ來犯シ、烏魯會河ニ至ル。此ノ年六月、帝親征ヲ議シ、詔シテ裕親王福善ヲ左翼トナシ、古北口ヨリ出デ、恭親王常寧ヲ右翼トナシ、喜峯口ヨリ出デ、大口烏蘭布通ニ戰フ。虜騎數万、山下ニ陣シ、万駝ノ足ヲ縛シテ、地ニ臥セシメ、背ニ箱梁ヲ加ヘ、濕壇ヲ以テ、之ヲ覆ヒ、以テ柵ノ如クシ、士卒梁ヨリ、矢銃ヲ發ス。之ヲ駭城トイフ。官軍、河ヲ隔テ陣シ、火器ヲ以テ、前列トナシ、遙ニ中堅ヲ攻メ、聲天地ニ震ヒ、晡ヨリ暮ニ至リ、駝遂ニ銃丸ニ斃レ、虜陣大ニ乱ル。官軍先ヲ爭ヒテ、之ヲ陷レ、左翼亦之ヲ遠リテ横擊シ、遂ニ其ノ壘ヲ破ル。賊夜ニ乘ジテ走リ、科布多ニ還リシモノ、僅カニ數十人ニ過キズトイフ。會帝不豫ナリ、八月師ヲ班ヘス、其ノ師噶爾丹塞ヲ歎キ、罪ヲ謝シ、降ヲ乞フ。而シテ、益喀爾喀ニ侵入シ、清ノ使臣ヲ殺シ、內蒙古ノ各部ヲ誘ヒ、復、入寇ヲ計ル。帝之ヲ知リ、三十五年、復、噶爾丹ヲ征ス。將軍薩布素ヲシテ、東路ヨリ出デ、大將軍費揚古ヲシテ、西路ヨリ出デシ

メ、帝親、禁旅ヲ統ヘ、中路ヨリ出デ、皆瀚海ニ赴キテ、夾攻センコトヲ約ス。己ニシテ、師虜境ニ至リ、東路ノ軍未ダ至ラズ。加之、土地茫漠、糧運給カズ、士馬餒困ス。時ニ、俄羅斯來リテ、虜ヲ助クト、傳フルモノアリ。大學士伊桑阿力師ヲ班サンコトヲ乞フ。帝怒リテ曰ク、朕、天地宗廟ニ祭告シテ、出デ、征ス、今虜ヲ見ズシテ、返ラバ、何ヲ以テカ、天下ニ對センヤ、且、大軍一タビ退カバ、虜銳ヲ盡シテ、西路ニ向ハン。亦、殆カラズヤト。遂ニ、馳セテ、克魯倫河ニ到リ、手ツカラ、陣圖ヲ畫キテ、方畧ヲ指示ス。噶爾丹、帝ノ陣營甚、整備セルヲ望見シ、大ニ驚キ、營ヲ拔キテ、夜逃ル。帝前鋒ヲ率キテ、之ヲ追フ。時ニ、西路ノ軍虜ニ、眼莫多ニ逢フ。將軍孫思克、綠旗ノ兵ヲ以テ、山頂ヨリ銃擊ス。虜矢丸ヲ冒シテ、塵戰シ、暮ニ至リテ、退カズ。費揚古之ヲ望ミ、沿河ノ伏騎ヲ麾キテ、橫衝シテ、陳ニ入り、山上ノ軍ト奮呼夾擊シ、斬首數千級、虜三千人ヲ降シ、可汗ノ妃可敦ヲ殪ス。賊遂ニ大ニ敗レ、噶爾丹數十騎ト共ニ逃ル。帝功ヲ地諾山ニ勒シテ、凱旋ス。三十六年ニ至リ、帝親征シテ、寧

夏ヨリ、兵ヲ進ム。噶爾丹、進退惟谷リ、遂ニ藥ヲ仰ギテ死シ。所部盡降ル。是レヨリ、阿爾泰山以東、皆清ノ版圖ニ歸セリ。

帝、天性勇武ニシテ、南征北伐、已ニ海内ヲ一統シ、又西域ヲ服ス。偶、西藏ノ達藍占巴ノ反アリ、帝、乃、皇子允禮ヲ以テ、撫遠大將軍トナシ、岳鐘琪ヲ以テ、副將トシ、進ンデ賊ヲ破リ、遂ニ西藏ヲ平グ。其翌六十年、台灣ノ民、朱一貴反ス。水師提督施世驥等、討ツテ之ヲ平グ。是レヨリ、先知府王珍聚斂ヲ務メ、民ヲ虐ケ、私ニ山木ヲ伐リシ民、二百人ヲ捕ヘテ、之ヲ刑ス。鳳山ノ奸民、朱一貴ヲ奉ジテ、亂ヲ謀リ、屢、官軍ヲ破リ、遂ニ全台ヲ陷ル。一貴、自中興王ト稱シ、年號ヲ建テ、永和ト稱シ、大ニ群賊ヲ封ズ。民謠ソテ曰ク、頭冠明朝冠、身衣清朝衣ト。時ニ、水師提督施世驥、廈門ニ在リ、警ヲ聞キテ、先發シ、總兵藍廷珍ニ湖澎ニ會ス。其ノ兵一萬二千、舟六百艘アリ。時ニ、賊營互ニ相攻撃ス。世驥之ニ乘ゼント欲シ、澎湖ヲ發シ、鹿耳門ヲ實キ、廷珍、先、上陸シテ、賊ヲ破リ、安平鎮ヲ取ル。世驥尋キテ至リ、大ニ賊ト戰フ。賊兵數萬人、

牛車ニ駕シ、盾ヲ列シテ、陳トナシ、砲丸ヲ冒シテ、死突ス。廷珍、戰ヲ督シ、林亮ノ軍ト夾攻セシカバ、賊敗レ、城ニ入りテ出テズ。世驥、令ヲ下シ、殺掠ヲ禁ズ。降ル者、皆、大清良民ノ幟ヲ、門ニ樹テ、風ヲ望ミテ解散ス。廷珍、又、奇伏ヲ設ケテ、西港ノ賊ヲ破リ、北クルヲ逐フテ、府城ニ到ル。世驥、亦、西南ノ賊ヲ破リ、同日、城ニ抵ル。一貴、遂ニ灣裏溪ニ走リ、村民ニ擒ニセラレ、京師ニ檻致セラル。ヨツテ、事平クヲ得タリ。此ノ如ク、帝ノ世、威武ヲ四方ニ輝セシノミナラス、亦、能ク、學ヲ好ミ、儒ヲ尙ビ、大ニ文學ヲ獎勵シ、天下ソ、鴻儒ヲ集メテ、佩文韻府、淵鑑類函、康熙字典等ヲ編纂セシム。文運ノ盛ナル此ノ時ヲ最トス。蓋、清ハ、滿洲ヨリ起リシヲ以テ、漢人動モスレバ、服セザル傾向アルヲ察シ、夙ニ儒學ヲ獎勵シ、以テ、人心ヲ收攬セント勉メシナルベシ。康熙六十一年、帝、遂ニ疾ヲ獲、大漸ナルニ及ビ、諸皇子、及ビ、理藩院尙書隆拜ヲ召シテ曰ク、皇四子深ク、朕ニ似タリ、必、克ク、大統ヲ承ガント。此ノ日崩ズ。時ニ、年六十九。

第四章 世宗及高宗ノ外征

世宗名ハ胤禛。聖祖ノ第四子ナリ。母ハ、皇后吳雅。帝初メ、多羅貝勒和碩雍親王ニ封セラレシガ、此ニ至リテ、大統ヲ繼キ、雍正ト改元ス。元年、青海ノ羅木藏丹津反シ、諸部ヲ誘降シ、自達頼渾臺吉ト號シ、兵ヲ發シテ、巳ニ從ハザルモノヲ擊チ、西寧ヲ犯シ、牛馬ヲ掠メ、官兵ニ抗ス。帝乃、川陝總督年羹堯ニ命ジテ、撫遠大將軍トナシ、西寧ニ駐メ、四川提督岳鍾琪ニ命ジテ、奮威將軍トナシ、軍務ニ參贊セシム。年羹堯、兵ヲ分チテ、其ノ内犯ヲ防キテ、要路ヲ截チ、復、諸將ヲ遣ハシテ分チテ、西川歸德等ノ諸堡ヲ攻メテ、之ヲ陷ル。羅木藏丹津、始メテ悞レ、罪ヲ請フモ許サズ。二年二月、岳鍾琪進ンテ、松藩ヨリ西寧ニ至リ、遂ニ、華里山ニ達ス。五堡環峙、寂トシテ人聲ナシ。鍾琪曰ク、必、伏アラント。之ヲ求ム。果シテ伏起ル。鍾琪乃、擊チテ、之ヲ破リ、虜萬餘人ヲ獲、三嶺十七寨ヲ奪ヒ、兵ヲ率キテ、營ニ歸ル。年羹堯曰ク、巳ニ旨ヲ奉ジ、公ニ命ジテ、馬步萬七千ヲ領セシム。四月、草生ズル時ヲ期シテ、

直ニ青海ヲ擣カント。鍾琪曰ク、青海ノ虜十萬アリ。我が軍萬七千ヲ以テ、之ニ當ル。宜シク、其ノ備ヘザルニ乘ズベシ。賊散ジテ、我ヲ誘ハ、反ツテ四面敵ヲ受ク。計ニ非ズ。願クハ、精兵五千ヲ假リ、馬ハ、之ニ倍セント。羹堯之ヲ帝ニ奏ス。帝之ヲ壯トシ、詔シテ、鍾琪ニ專任ス。鍾琪乃、兵ヲ率キテ、塞ヲ出テ、喀刺烏蘇ニ到リ、虜千餘人ヲ斬リ、北ヲ追ウテ、二百餘人ヲ擒ニシ。勝ニ乘ジテ、進ム。途ニ、野獸ノ群走スルヲ見前途ニ、賊ノ偵騎アルヲ知リ、亟ニ、兵ヲ麾キテ進ム。果シテ、賊數百ニ逢ヒ、之ヲ殪ス。遂ニ追ウテ、崇山ニ入リ、賊二千ヲ殺シ、賊ノ哨操ヲ殪ス。官軍蓐食シテ、霄進ミ、黍明、其ノ帳ニ到ル。賊未、起キズ。馬皆、銜勒ナシ。賊食皇、大ニ潰エ、羅ト、藏丹津、番婦ノ衣ヲ衣テ、白駝ニ騎シテ遁ル。官軍追窮日ニ三百清里、數日ニシテ、桑路海ニ到ル。紅柳、天ヲ蔽ヒ、道盡クルヲ以テ還ル。賊奔リテ、準噶爾ニ投ズ。乃、其ノ母、弟、妹等ヲ俘ニス。此ノ役、清軍五千ヲ以テ、嶮ヲ冒シテ、深ク敵地ニ入り、往返兩月ヲ出デズシテ、台吉十五人ヲ擒ニシ、賊八萬人ヲ斬リ、男女數萬口

ヲ俘ニシ、軍器、駝馬、甲帳ヲ獲ル。勝ケテ算フ可カラズ。青海平クヲ以テ、天下ニ大赧シ、年羹堯ヲ一等公、岳鐘琪ヲ三等公ニ封ズ。羅卜藏丹津ノ奔リテ、準噶爾ニ投スルヤ、策妄拉布坦之ヲ納ル。朝廷使ヲ遣シ、之ヲ獻ゼシム。詔ヲ奉ゼス。已ニシテ、策妄死シ、其子噶爾丹策零立ツ。狡黠ニシテ、兵ヲ好ミ、屢邊ヲ犯ス。七年三月ニ至リ、傳爾丹ヲ以テ、靖遠大將軍トナシ、北路ヨリ出テ、岳鐘琪ヲ、寧遠大將軍トナシ、西路ヨリ出テ、以テ、準噶爾ヲ征セシム。帝親授鉞ノ禮ヲ行ヒ、其ノ軍ノ啓行ヲ見ル。時ニ、大雨注クガ如ク、旌纛皆濕フヲ見テ、不祥トナスモノアリ。此ノ年四月、傳爾丹進ンデ、科布多ニ到ル。噶爾丹策零、兵三萬ヲ以テ、北路ヲ犯ス。先、虜ヲシテ、詭リ言ハシムラク、厄魯特ノ大隊、未至ラズ、前隊千餘、駝馬二萬、博克托小領ニアリ、此ヲ距ルコト三日程ト。傳爾丹勇ニシテ、謀寡シ。遂ニ、之ヲ信シ、萬餘人ヲ以テ之ヲ襲フ。副都統定壽等、諫ムレドモ、聽カズ。虜乃、弱兵ヲ以テ、清軍ヲ誘ヒ、兵二萬ヲ谷ニ伏シ、胡笳、俄ニ起リ、高キニ上リテ、衝突シ、清軍ノ前鋒四十ヲ

圍ミ、萬矢雨集シ、衆募敵スル能ハズ。傳爾丹、后軍ヲ以テ往キテ援ク。時ニ虜兵已ニ前軍ヲ破リ、直ニ牙營ヲ犯ス。清軍、遂ニ大ニ敗レ、滿州兵四十、輜重ヲ守リ、能ク戰フ。副將軍巴賽查納弼等戰死シ、七月ニ至リ、科布多ニ歸リシ者、僅ニ二千人ニ過キズ。帝乃、詔シテ、傳爾丹ヲ降シテ、振威將軍トナシ、順承郡王錫保ヲ以テ、之ニ代フ。此ノ時ニ當リ、岳鐘琪ノ兵、烏魯木齊ヲ襲ウテ、以テ、賊勢ヲ分チ、木壘ヲ越エ、阿察河ヲ渡リ、大ニ賊軍ヲ破ル。其ノ后十年ニ至リ、噶爾丹策零、國ヲ傾ケテ入寇ス。郡王額附策凌ノ本博圖山ニ趣キシヲ探知シ、來ツテ、其ノ帳ヲ襲ヒ、子女牲畜ヲ掠ム。策凌中途ニシテ、之ヲ聞キ、大ニ怒リ、乃、頭髮及ビ馬尾ヲ斷チテ、天ニ誓ヒ、旃ヲ反シテ、馳セ來リ、蒙古兵二萬ヲ驅リ、間道ヨリ、山背ニ出テ、泰明、賊軍ヲ突ク。虜夢中ニ起キ、人々弓矢ヲ取ルニ暇アラズ。激戰兩日、虜遂ニ大ニ敗ル。清軍追ウテ、抗愛山ニ到ル。即、古ノ燕然山ノ南麓ナリ。是ニ於テ、虜兵、走路ヲ失フ。策凌險ニ薄リテ、虜三萬騎ヲ擊チ、呼聲大漠ニ震ヒ、斬溺勝ケテ數フ可カラ

ズ河水爲ニ赤シ策零夜圍ヲ突キテ逃ル其ノ后屢清軍ト戦ヒシモ皆志ヲ得ズ十二年噶爾丹策零使ヲ遣シテ和ヲ請ヒ阿爾泰山ノ故地ヲ得ント欲ス廷議之ヲ許サズ然レトモ使者往返二載ニシテ議始メテ定リ阿爾泰山ヲ以テ界トナシ厄魯特ノ遊牧ハ界東ヲ過グルコトヲ得ズ喀爾喀ノ遊牧ハ界西ヲ過グルヲ得ザルヲ約シ事遂ニ平グ尋イデ貴州ニ苗族ノ亂アリ十三年七月初メ苗疆ノ吏徵糧善カラザルヲ以テ各寨蜂起シ重安等ノ數所ヲ陷レ遂ニ鎮遠思州ヲ抄畧セリ帝乃滇蜀楚奧ノ兵ヲ發シコトニ哈克生ニ揚威將軍ヲ授ケ以テ之ヲ討タシム苗族援兵ノ至ルヲ見テ城ヲ棄テ走リ轉シテ新疆ヲ攻ム台拱清拱丹江等ノ八寨皆急ヲ告グ亢生兵ヲ遣リテ各寨ヲ攻燬シ副將馮茂復降苗六百餘及ビ頭目三十人ヲ誘殺シテ以テ功ヲ冒ラントセリ是ニ於テ苗族大ニ怒リ逃レ歸リテ互ニ盟約ヲ結ビ妻女ヲ手及シ出デ官兵ニ抗シ其ノ徒蔓延シテ遂ニ青溪縣城ヲ陷ル九月ニ至リ圍始メテ解ク

帝在位十三年ニシテ崩ズ帝幼ニシテ書史ニ耽リ又能ク書ニ巧ナリ人ヲ知リテ能ク任ゼリ故ニ世弊ヲ除クヲ得タリ高宗繼イテ立ツ名ヲ弘曆トイフ世宗ノ第四子ナリ大學士鄂爾泰莊親王允祿等先帝ノ遺詔ヲ受ケテ事務ヲ總理セリ帝ノ乾隆元年湖廣總督張廣泗貴州ノ苗賊ヲ擊チテ之ヲ平ゲ前後千二百余寨ヲ燬キ三百八十八寨ヲ赦シ九衛ヲ設ケ屯田兵ヲ以テ之ヲ戍ラシム帝乃廣泗ヲ以テ貴州ヲ總督セシメ兼ネテ巡撫ノ事ヲ管セシム是レヨリ南夷復反カズ其ノ后十二年ニ至リ金川ノ土司莎羅奔反シ革布什札及ビ明正ノ両土司ヲ攻ムルニ當リ張廣泗命ヲ奉ジテ之ヲ征シ兵三千ヲ率キテ拉底山ヲ攻メテ大ニ敗レ總兵任舉參將買國良等戰死ス帝仍ツテ廣泗ヲ逮ヘテ京ニ至ラシメ時機ヲ失スルヲ責ム廣泗抗辯シテ屈セズ帝怒リテ之ヲ斬ラシム是ニ於テ四川提督岳鐘琪四路ノ官軍ヲ統ベテ賊隘ニ逼リ潛ニ銳卒ヲ以テ其ノ不意ニ出デ礮寨十七ヲ屠リ遂ニ進ンデ勒烏圍ノ隘口

ヲ扼シ、僞リテ、運糧ノ狀ヲナシ、賊ヲ誘ヒ、火器ヲ伏シテ、之ヲ待ツ。賊果シテ出テ、糧ヲ劫カス。鎗銃齊シク發シ、其ノ衆ヲ殪ス。是レヨリ先、金川鐘琪ノ來ルヲ聞キ、信セズシテ曰ク、岳公死シテ、已ニ久シト、共ニ至リテ、大ニ敗レ、始メテ、鎮琪ノ來ルヲ知レリ。其ノ后、賊懼レテ降ラント欲ス。然レドモ、降リテ、誅セラレシコトヲ恐レ、未決セス。鐘琪、乃、輕騎、苗巢ニ到リ、僅ニ十三人ヲ從ヘ、傳呼シテ入ル。群苗、甲ヲ衷シ、弓矢ヲ持シテ、出デ迎フ。鐘琪、西長ヲ目シ、故ニ其ノ轡ヲ緩クシ、驂ヲ掀シテ、笑ツテ曰ク、爾等、我ヲ認ムルヤ、否ヤト。皆驚キテ曰ク、果シテ、岳公ナリト。皆地ニ伏シテ、羅拜シ、先ヲ爭ウテ、導キ入レ、西長、手ツカラ茶湯ヲ進ム。鐘琪、之ヲ飲ミ、再ビ求ム。因ツテ、威徳ヲ宣布シ、諭スニ順逆ヲ以テス。郡苗、感泣シテ誓ヲ立ツ。鐘琪留リテ、帳中ニ宿シ、駟盤雷ノ如シ。次日、莎羅奔皮船ニ乘ジテ、洞ヲ出テ、官軍ニ降リ、金川始メテ平グ。二十年、又、準部ノ亂アリ。準部ハ、噶爾丹ヨリ以后三世、皆、梟雄ニシテ、能ク其ノ衆ヲ用フ。乾隆十年ニ至リ、噶爾丹策零死シ、

次ニ那木札爾立チ、暴戻ニシテ、將ニ亂レシトス。時ニ、策安拉布坦策零ノ父外孫阿睦撒納、蒙ニ乘ジテ、自立ヲ謀リテ、成ラズ。已ニシテ、大策零ノ孫達瓦齊汗位ヲ繼ギ、兵三万ヲ領シテ、阿睦撒納ヲ攻ム。阿睦撒納抗スル能ハズ。所部ノ兵ヲ率キテ、清ニ内附シ、熱河ニ入勸シテ、備ニ、伊犁ノ取ル可キ狀ヲ奏ス。帝、機ニ乘ジテ、兩朝ノ憤ヲ雪カント欲シ、群臣ヲ會シテ、議ス。群臣、博克托嶺ノ敗ニ懲リテ、之ヲ難ズ。惟、大學士傅恒、征伐ヲ主トシテ、帝ノ意ニ合ス。帝大ニ喜ビ、阿睦撒納ヲ親王ニ封ズ。偶、準部ノ驍將瑪木特準噶爾、事ノ爲スベカラザルヲ知リ、亦身ヲ脱シテ、來リ歸シ、盡、準部ノ形勢ヲ奏ス。帝、二人ノ言ニ從ヒ、此ノ年二月、兩路ヨリ、師ヲ出ス。乃、班弟ヲ定北將軍トナシ、北路ヨリ出デ、阿睦撒納ヲシテ、之ニ副タラシメ、永常ヲ定西將軍トナシ、西路ヨリ出デ、薩賴爾ヲシテ、之ニ副タラシム。各兵二萬五千ヲ率キ、二個月ノ糧ヲ携ヘテ、發ス。兩副將軍、皆、準夷ノ巨帥ナルヲ以テ、奮懾ヲ建テ、先進ム。各部、風ヲ望ンデ、迎ヘ降リ、達瓦齊亦、敗レテ、烏什城ニ走

ル。其ノ酋長霍吉斯之ヲ執ヘテ、以テ獻ズ。又、青海ノ叛會羅木藏丹津ヲ獲、
 俘ヲ京師ニ獻ズ。是ニ於テ、天山南北ノ二路、皆、及ニ血ラズシテ定マル。始
 メ、伊犁分レテ、四部トナル。阿睦撒納、功ヲ以テ、双親王ニ封セラレシモ、未
 履ラズ。四部ノ總臺吉トナリ、西域ヲ專制セント欲シ、清兵ノ撤去セシヲ
 見テ、反ヲ謀リ、伊犁ノ諸喇嘛、之ニ應ズルモノ、甚多シ。時ニ、清兵僅ニ五百
 人、班弟鄂客安等、力戰シテ、之ニ死ス。帝、乃、將軍達爾黨阿ヲシテ、賊ヲ伐タ
 シム。達爾黨阿、兵ヲ率キテ、西路ヨリ出テ、薩哈薩ヲ伐チテ、虜兵二千ヲ破
 リ、阿會ヲ走ラス。官軍、追及シテ、僅ニ一谷ヲ隔ツ。虜哈薩人ヲシテ、伴リ言
 ハシメテ、曰ク、阿會ヲ擒ニシテ、獻ゼント欲ス。姑ク、師ヲ緩メテ待テト。達
 爾黨阿之ヲ信ジ、軍ヲ駐ムル數月、阿會逃レ去リ、遂ニ要領ヲ得ズ。帝詔シ
 テ、達爾黨阿ヲ逮ヘテ、之ヲ罪セリ。是レヨリ、先、將軍兆惠、孤軍ヲ以テ、伊犁
 ニ在リ、自五千人ヲ率キテ、東旋シテ、虜ヲ擊チ、數千人ヲ殺ス。二十二年正
 月、烏魯木齊ニ至ル。時ニ、虜軍、畢會シ、數日ノ連戰、清兵、一百ニ當ラザルナ

シ、氷雪ノ中ニ在リテ、瘦駝疲馬ヲ食ス。特納絡ニ至リテ、遂ニ、賊ニ圍マル。
 時ニ、天、大ニ風雪、驛傳通セズ。巴里坤辦事大臣理爾哈善、入リテ告グ。乃、詔
 シテ、侍衛圖倫楚ニ命ジテ、赴キ援ケシム。圖倫楚、兵二千ヲ率キ、馳スルコ
 ト三十日ニシテ、軍ニ至リ、連ニ虜ヲ破ル。阿會竄レテ、俄羅斯ニ入ラント
 ス。道ニシテ、回首ニ殺サレ、準部、亦、定ル。然レドモ、未、幾ラズシテ、又、回部亂
 起レリ。回部ハ、天山北路ニ在リ。其ノ土人、回々致ヲ奉ズルヲ以テ、之ヲ回
 疆、又ハ回部ト稱ス。帝ノ時、酋長瑪罕木特ニ、二子アリ、長ヲ布那敦トイヒ、
 次ヲ霍集古トイフ。所謂、大小和卓木ナリ。始メ、清兵ノ阿睦撒納ヲ征セシ
 トキ、霍集古、伊犁ニ入リテ、阿會ヲ助ク。兆惠、招撫スレドモ、從ハズ。自立シ
 テ、巴圖汗トナリ、士馬數十万ヲ集メテ、諸寨ヲ下シ、遂ニ庫東ニ據ル。兆惠
 ノ部將伊敏圖之ヲ攻メテ、勝タズ。帝、乃、雅爾哈善ニ詔シテ、靖逆將軍トナ
 シ、萬余人ニ將トシテ、進ミ攻メシム。兄弟、烏槍ノ兵、萬余ヲ率キ來リ戰フ。
 清兵、擊チテ、其ノ三千ヲ殲シ、復、鄂根河ニ戰ヒテ、千六百ヲ斬ル。兄弟、殘兵

八百ヲ斂メ、走リテ、庫車城ニ入ル。官軍之ヲ攻メテ勝タズ。却リテ、士卒六百ヲ失フ。帝震怒シ、雅爾哈善ヲ誅ス。兆惠、京師ニ至リ、自軍ヲ留メテ、以テ、西事ヲ竣ント請フ。上之ヲ壯トシ、乃師ヲ移シテ、賊ヲ討タシム。時ニ乾隆二十三年ナリ。此ノ時ニアタリ、布那敦走リテ、喀什噶爾ニ在リ。霍集古ハ、葉爾羌ニ在リ。兄弟相犄角ス。霍集古、壁ヲ堅クシ、野ヲ清メ、民ヲ斂メテ、城ニ入り、容易ニ出デ戰ハズ。城ノ大サ十余里、凡十二門アリ。兆惠、兵少キヲ以テ、攻ムルコト能ハズ。先、城東ノ草地ヲ選ミ、黑水ヲ隔テ、營ヲ設ケテ、自固クス。兆惠、河南ノ群牧ヲ取ラント欲シ、千余人ヲ出シテ、橋ヲ渡ラシム。全軍未渡ラズ。橋忽斷ツ。虜兵五千ヲ出シテ、來リ討ツ。清兵奮激シテ、其ノ陣ヲ突ク。虜又歩兵萬余ヲ以テ、之ニ繼グ。清兵、河ヲ隔テ、救フ能ハズ。死傷數百人。兆惠左右ニ衝突シ、馬鎗ニ中リテ、馬ヨリ落ツ。總兵高天喜亦之ニ死ス。虜更ニ河ヲ渡リテ、來リ攻ム。清兵且戰ヒ、且築ク。虜亦長圍ヲ設ケテ、官軍ヲ困ム。兆惠乃五人ヲ遣シ、道ヲ分チテ、阿克蘇ニ赴キ、急ヲ告ゲシ

ム。時ニ、虜水ヲ決シテ、營ニ灌ク。營兵溝シテ之ヲ洩ス。火ヲ縱チテ、虜營ヲ焚ク。虜清軍ノ布魯特ト約アルカヲ疑ヒ、人ヲ使シテ、和ヲ議セシム。兆惠其ノ使ヲ執ヘ、更ニ書ヲ射テ、諭シテ曰ク、必、霍集古ヲ縛シテ、來リ獻セバ、款ヲ納ル、ヲ許スベシト。對陣三閱月ニ亘ル。時ニ、富德北路ニ在リ、黑水ノ圍、急ナルヲ聞キ、兵二千人ヲ帥、雪ヲ冒シテ、赴キ援ハントシ、虜五千騎ニ遇フ。轉戰四晝夜、虜兵愈加ハリ、進ム能ハズ。兩軍皆重圍ノ中ニ在リ。將軍阿里衮、巴里坤、兵六百ヲ以テ、愛隆阿、兵千余ヲ合セテ、夜至ル。遙ニ火光ヲ望ミ、圍急ナルヲ知リ、乃兩翼ヲ張リテ、直ニ、賊壘ヲ壓シ、富德ノ軍ト共ニ、虜ニ逼ル。虜暗夜相格闘シテ、潰走ス。兆惠遙ニ礮聲ヲ聞キ、援兵來ルヲ知リ、圍ヲ潰シテ、出デ、虜兵千餘ヲ斬リ、盡其ノ壘ヲ焚キ、兩軍振旅シテ、阿克蘇ニ還ル。二十五年、帝復、兆惠、富德ニ命ジテ、兩路並ビ進シテ、賊ヲ討タシム。兄弟、葱嶺ヲ越エ、西ニ逃レ、走リテ、巴達克山ニ入ル。其ノ酋、素爾坦沙、拒キ戰ヒ、和卓木兄弟ヲ擒ニス。兆惠、檄シテ之ヲ索メ、乃殺シテ、首ヲ軍

門ニ獻ズ。是ニ於テ、葱嶺以西布魯特等六國、皆使ヲ遣シテ來貢シ、喀什噶爾ヲ以テ、參贊大臣トナシ、南路各城ヲ節制セシム。是レヨリ、先、準噶爾ノ敗ル、ヤ、烏什、倉霍吉斯、達瓦齊ヲ俘ニシテ、獻ゼシヲ以テ、王封ヲ受ク。兩和卓木ノ亂ニ、霍吉斯、頗兩端ヲ持ス。帝召シテ、京ニ入ラシメ、阿布都拉ヲ以テ、之ニ代フ。阿倉、暴戾ヲ極メ、辦事大臣蘇成、亦事ヲ恣ニス。部民怒リテ、亂ヲ起シ、二人ヲ殺ス。阿克蘇ノ辦事、卡塔海、變ヲ聞キ、五百人ヲ領シ、烏什ニ赴ク。賊兵二千ト戰ヒ、不幸ニシテ敗ラル。喀什噶、參贊大臣納世通、伊犁將軍明瑞、各兵ヲ率テ、赴キ援ヒ、兩軍、晝夜相攻ム。虜、援ヲ回部ニ乞ヒ、遠近震動ス。時ニ、葉爾羌鄂對ノ妻、其ノ子ナル鄂斯ニ諭シ、反ニ與ラザラシム。是ニ於テ、烏虜ノ援絶エ、清軍ニ抗スル能ハズ。虜首逆ヲ縛シテ、出テ降ル。清兵、城ニ入り、其ノ黨與ヲ殺ス。其ノ翌年、烏什ノ小伯克等、衆ヲ集メテ、亂ヲ作シ、ガ、明瑞、之ヲ偵知シ、兵ヲ進メテ、其ノ城ヲ陷レ、首逆四十二人ヲ縛シテ、遂ニ烏什ヲ平ク。時ニ、乾隆三十年、是レヨリ、西域事ナキヲ得タ

然レドモ、西南ノ諸藩、反服常ナキヲ以テ、帝、兵ヲ出シテ、緬甸ヲ征セシム。始メ、緬甸孟良、倉入寇ス。總兵劉得成等、之ヲ拒キテ敗レ、大學士揚應鏞、亦緬甸ヲ征シテ功ヲ奏セス。遂ニ、死ヲ賜ハル。是ニ於テ、將軍明瑞、滿兵三千、及ビ鎮蜀ノ兵二萬餘ヲ帥テ、木邦ニ到ル。緬人、風ヲ望ミテ遁ル。明瑞、自一萬二千ヲ率テ、浮橋ヲ結ビ、錫箔江ヲ渡リ、遂ニ進ンデ、蠻結ヲ攻ム。緬人二萬、十六柵ヲ立テ、深溝ヲ環ラシ、象陣ヲ列シテ、以テ待ツ。翌日、兩軍相持シテ、未戰ハズ。蠻柵攻ムルニ難クシテ、隙アレバ、來リテ、清軍ヲ擊ツ。總兵哈國興、三路ヨリ山ニ登リ、俯シテ之ニ薄ル。軍士皆奮ヒ、縱橫憤鬪。蠻、懼亂シテ多ク戰死ス。遂ニ、一柵ヲ破リ、勢ニ乘ジテ、復攻メ、其ノ三ツヲ破ル。十二柵ノ蠻、宵ニ乘ジテ逃ル。明瑞、士卒ニ先チテ進ミ、目ヲ傷ク。然レドモ少シモ屈セズ、馬ニ策チテ、指揮シ、清軍、一百ニ當ラザルナク。蠻民、遂ニ大破ス。時ニ、懸軍、深ク入り、糧盡クルヲ以テ、木邦ニ歸ラントス。蠻、清軍ノ病

卒ヲ獲テ、其ノ狀ヲ知リ、乃、衆ヲ悉シテ、追フ清軍、且、戰ヒ、且、歩ミ、日行三十
 清里、象孔ヨリ、小猛育ニ到リ、蠻兵數萬ニ遇フ、時ニ、援兵至ラズ、孤軍、全ク
 懸絶ス、明瑞、士ニ命ジテ、夜ニ乘ジテ遁レ去ラシメ、自、諸領大臣、及ビ巴圖
 魯侍衛數十人ト、手兵數百ヲ率キテ、血戰ス、已ニシテ、大臣孔拉阿、鎗ニ中
 リテ死ス、侍衛皆散ズ、觀音保、數矢ヲ發シテ、蠻ヲ殪シ、尙、一矢ヲ餘ス、其ノ
 鏃ヲ以テ、喉ヲ刺シテ死ス、明瑞、數創ヲ蒙リ、蠻手ニ落ンコトヲ恐レ、手、自
 辨髮ヲ割キ、家丁ニ授ケテ、歸リ報ゼシメ、樹下ニ縊レテ死ス、家丁、木葉ヲ
 以テ、其ノ屍ヲ揜ウテ去ル、帝、之ヲ聞キ、悼惜甚シク、親臨シテ、奠ヲ賜ヘリ、
 時ニ乾隆三十三年ナリ、
 翌年、傅恒、受鳩江ヲ渡リ、及ニ血ラズシテ、行クコト二千里、暑雨ニ觸レテ、
 士馬多ク僵ル、然レドモ進ンデ、蠻幕ヲ破リ、殺溺數千、江水爲ニ赤シ、副將
 軍阿里袞、亦西岸ノ蠻ヲ破ル、而シテ、兩將病ニ罹ル、時ニ、緬酋官軍ノ破擊
 フ恐レ、書ヲ致シテ、款ヲ議ス、諸將、瘴病ヲ憚リ、兵ヲ罷メンコトヲ願フ、乃、

責ムルニ納貢ヲ以テス、議未、決セザルニ、哈國興、單騎營ニ入り、其ノ酋ト、
 議ヲ定メテ還ル、時ニ、傅恒、未、痊ニス、帝、遙ニ、軍人ノ久シク苦ムヲ察シ、命
 ジテ師ヲ班サシム、緬酋、方物ヲ獻ジ入貢ヲ請フ、遂ニ、船ヲ焚キ、破ヲ鎔シ
 テ還リ、此ニ至リテ、緬酋始メテ平定ニ歸ス、
 其ノ後、又、定邊大將軍温福ニ命ジテ、金川ノ土司ヲ征セシム、温福師ヲ移
 シテ、金川軍台ニ到リ、巴郎拉ヲ攻メテ、之ニ勝チ、進ンデ、大果木ニ到リ、賊
 ノ爲ニ殺サレ、兵士三千人ヲ失フ、治ニ、内大臣阿桂、小金川ヲ伐チテ、之ヲ
 走ラス、此ノ功ニヨリテ、定西將軍トナリ、轉戰五晝夜、向フ所皆捷チ、各塞、
 潰エ走ル、四十年、阿桂、師ヲ進メテ、勒烏圍ノ塞ヲ攻メ、大礮ヲ用ヒテ、其ノ
 礮塔ヲ毀ル、虜兵、乃、穴ヲ堀リテ、死守ス、時ニ、土司索諾木ノ母、河西ニ往キ、
 餘衆ヲ收メテ、官軍ヲ拒カントス、阿桂、精兵ヲ遣リテ、之ヲ追勦ス、是レヨ
 リ、母子相通ゼズ、依リテ、降蕃ヲシテ、其ノ母ヲ諭降シ、更ニ、書ヲ作リテ、索
 諾木ヲ招カシム、索諾木、母ノ書ヲ得、其ノ孥ヲ率キテ、出デ降ル、其ノ翌年、

阿桂師ヲ率井テ凱還ス帝其ノ功ヲ嘉シテ阿桂ヲ軍機大臣ニ任ジ後武英殿大學士ニ拜ス其ノ后五年ヲ經テ蘭州回教ノ賊亂ヲ起ス總督勒爾謹兵ヲ出シテ之ヲ勦シ賊魁馬明心ヲ捕ヘテ獄ニ下ス然レドモ其ノ徒二千人阿州ヲ陷レ蘭州ヲ犯シ明心ヲ索ムルコト甚急ナリ此ノ時ニ當リ阿桂亦命ヲ奉ジテ賊ヲ討ジ盡首逆ヲ斬リテ其ノ亂ヲ定ム其ノ后安南ニ相阮惠ノ亂アリ台灣ニ林爽文ノ反アリ帝海蘭察孫士毅等ノ諸將ニ命ジテ之ヲ討平シ又將軍福康安ニ命ジテ廓爾格ノ亂ヲ定メ駐藏ノ兵ヲ置キテ還ル此ノ年英吉利使ヲ遣シテ曰ク爾后西洋ノ兵ヲ用フルアラバ願クハ力ヲ致サント蓋清軍ノ廓爾格ヲ伐チテ西藏ノ西南部ニ進ミシトキ英兵ノ援ヲ受ケシヲ以テナリ

斯ク世宗高宗ノ代ハ屢外征師ヲ起シ南征北伐概虛日ナク威ヲ四境ニ輝セリト雖内政ハ大ニ治レリ故ニ清朝ハ康熙ヨリ乾隆ニ至ルマデヲ極盛ノ時ト稱セリ帝位ヲ皇太子ニ傳フ之ヲ仁宗ト稱ス高宗ノ第十五

子ニシテ名ヲ永琰トイフ即位ノ元年嘉慶ト改元ス

第五章 嘉慶ノ亂及ビ回部ノ騷擾

清天下ヲ一統シテ康熙乾隆ノ間國運愈盛ナリシガ仁宗ノ嘉慶元年ニ至リ朝政稍衰へ騷亂相繼イデ起リヌ始メ貴州銅仁ノ苗石柳鄧反シ湖南ノ石三保之ニ應ジテ永綏ヲ陷ル鎮筮ノ苗吳半生及ビ乾州三岔山ノ苗一時ニ蜂起シテ近隣ヲ抄畧セリ同知宋如椿兵ヲ率キテ苗賊ヲ征シテ大ニ之ヲ敗ル先帝更ニ雲貴總督福康安ニ詔シテ之ヲ勦シ黃瓜鳥龍ノ苗ヲ破リテ貴州ヲ定メシム會總兵福寧乾州ヲ攻メテ勝タズ苗軍大ニ振フ其ノ會吳八月平隴ニ據リ三桂ノ后ト稱シ遠近ヲ煽動シテ自吳王ト稱シ勢益盛ナリ石柳鄧等皆之ニ附ケリ已ニシテ福康安及ビ四川總督和林等軍ニ卒ス將軍鄂勒登等大軍ヲ引キテ賊ヲ破リ石柳鄧

父子及ビ吳廷義ヲ斬リテ、悉、貴湖ヲ定メシガ、此ニ至リ、荊州枝江ノ賊張世謨起リ、詭リテ白蓮教徒ト稱ス。宜陽、長陽、長樂ノ教匪、一時之ニ應和シ、四出焚掠ス。湖廣ノ總督畢沅馳セテ、枝江ニ赴キ、巡撫惠公ト兵ヲ調ヘ、進勦シ、連ニ諸塞ヲ陷ル。時ニ、湖北ノ兵、皆苗疆ニ赴キシヲ以テ、姦民、虛ニ乘ジテ、諸縣ヲ擾ス。帝又、諸將ニ詔シテ、路ヲ分チテ進討セシム。畢沅將軍、舒公ト當陽ヲ攻ム。親將士ヲ督シテ、火攻ヲ以テ、東門ニ克ツ。賊退イテ西北ヲ守ル。復、攻メテ、之ヲ拔ク。賊ヲ殺スコト、二千餘。準魁楊殷元等ヲ擒ニシテ、悉、縣境ヲ定メ、復、馳セテ襄陽ニ至リ、賊ヲ青河口ニ擊チテ、之ヲ破ル。已ニシテ、四川ノ王三槐、教匪ヲ以テ、亂ヲ起ス。南充ノ知縣劉清展、鄉兵ヲ以テ、賊ヲ南充、廣元ノ間ニ破ル。且、清士民ヲ愛撫シ、頗、蜀民ノ心ヲ得タリ、賊素ヨリ、清ノ名ヲ聞キ、戰ハズシテ逃ル。四川、總督宜綿、清ニ命シテ、三槐ヲ招撫セシム。三槐、清ニ隨ツテ、總督ノ營ニ到リ、所部ヲ率キテ、出デ降ランコトヲ約ス。然レドモ、其ノ實ハ、降意ナシ。營ニ歸リテ、復、反ス。清尋イテ、又

羅其清ノ營ニ到ル。羅ハモト、清ノ部民ニシテ、甚、清ヲ徳トス。清入り、羅ヲ見テ、大ニ笑フ。羅亦、大ニ哭シ、白袍ヲ去リテ、罪ヲ請フ。白袍ハ、白蓮教徒ノ服ナリ。清歸リテ、檄ヲ爲リ、具ニ羅ヲ諭ス。然レドモ、羅、衆ヲ恃ミテ、終ニ降ラズ。二年ニ至リ、襄陽ノ姚之富、白蓮教首林齊ノ妻王氏ト、竹山、保康ヲ陷レ、四川南陽ヲ犯ス。官軍賊ヲ殺スコト、數萬ニ至ルト雖モ、勢益熾ンナリ。之富、最、猖獗ヲ極メ、郡ヲ抄略ス。四川ノ奸民徐天德、太平、王三槐、冷天錄等、又、並ビ起リテ、陝ニ入り、路ヲ分チテ、興安ヲ犯ス。陝甘ノ總督宜綿、討チテ之ヲ破ル。遂州ノ賊モ、亦霧ニ乘ジテ、官軍ヲ犯ス。將軍恒瑞、連戰賊ヲ破リ、鄖陽略定マル。四川總督英善、徐天德ヲ擒ニシ、將軍惠齡、劉榮ヲ俘ニス。然ルニ、之富、惟、河南ニ入りテ、寇ヲナスコトモト、如シ時ニ、三槐、雲陽ニ走リ、白崖ノ賊ト合セントス。羅思舉、鄉勇ヲ率キ、繞リテ、賊ノ前ニ出デ、獲シ所ノ賊旗ヲ張リ、夜賊壘ヲ襲テ、四千餘人ヲ擒斬ス。初、遊擊羅定國、思舉ニ命シテ、賊ヲ豐城ニ伺ハシム。思舉、歸リテ曰ク、死士ヲ帥テ、夜襲ヒ、兵ヲ

外ニ伏セテ、以テ夾撃セバ、一舉ニシテ殲スベシト。衆之ヲ狂トシ、疑ウテ、
 間諜トナス。思舉、大ニ怒リ、乃、火藥ヲ請ヒ、獨、賊塞ニ入リテ、火ヲ縱ツ。將ニ
 風烈シク、賊驚キテ、蹂躪シ、崖ニ陥リテ、死スルモノ、其ノ數ヲ知ラズ。棄械
 山ノ如シ。此ノ役、思舉一人ヲ以テ、賊數萬ヲ破リ、勇名、四川ニ震フ。軍中、羅
 必勝ト稱ス。常ニ曰ク、晦夜、劫營、必勝。崖溝、間道、必勝。冒旗、誘敵、必勝ト。
 三年、將軍額勒登保、誘ウテ、王三槐ヲ雲陽ニ執フ。餘黨、冷天錄等、羅思舉ニ
 攻メラレ、皆潰奔セリ。將軍明亮、德楞泰等、賊ヲ三岔川ニ破ル。首逆林齊王
 氏、姚之富等、皆崖ニ隕チテ死ス。其ノ後、羅其清、王廷登、劉之協等、前後相尋
 テ、誅ニ伏ス。帝是レヨリ、邪教ノ說ヲ禁シ、旨ヲ中外ニ宣示シ、教匪、全、平定
 ニ歸セリ。

此ノ時ニ當リ、海盜蔡牽トイフモノアリ。沿海ニ出入シテ、抄略ヲナス。八
 年、浙江ノ總督李長庚、追討ノ命ヲ奉ジテ、之ヲ破ル。牽、僅ニ身ヲ以テ、免レ、
 遂ニ閩洋ニ到ル。且、糧竭キ、艇朽チタルヲ以テ、僞テ、降ヲ總督玉德ニ乞フ。

玉德之ヲ許ス。牽、間ヲ得テ、檣ヲ繕ヒ、糧ヲ貯ヘ、帆ヲ揚ゲテ去ル。浙兵之ヲ
 追ウテ、及バズ。尋イテ、又、牽ヲ温州ニ擊チ、其ノ船ヲ奪ヒ、六艘ヲ沈燔ス。牽
 靈船ヲ畏レ、乃、巨船ヲ造リ、遂ニ、台灣ニ至リ、米數十石ヲ劫シ、餉ヲ朱潰ニ
 分チ、遂ニ、之ト合シ、攻メテ、温州ノ總兵胡振聲ヲ殺シ、餘八十餘ヲ連ネテ、
 閩ニ入ル。閩兵、敢テ擊タズ。帝、長庚ニ詔シテ、閩浙ノ水師ヲ統ヘ、專、蔡牽ヲ
 勦サシム。温州、海壇ノ二鎮ヲ以テ、左右翼トナシ、賊ヲ馬蹟洋ニ擊ツ。牽、潰
 結ンデ、一陣ヲ爲ス。長庚、兵ヲ督シテ、其ノ中央ヲ衝貫シ、二船ヲ沈ム。賊、遂
 ニ逃レ去ル。牽、潰ガ命ヲ用キザルヲ責ム。潰、怒リテ、牽ト分ル。是レヨリ、牽
 ノ兵勢少シク衰フ。已ニシテ、蔡牽、又大衆ヲ以テ、台灣ヲ攻ム。別部洲仔尾
 ニ屯シ、舟ヲ鹿耳門ニ沈メテ、官軍ヲ阻ム。李長庚、進ンデ入ルコト能ハズ。
 乃、別將ヲ遣シ、澎湖船ニ乘シ、賊船三千ト戰ヒ、テ千余人ヲ俘ニシ、又、賊ヲ
 柴頭港ニ破ル。總兵許松年、夜、洲仔尾ヲ焚ク。牽、返リ救フ。長庚、后ヨリ、其ノ
 船ヲ焚ク。松年、進ンデ之ヲ、燬メ、遂ニ、大ニ、賊ノ水軍ヲ破リ、明日、又、陸賊ヲ

破ル。此ノ役、松年先鋒トナリ、前後賊數萬ヲ殲シ、台灣全キヲ得タリ。十二年ニ至リ、李長庚進ンデ、蔡牽ヲ破リ、追ウテ、粵海ニ入ル。時ニ、朱潰已ニ許松年ニ殲サレ、其ノ弟渥出デ降リ、牽ガ黨敗散シテ、僅ニ三船ヲ止ム。長庚自親軍ヲ率キ、牽ノ大船ニ當リ、又、火船ヲ以テ、后艙ニ維キテ、之ヲ燔ク。長庚躍リテ、其ノ船ニ入り、幾ト、牽ヲ擒ニセントス。其ノ奴、長庚ヲ識ルモノ、暗中ヨリ、礮ヲ發シテ、喉ニ中テ、庚ヲ仆ス。時ニ、張見陞、庸儒ニシテ、中軍ノ船乱ル、ト見テ、退キ、牽安南ニ遁ル、トコトヲ得タリ。長庚ノ裨將王得祿、讎憤ヲ雪カンコトヲ誓ヒ、明年、牽ヲ定海ノ漁山ニ討チ、大ニ之ヲ破ル。牽窘急シ、礮ヲ舉ゲテ、自、其ノ船ヲ裂キ、海ニ沈ミテ死ス。是ニ於テ、閩浙ノ二軍皆平グヲ得タリ。

是レヨリ、先、與洋久シク靖カラズ。巨寇張保、衆數万ヲ挾ミ、勢甚盛ンナリ、帝、百齡ヲ以テ、兩廣ノ總督トナシ、之ヲ降サシム。百齡曰ク、粵人、盜ニ苦ムコト、久シ、若、降ヲ乞ハ、坦懷ヲ以テ、待ツニ非ズンバ、海氛、何ニ因リテカ

息マント、遂ニ、單船ニ駕シ、從者十余人ヲ隨ヒ、虎門ヲ出ヅ。保ノ巨艦數百、轟礮雷ノ如ク、烟燄天ヲ蔽フ。保、自、百齡ノ船ヲ環リ、跪迎ノ狀ヲ爲ス。百齡船中ニ危坐シ、屹然トシテ動カズ。保ヲ麾キテ、利害ヲ曉ス。見ル者、膽落チ、稱シテ、天人ト爲シ、皆面縛シテ、命ヲ乞フ。百齡立ロニ、其ノ衆ヲ撫シ、奏シ、乞ウテ、死ヲ貸シ、更ニ、保ヲシテ、賊會烏石ニ招キ降サシム。始メテ、全海肅清、海寇ノ跡ヲ絶ツ。時ニ、英吉利兵船十三艘、香山雞頭洋ニ泊シ、其ノ會度路利兵船三ヲ以テ策捕ニ入り、又、省河ニ入り、法蘭西ヲ防禦スト稱ス。其ノ意、殊ニ測リ難シ。兩廣ノ總督吳熊光、念ヘラク、海寇、稍戢ルト雖、師、殊ニ老セリ。故ニ、鎮靜ヲ事トシ、英人ニ諭シテ、國ニ歸ラシム。然レドモ、英船遷延、數月ヲ閱シテ、漸碇ヲ起シ、歸程ニ就ケリ。

十八年、帝、木蘭ニ獵スルニ會シ、河南ノ李文成、及ビ直隸ノ林清等、反ヲ謀リテ、京城ヲ襲フ。始メ、文成、天里、教ヲ唱ヘ、衆ヲ集メテ、財ヲ歛ム。愚民ノ胥吏ニ苦ム者、爭ウテ、之ニ與シ、其ノ黨數萬ニ至ル。帝、木蘭ニ幸シ、駕ヲ回ス。

ニ乘シ、亂ヲ作サントス。謀、已ニ定リ、中外知ルモノナシ。滑ノ知縣強克捷、之ヲ聞キ、文成ヲ捕ヘテ、其ノ脛ヲ斷ツ。賊期ヲ待タズシテ、衆三千ヲ集メ、滑ヲ破リテ、文成ヲ獄ヨリ出ス。強克捷、之ニ死ス。終ニ、直隸、山東ノ賊、同時ニ官ヲ殺シテ、城ヲ陷ル。直隸總督溫承惠、河南巡撫高杞等ニ命シテ、賊ヲ討タシム。諸賊、倉皇事ヲ起シ、遂ニ、林清外應ノ期ニ及ハズ。清期ニ及ヒ、其ノ黨二百人ヲシテ、潛ニ、内城ニ入り、兵械ヲ藏メ、酒肆ノ中ニ混シ、日晡分チテ、東西華門ヲ犯サシム。各白帽ヲ戴キテ、號トナス。時ニ、皇子等、上書房ニアリ、變ヲ聞キ、諸大監ニ命シ、牆ニ登リテ、以テ、賊ヲ望マシム。賊、白旗ヲ以テ、養心門ヲ踰ユル者アリ。皇次子烏銃ヲ發シテ、之ヲ殛ス。貝勒綿志、亦銃ヲ以テ、賊ヲ殛ス。賊敢テ進マズ。隆宗門ヲ火ニセントス。偶、京師ニ留守セシ、諸王、大臣、禁兵ヲ率キ、神武門ヨリ入りテ、賊ヲ中和殿門外ニ敗ル。薄暮、忽、大雷アリ。賊股慄シ、先后、擒ニ就キ、賊ニ通セシ諸大監、亦、擒ニセラル。時ニ、帝將ニ、蹕ヲ旋サントシテ、已ニ、白澗ニ到ル。會、京師、連日、大風沙ヲ揚

ゲ、晝、暗クシテ、讒言、四ニ起ル。帝、報ヲ得テ、暫、蹕ヲ烟郊ニ駐メ、詔ヲ下シテ、己ヲ罪シ、中外ノ諸臣、此ノ禍ヲ致スヲ責メ、又、皇次子ノ功ヲ賞シテ、智親王トナス。此ノ日、林清ヲ黃林ニ擒ニシ、駕烟郊ヨリ宮城ニ入り、人心始メテ、定ル。乃、首逆ヲ磔シテ、首ヲ幾内ニ傳フ。然ルニ、李文成ハ、已ニ滑ニ據リ、其ノ脛創甚シキヲ以テ、自出ヅル能ハズ。其黨ヲシテ、濬ヲ圍マシメ、精銳ヲ、道口鎮ニ萃メ、運河ノ糧ヲ恃ミ、以テ、戰守ス。溫承惠等、兵ヲ按シテ、勦カズ。ヨリテ、陝甘總督那彥成ヲ以テ、之ニ代フ。陝西總督楊遇春、之ニ副フ。是ニ於テ、滿洲ノ健銳、及ヒ、西安、徐州ノ兵、數千ヲ調ス。遇春、即日、親兵八千ヲ率キ、賊ヲ破リ、追ウテ、河ヲ渡リ、賊二百余人ヲ擒斬ス。賊敗レテ、道口ニ入ル。遇春、北岸ニ還リ、浮橋ヲ絶テ、渡船ヲ焚キ、其ノ地ニ營シ、咽喉ヲ扼セン。ト欲ス。高杞等、可カズ。那彥成、亦、賊ノ盛ナルヲ聞キテ、進マズ。遇春、固原ノ兵ヲ以テ、賊ヲ破リ、進ンデ、援兵二千ヲ討チ、遂ニ、道口ヲ奪ヒ、萬余人ヲ殺シ、復、擊テ、桃源ノ賊三千ヲ城東ニ走ラシ、更ニ、進ンデ、滑城ヲ圍ム。時

ニ、山東ノ鹽運使劉清亦大ニ曹州ノ賊ヲ破リ、定陶ヲ定メ、直隸總督章煦、賊首馮克善ヲ擒ニシテ直隸ヲ定ム。帝、索倫ノ兵ニ詔シテ、悉、河南ニ赴カシム。滑縣ハ、古ノ滑洲ノ舊治ニシテ城壁堅厚、城中、一年ノ糧ヲ貯フ。官軍、滑ノ三面ヲ圍ミ、惟、北門葦塘ヲ隔テ、未、圍ヲ合ヒズ。是ニ於テ、桃源ノ賊首劉國明潛ニ滑ニ入り、文成ヲ護シテ出ヅ。文成脛創アリ、騎スル能ハズ。乃、車ニ乗ジテ、北門ヨリ出テ、賊四千ヲ招キ、輝縣山ニ據ル。彥成、總兵楊芳ヲ遣リテ、之ヲ追究ス。文成窮窘、火ヲ縱チテ、自、焚死ス。楊芳、乃、師ヲ轉シテ、滑城ヲ攻メ、賊二萬ヲ殺シ、逆首牛亮臣、徐安國等ヲ俘ニシ、京師ニ檻致ス。餘賊、相尋イデ誅ニ伏シ、民情大ニ安シ。

二五十年、帝崩ス。年六十五。皇太弟、位ニ即ク。之ヲ宣宗トイフ。

宣宗、諱ハ、昊、寧、高宗ノ第二子ナリ。即位ノ元年、道光ト改元ス。是レヨリ先、回部南路ノ參贊大臣斌靜荒淫ニシテ、回衆ノ心ヲ失スルニ乘シ、會長張格爾、巾爾特ノ衆數百ヲ糾シテ、邊ニ寇ス。張格爾ハ、大和卓木博羅尼都ノ

孫ナリ。領隊大臣色普徵額、兵ヲ率ヒテ、之ヲ走ラセ、百餘人ヲ擒ニス。時ニ、中秋ニ屬ス。軍ヲ喀城ニ回シ、斌靜ト宴シ、盡其ノ虜ヲ誅シテ、以テ、遠近ヲ威服ス。

道光六年ニ至リ、張格爾再ビ反シ、屢、喀什噶爾ノ邊ニ寇ス。將軍慶祥、兵五千ヲ率キテ、之ヲ討チ、戰敗レテ、之ニ死ス。赦罕ノ酋、亦、張格爾ヲ援ケ、遂ニ喀城ヲ陷ル。帝、乃、大學士長齡ニ命シテ、楊威將軍トナシ、甘陝ノ總督楊遇春ヲ以テ、參贊トナス。遇春、進ンデ連戰、賊ヲ破リ、擒斬數萬、追ウテ、渾河ニ到ル。虜衆ヲ盡クシテ、陣ヲ列スル。凡、二十里餘、會、大風、砂ヲ揚ゲ、天地晦冥、長齡、霧ヲ待チテ、進マント欲ス。遇春曰ク、天、吾ヲ贊クルナリ。賊多少ヲ知ラズ、必、吾ニ備ヘズト。直ニ千騎ヲ遣リテ、下流ニ赴カシメ、自、大兵ヲ率キテ、上流ヲ渡リ、虜軍ヲ突キテ、大ニ之ヲ破リ、喀什噶爾ヲ復ス。遇春、軍ニ從ヒシヨリ、大小數百戰、常ニ身自、士卒ニ先チテ、矢石ヲ冒シ、未、曾テ、傷ヲ蒙ラズ。勇、諸將ニ冠タリ。時ニ、甘陝ノ總督楊芳、請ウテ、軍ニ從ヒ、賊ヲ破リ、進

ンデ、回城ヲ陷レ、復、楊遇春ト大ニ張格爾ヲ破リ、逆首玉奴斯ヲ斬リ、和闐ヲ復ス。又、進ンデ、遇春ト共ニ、葱嶺ニ至ル。浩罕ノ賊二千アリ。伏ヲ設ケテ、官軍ヲ誘フ。官軍、伏ニ入り、幾ト殆シ。辛ウシテ、歩々營ヲ作リテ、退ク。帝、諸將ノ深入ヲ責メ、遇春ヲ召シ、芳ヲ以テ、之ニ代フ。芳、反問ヲ縱チテ、官軍、全ク撤ス。ト言ハシム。張格爾、果シテ、喀什噶城ヲ襲フ。芳、兵ヲ嚴ニシテ、賊ノ到ルヲ待チテ、之ヲ破リ、斬獲數万。遂ニ張格爾ヲ擒ニス。帝、赦罕ニ諭シテ、其ノ家屬ヲ縛シテ、之ヲ獻セシム。赦罕、命ヲ奉セズ。帝、依リテ、其ノ互市ヲ絶チ、之ヲ困ム。赦罕ノ酋長、兵ヲ發シテ、諸部落ヲ焚掠シテ、已マズ。之ヲ以テ、遂ニ赦罕ノ、入貢互市ヲ許シ、喀什噶爾ノ參贊大臣ヲ移シテ、葉爾羌ニ駐在セシメ、回疆ノ亂、漸、鎮定スル事ヲ得タリ。

第六章 鴉片ノ戰爭

清、西洋ト交通(外交、通商ノコト)ヲ開キシヨリ、洋人、鴉片ヲ舶載シ、廣東ニ來リ、交易ヲナス。爾來、需用、大ニ増加シ、遂ニ互市ノ要物トナリ、烟毒、人ヲ害シ、財ヲ糜スルコト、益、甚シ。コレヲ以テ、乾隆中、鴉片ノ輸入ヲ禁シ、併セテ、人民ノ之ヲ用フルヲ嚴禁シ、其ノ一千函ヲ燒キヌ。嘉慶二十一年、復、其ノ三千二百函ヲ燒ク。其ノ后、英人、印度ヲ得、其ノ地ニ於テ、鴉片ヲ製シ、以テ、貿易ノ利ヲ謀リ、亞馬港、及ビ廣東ニ來リテ、之ヲ鬻グ。道光十六年、二万七千函ヲ齎ラシ、翌年、三万四千函ヲ齎シテ、互市ヲナシ、公然、忌憚ナク、有司亦、賄ヲ貪リ、之ヲ縱シテ、問ハズ。鴻臚卿黃爵滋、上疏シテ、鴉片ヲ禁センコトヲ請フ。帝、中外ノ大臣ニ下シテ、議セシム。湖廣總督林則徐、利害ヲ條陳シテ曰ク、

鴉片稍流入中國、其初、不過、執梃子弟、習爲、浮靡、嗣後、上自、官府紳縉、下至、工商優隸、以及、婦女僧尼道士、廣東、每年、漏銀、漸至、三千余万兩、合之、各省、又數千万兩、耗銀之多、由於、販烟之盛、販烟之盛、由於、食烟之衆、臣子、誰不、切齒、請

禁止之、永絶澆風ト。帝之ヲ嘉シ、則徐ヲ以テ、兩廣ノ總督トナシ、便宜事ヲ處セシム。則徐、廣東ニ赴キ、虎門ノ各海口ニ、礮臺ヲ築キ、水師ヲ移シ、守備ヲ嚴ニシテ、鴉片ノ貿易ヲ禁ズ。時ニ通商ノ國、十國アリ、咸心ヲ傾ケテ、約束ヲ受ク。惟、英吉利、兩端ヲ持ス。則徐、乃、英商ニ命シテ、蓄フ所ノ鴉片ヲ出サシム。英商千余函ヲ呈ス。則徐、其ノ少ヲ責ムレドモ、英商服セズ。則徐ヨリテ、食料ヲ閉チテ、與ヘズ、與フルモノハ、死ニ處ス。英商窮困シテ、盡、其ノ數ヲ出ス。則徐、衆ニ示シテ、之ヲ焚キ、又、諸國ノ互市ヲ許シテ、獨、英商ヲ禁ズ。是ニ於テ、英人大ニ怒リ、船艦ヲ以テ、逼リテ曰ク、互市ヲ復セズンバ、戰アラシム。則徐、應ゼズ。英人、清船三艘ヲ擊破シテ去ル。則徐、其ノ再來ヲ恐レ、大ニ兵備ヲ修ム。適、洋、西班牙ノ商船ヲ見テ、英人ト爲シ、清軍襲ヒテ、之ヲ燒ク。英人來リテ、之ヲ救ヒ、其ノ船ヲ亞馬港ニ送ル。尋、イデ、英將蘇密多、廣東ニ入リテ、清軍ヲ破リ、又、香港ニ寇ス。互ニ勝敗アリ、已ニシテ、英人、亞米利加人ヲ介シテ、互市ヲ乞フ。許サズ。英國政府報ヲ得テ、大ニ怒

リ、道光二十年、軍艦數十艘ヲ發シ來リテ、舟山ヲ陷レ、路ヲ分チテ、浙東ヲ侵シ、遂ニ寧波ヲ圍ム。定海欽差、伊里布、命ヲ奉シテ赴キ、英軍ト余姚ニ戰フ。英人モト、地理ニ暗ク、艦、沙ニ膠シテ進ム能ハズ。鄉勇之ニ乘シテ、集リ攻ム。時ニ一、女將アリ、身ヲ挺シテ、奮闘シ、數人ヲ斬ル。鄉勇辟易ス、一人槍ヲ揮ヒ、后ヨリ、女將ヲ傷ク。衆、之ヲ擒ニス。女將ハ、英王ノ第三女ナリ。英將、書ヲ余姚令ニ贈リテ曰ク、王女ヲ還サバ、侵地ヲ還サン。廣東ニ往キテ、令ヲ奉ゼント。帝、伊里布、及ビ、欽差大臣、琦善ニ命シテ、廣東ニ赴キ、和ヲ議セシム。英將曰ク、王女ヲ還サズンバ、大舉シテ、之ヲ報セント。琦善等、私斷シテ、王女ヲ返シ、則徐ノ職ヲ褫ウテ、之ニ媚ブ。是ニ於テ、英人陽ニ、浙東ノ兵ヲ撤シテ、廣東ニ駐リ、悉、洋館ヲ奪ヒ、兵勢、甚、熾ンナリ。帝、之ヲ聞キ、テ、大ニ怒リ、伊里布、琦善ノ職ヲ褫ヒ、則徐ヲ復用シ、浙東ヲ經理セシメ、遂ニ親征ヲ議ス。大臣等、之ヲ諫止ス。ヨリテ、皇弟、綿璉、親王ニ命シテ、大將軍トナシ、師ヲ統ベテ、廣東ニ赴カシム。英將、襲擊ヲ恐レ、館ヲ棄テ、船ニ入ル。清兵、

追撃シテ海中ニ戰ヒ、遂ニ利ヲ失フ、英兵勝ニ乘シテ、上陸シ、復、館ヲ取ル、清兵再ビ戰ヒ、又大ニ敗ラル、英將曰ク、清兵ヲ六十里外ニ退ケ、銀六百萬兩ヲ納ムレバ、英國亦兵ヲ收メテ去リ、所取ノ城堡ヲモ返サント、清之ヲ諾シ、先、五百萬兩ヲ納レンコトヲ約ス、時ニ東印度ノ鎮將、噶喇巴女王ノ命ヲ奉ジ、兵三萬二千ヲ以テ、澳門ニ到リ、英軍大ニ振フ、清兵退キテ、六十里外ニアリ、中途ニ、之ヲ聞キ、復、返リテ、城堡ヲ修メ、守備ヲナス、英將之ヲ見テ、再、廣城ヲ犯シ、香港、廈門ヲ陷レ、進ンテ、定海、鎮海ヲ攻ム、總兵葛雲飛、王錫明等、往キテ、定海ヲ鎮ス、定海ノ城、三面山ニ踞シ、海ニ臨ミテ、屏蔽ナシ、輒、議シテ、其ノ三面ニ城キ、巨礮ヲ列シテ、竹山門深港ヲ塞ク、已ニシテ、英人、廈門ニ集リ、再、定海ヲ犯シ、竹山門ヲ攻ム、皆、擊チテ、之ヲ卻ク、是ニ於テ、雲飛、土城ニ駐リ、王錫明、曉峰嶺ヲ守リ、鄭國鴻、竹山門ヲ守ル、英船二十九艘、衆二萬余、清兵僅ニ、四千ニ過キズ、加フルニ、天大ニ雨フル、然レドモ、雲飛、潦中ヲ往來シテ、屢、敵ヲ卻ク、相持スルコト數日、會、大ニ霧フ、英人

數隊土城ニ逼リ、又、兵ヲ分チテ、曉峰、竹山ヲ攻ム、清兵殊死シテ戰ヒ、遂ニ大ニ破レ、雲飛、銃丸ニ中リテ、死シ、王錫明、鄭國鴻、亦、力戰シテ、死ス、二十二年ニ至リ、英將、噶喇巴、浦ヲ攻ム、先、瀛船ヲシテ、津口ヲ探ラシム、商民、恐怖シ、難ヲ避ケントシテ、死傷、甚多シ、時ニ、城中兵衆ト雖、皆相危ム、英艦六隻、船體相含ミテ、進ミ、恰モ、丘阜ノ如シ、清兵、之ヲ望ミ、氣奪ハレ、砲丸ヲ發スレドモ、水ニ落チテ、達セズ、英兵、大ニ笑フ、一艦ヲ以テ、廻リ、礮台ヲ碎キ、先鋒五百人、唐家灣ヨリ、登リ、直ニ、南門ヲ破リ、益進ミテ、東門ヲ陷ル、都統長喜、門同知、韋逢甲、憤闘シテ、之ヲ卻ケント欲ス、英兵、林立、劍銃ヲ列シ、陣堅クシテ、犯ス可ラズ、周恭壽、奮然馬ニ策チテ、突貫シ、血戰、百余人ヲ斬リ、丸ニ中リテ、死シ、清兵、敗レ、退キテ、胡慮城ヲ保ツ、長喜、逢甲モ亦死シ、城、遂ニ陷ル、此ノ役、閩女、節ニ殉セシモノ、甚多シ、英人、乃、戈船三十隻ヲ以テ、吳淞ニ逼ル、吳淞、ハ、東西ノ砲台、相倚角シ、西砲台ハ、海ノ北ニアリ、寶山ヲ距ル、六里、東砲台ハ、其ノ南ニ在リ、險、西ニ等シ、陳化成、西砲台ヲ守ル、英船

江ヲ排シテ進ム。化成台ニ登リ。紅旗ヲ執リ、衆ヲ指揮シ、砲發千聲、卯ヨリ、巳ニ及ビ、英船六七艘ヲ碎ク。敵沮ミテ、退カント欲ス。巳ニシテ東路ノ兵、大ニ潰ユ。砲ヲ棄テ、走ル。是ニ於テ、英人、カヲ併セテ化成ヲ攻ム。英兵、岸ニ上リ、砲彈雨下、遂ニ化成ニ中ツ。吳淞、亦陥ル。此ノ時、英ノ後軍、繼ギ至リ、勢破竹ノ如ク、摧江、鐵鎖關ヲ破リテ、直ニ進ム。清兵七萬人、江ニ沿ウテ、營ヲ列シ、他ノ奇策ナシ。英船、深ク鎮江ニ入り、府城ヲ踏ル。將軍齊慎、夜逃レ、欽差裕謙等、皆戰死シ、南京、大ニ震フ。英兵、勝ニ乘シテ、燕子磯ニ到リ、江寧府ヲ距ルコト、僅ニ三十里。

此ノ際、不幸ニシテ、清廷、君臣ノ議常ニ合ハス。帝、亦英兵ノ當ル可カラザルヲ知リ、伊里布ヲ起シ、欽差大臣耆英ト共ニ、馳セテ、和ヲ議セシメ、帝難ヲ熱河ニ避ク。是ニ於テ、萬民瓦解シ、姦者蜂起シ、有司制ス可カラ。七月、耆英等、英將璞鼎塲ニ、江寧ニ命シテ、議ヲ定メ、盟約書ヲ修ム。

一ニ曰ク、清國禁滅鴉片、納銀二千六百萬兩償之、今年納六百萬兩、以后每

年納五百萬兩、加利五分。

二ニ曰ク、割廣州、福州、寧波、厦門、上海五處爲英國互市之區、使家眷來往。

三ニ曰ク、香港永歸英國管轄。

四ニ曰ク、漢有所俘、苟使英國所役屬者、皆釋之。

五ニ曰ク、欽差相議、待清主手勅后出令、不得擅執法刑人。

六ニ曰ク、清英官吏、同等交接、修好毋敢或爭。

七ニ曰ク、今年納銀六百萬兩、南京、河、上海所有英國戰船退去、舟山、古浪岐、未敢退盡、待二千一百萬兩納畢、然后退無餘。

ト、和議、全ク定マル。

其ノ後、台灣ノ民、英人ヲ殺シ、廣東ノ民、英人ヲ逐ヒシ事アリシモ、清、常ニ英ニ謝シ、先事ナキヲ得タリ。

第七章 長髮賊ノ亂

鴉片戦争ノ后國政次第ニ衰へ加之廣西廣東の地大ニ饑エ群盜四方ニ起リ士民生ヲ聊ンセズ時ニ廣東ノ人洪秀全天主教ヲ唱ヘテ子弟ヲ誘導シ道光三十年兵ヲ桂平縣ノ金田村ニ起ス世之ヲ長髮ノ賊トイフ。始メ廣西ニ天帝會アリ教主ヲ洪徳元トイフ其教ニ入ルモノ毎年銀五兩ヲ納レ愚民之ヲ奉ズル神ノ如シ洪秀全亦會教ニ入り徳元ノ死スルニ及ビ洪姓ヲ冒シ代リテ教主トナリ名ヲ耶蘇教ニ詔シ天父ヲ耶和華ト號ケ耶蘇ヲ長子トナシ秀全其次子トナル故ニ耶蘇ヲ稱シテ天兄トイフ。潯州ノ人馮雲山章昌輝等ト結ンデ死黨トナリ眞言寶誥等ノ偽書ヲ作リテ四方ニ傳布セシカバ來リ從フモノ益多ク資數十萬ヲ積ミ遂ニ逆志ヲ生シ衆二千餘人ヲ集メ期ヲ約シテ事ヲ舉ゲントス桂平知縣賈令寯三人ヲ捕ヘテ潯州ノ獄ニ贈ル時ニ粵西ノ巡撫鄭祖琛老昏ニシテ多事ヲ好マズ審問ヲ經ズシテ之ヲ釋ス秀全等廣東ニ回リ寨ヲ佛

鎮山ニ立テ專抄略ヲ行ヒ黨ヲ集ムルコト愈多ク揚秀清石達開等ノ凶魁二十七人之ニ歸ス秀全乃事ヲ金田ニ起シ自郡賊二千人ヲ率キテ平樂府ヲ破リ秀清亦萬餘人ヲ率キテ醴林ヲ攻メ尋イテ永安等ノ數城ヲ陷レ官吏十餘人ヲ殺ス巡撫鄭祖琛此ニ至リ始メテ上奏ス廷議シテ征討ニ決シ兩江ノ總督李星沅ニ命ジテ賊ヲ勦サシム時ニ賊兵千總鄧紹良等ニ敗ラレ退キテ金田ノ老巢ニ返ル李星元貴州副將伊克坦布ヲシテ之ヲ伐タシム然ルニ嘉應ノ州民數千人賊ニ投ジ賊勢日ニ熾ンニシテ千總田繼壽等皆戰死ス此ノ年帝熱河ニ在リテ崩ズ時ニ年七十二皇太子位ニ即ク之ヲ文宗トイフ。文宗名ハ奕訢先帝ノ第四子ナリ咸豐ト改元シ天下ニ詔シテ直言ヲ求ム此ノ時ニアタリ洪秀全金田ヨリ關ヲ出デ大黃江ニ到リ提督向榮ト戰ヒ之ニ克チ心益驕リ自太平王ト號シ桂平貴武宣平ノ諸縣ヲ侵シ進シテ象州ニ入ル帝之ヲ聞キ又林則徐ニ命ジテ欽差大臣トナシ廣西ニ

赴キ、征勦ヲ督セシム。則徐、曾テ、粵ヲ督シ、恩威并ニ遠近ヲ壓ス。賊聞キテ、半ハ散ジ、秀全亦怖レテ、海ニ遁レンコトヲ謀ル。則徐、疾ヲカメテ出デ、與ニ臥シ、日行百餘里、星馳シテ潮州ニ次セシカ、病益劇シク、遂ニ廣寧ノ行館ニ卒ス。天下之ヲ惜ム。則徐卒セシヨリ、軍民倚ル所ヲ失ヒ、賊遂ニ制スベカラザルニ至レリ。

提督張必祿、更ニ旨ヲ奉ジテ、廣西ニ赴キ、未幾、バクナラズシテ、亦卒ス。必祿ハ、蜀中ノ名將、偏裨ヨリ、大帥ニ至ル。故ニ論者曰ク、則徐善ク謀リ、必祿善ク戰フ。能ク其ノ用ヲ竟ヘシメバ、賊平グルニ足ラジト。后、兩江總督向榮ヲ以テ、之ニ代フ。榮亦、士心ヲ得、常ニ陣ニ臨ミ、士卒ニ先チ、向フ所、皆捷ツ。賊甚之ヲ畏ル。大學士賽尙阿、與ニ到リ、師ヲ督ス。秀水知縣江忠源、來リテ、軍ニ從ヒ、賊ヲ永安ニ破ル。時ニ、洪秀全、象州ヨリ、新墟ニ回リ、賽尙阿ノ兵ト戰ヒ、伏ニ陥リ、衆三十人ヲ失ヒシガ、又、官軍ヲ破リテ、賊勢復振フ。是ニ於テ、秀全、水陸ヨリ、永安ヲ攻メテ、之ヲ陷レ、號ヲ建テ、太平天國トナ

シ、自、天王ト稱ス。諸賊ヲ封ジ、揚秀清ヲ東王トナシ、蕭朝貴ヲ西王トナシ、馮雲山ヲ南王トナシ、韋昌輝ヲ北王トナシ、石達開ヲ翼王トナシ、洪大聖ヲ天德王トナシ、大隊ヲ分チテ、莫家村ニ屯ス。都統烏蘭泰、之ヲ攻メテ、破リ、地雷火ヲ設ケテ、賊數十人ヲ殺ス。二年、烏蘭泰進ンデ、永安ヲ復シ、洪大聖ヲ擒ニシテ、京師ニ送ル。尋イデ、馮雲山、桂林ヲ犯ス。烏蘭泰、之ヲ聞キ、赴キ、援ヒ、遂ニ丸ニ中リテ、死ス。江忠源、疾ヲカメテ、馳セ至リ、賊ヲ破リテ、桂林ノ圍ヲ解キ、賊ヲ金州ニ走ラス。忠源、走ルヲ追ウテ、銃ヲ發シテ、馮雲山ヲ殪ス。賊將楊秀清、廣西城ヲ攻メテ、勝タズ。去リテ、道州ヲ取リ、桂陽城ヲ陥リ、次ギテ、長沙ヲ圍ム。巡撫駱秉忠等、拒戰、頗力ム。會江源忠來リ、援ヒ、礮ヲ以テ、蕭朝貴ヲ殪シ、其ノ尸ヲ獲テ、之ヲ集セリ。洪秀全、楊秀清、之ヲ聞キ、俱ニ來リテ、力ヲ併セ、城ヲ將ニ陥ラントス。然レドモ、官軍殊死シテ、戰ヒ、城辛ウジテ、全キヲ得タリ。是ニ於テ、賊皆、湘ヲ渡リテ、南ニ去ル。然ルニ、賊又、寧鄉ヲ攻メテ、之ヲ破リ、各路ノ土寇ヲ并セ、衆十余萬ヲ得テ、岳州ヲ圍ミ

テ、其ノ城ヲ陷ル。城中、吳三桂ノ軍械、砲礮ヲ存ス。皆賊ノ有トナル。賊勝ニ乘ジテ、長江ニ入り、商船數百ヲ奪ヒ、供秀全、自龍舟ニ駕シ、黃旗ヲ樹テ、長驅シテ、漢陽府ヲ攻メ、地雷火ヲ以テ、門ヲ破リ、遂ニ城ヲ陷レ、盡貨財ヲ掠メ、江ヲ渡リテ去ル。十二月、賊武昌ヲ攻ム。欽差將軍向榮、兵六千ヲ率キテ、日夜馳セ到リ、連戰賊ヲ破ル。時ニ天大ニ雨フリ、平地水深キコト數尺ニ及ブ。榮軍ヲ引キテ、營ニ還ル。明朝賊ノ大隊、門ヲ破リテ入り、大ニ城兵ヲ破リ、數十人ヲ殺ス。榮、江ヲ阻テ、船ナクシテ、來リ援フ能ハズ。洪秀全、優伶二百人ヲ獲テ、連日城上ニ演ズルモ、官軍、江ヲ隔テ、遙ニ之ヲ望ミ、如何トモスル能ハズ。三年、洪秀全、盡寶貨ヲ載セ、全軍武昌ヲ出デ、舳艫相含ミ、進ミテ九江ニ向フ。欽差陸建瀛、二萬余人、千五百船ヲ率キテ、江ニ沿ウテ下リ、賊ニ黃石港ニ遇ヒ、戰ヒ、破レテ金陵ニ走ル。賊進ミテ九江ニ到リ、官軍ノ委棄セシ砲仗ヲ收メ、大軍、江ヲ下リテ、安慶ヲ破リ、巡撫蔣文慶ヲ殺シ、銀數十萬兩、米四十萬ヲ奪ヒ、水陸並ビ進ンデ、太平蕪湖ヲ取り、金陵ヲ犯

ス。金陵ハ、明ノ南京ナリ。石達開、韋昌輝ノ大隊、先、城ヲ攻ム。城兵、類ニ、空砲ヲ放ツ。賊、其ノ備ナキヲ知リ、四方並ビ攻メ、城遂ニ陷ル。賊勝ニ乘ジテ、湖州城ヲ圍ム。兩湖總督吳文鎔、擊チテ之ヲ卻ク。洪秀全、更ニ兵ヲ分チテ、江南ヲ守リ、自淮安ヨリ、北京ヲ襲ハント欲ス。或人、説キテ曰ク、北路水無ク糧乏シ、今、長江ノ險ニ據リ、舟師ヲ備ヘ、金陵ヲ以テ、基トナスベシト。乃、其ノ策ニ隨ヒ、林鳳祥ヲシテ、水陸東下シ、鎮江、揚州ノ二府ヲ陷レ、資財數百萬ヲ劫カシ、分チテ、浦口、瓜州ヲ扼シ、以テ、南北兩路ノ師ヲ阻ツ。此ノ月、漕運總督楊殿邦、揚州ヲ攻ム。大學士琦善等、來リ會シ、兵ヲ合セテ、賊千五百人ヲ斬リ、城外、遂ニ賊蹤ナキニ至レリ。時ニ、侍郎曾國藩、トイフモノアリ。親喪ヲ以テ、湖南湖鄉ニ在リ、詔シテ、鄉兵ヲ治シテ、賊ヲ討タシム。國藩、詳ニ方畧ヲ設ケ、鄉勇ヲ練リ、明ノ戚繼光ノ陣法ニ仿ヒ、每營五百人トシ、軍法ヲ嚴ニシ、先、衡山、瀏陽ノ賊ヲ敗リ、皆之ヲ平グ。是レヨリ、湘勇ノ名、一時ニ高シ。

此ノ時ニアタリ、洪秀全、金陵ヲ以テ、巢穴トナシ、吉文元ヲシテ、河南ヲ侵サシム、巡撫陸應毅ト戰ヒ、敗レテ、黄河ヲ渡リ、又、襄城、鄆陵等ノ十四縣ヲ拔キ、兵八萬ヲ合セテ、河ヲ渡リ、懷慶ヲ攻メ、大學士勝保ノ來リ援フニ會シ、軍破レテ、遂ニ之ニ死ス。勝保、勝ニ乘ジテ、晋省ノ賊ヲ破リ、又、梁州ヲ復ス。然ルニ、江源忠ハ、南昌ヨリ、九江ニ赴キ、賊ト、田家鎮ニ戰ウテ、遂ニ敗レシカバ、賊兵、遂ニ、黃州ヲ陷レ、又進ンデ、漢陽ヲ拔ク。

時ニ、國藩、軍ヲ督シテ、衡州ニアリ。水勇四千ヲ募リ、大ニ、軍艦ヲ治メ、砲礮ヲ具ヘ、水陸並ビ進ンデ、武昌ヲ下シ、漢陽ヲ復セリ。國藩、又、諸將ヲ督シテ、賊將陣王成ヲ、九江ニ破ル。是レヨリ、官軍、漸、勢ヲ得、翰林編修李鴻章ハ、千總、莫青雲ノ、練兵ヲ率キテ、含山ヲ攻メ、之ヲ陷レ、徵寧道員何桂珍ハ、賊將李兆受ヲ、鶴城ニ破リテ、之ヲ降シ、江蘇ノ巡撫吉爾杭阿ハ、賊ヲ擊チテ、上海ヲ復シ、郡王僧格林沁ハ、林鳳祥等ヲ擒ニシテ、河北ヲ平グ。是レヨリ、先賊、漢陽、漢江ニ據リ、水師ノ攻撃ヲ恐レ、敢テ、江ヲ渡ラザリシガ、五年、武昌

城ノ備少キヲ見テ、之ヲ陷レ、又進ンデ、義寧ヲ拔キ、瑞洲ヲ犯ス。知府劉希洛、拒戰シテ、之ニ死ス。曾國藩、九江ノ全軍ヲ遣シ、副將周鳳山ヲ將トシテ、之ヲ援ヒ、遂ニ、瑞城ヲ復ス。六年正月、布政使羅澤南、武昌ヲ攻メ、連戰賊ヲ破リシガ、遂ニ、敵丸ニ中リテ死ス。死ニ臨ミ、胡林翼ノ手ヲ握リテ曰ク、武漢、未、克、タズ、江西、復、危シ。兩ツナガラ、願ミル、能ハズ。死、何ンゾ惜ムニ足ラムヤ。但、事ノ了ラザルヲ恨ムノミト、語畢リテ瞑ス。此ノ年七月、胡林翼、石達開ト、武昌ニ戰ウテ、大ニ之ヲ破レリ。

江蘇ノ巡撫吉爾抗、金陵ノ賊ヲ討タントシテ、鎮江ニ到リ、先、敵ノ糧道ヲ絶タントシテ、高資ニ據ル。賊、銳ヲ悉シテ來リ攻メ、遂ニ、吉爾抗ヲ殺ス。欽差大臣向榮、之ヲ聞キ、提督張國樑ヲ遣シ、之ヲ援フ。賊走リテ、金陵ニ回ル。時ニ、榮、丹陽ニ在リ、病ヲ獲テ、軍ニ卒セリ。金陵ノ賊將、楊秀清、秀全ヲ除キテ、自立セントス。秀全、其ノ謀ヲ知り、韋昌輝ヲシテ、秀清ヲ殺サシム。然レドモ、賊ノ、已ニ服セザルヲ恐レテ、又、昌輝ヲ殺ス。是ニ於テ、賊ノ舊將殘レ

ルモノハ、石達開ノミ。然レドモ襄陽ノ匪徒之ニ應ジ、賊勢頗盛シナリ。官軍之ヲ憂ヘ、欽差官文大舉シテ漢陽ヲ復シ、胡林翼ハ武昌ヲ平ゲ、國藩亦江西ノ諸賊ヲ走ラセリ。七年ニ至リ、國藩父ノ喪ニ由リ任ヲ解キ、總兵楊裁福ヲ以テ、其ノ軍ヲ統ベシム。官軍進ンデ、楊洲及ビ鎮江ヲ復シ、尋イデ金陵ヲ攻メシモ、城固クシテ拔ケズ。賊將陳玉成、別ニ兵ヲ率キテ、湖北ノ諸州ヲ犯シ、麻城ニ入ル。賊又、福建ヲ犯スモノアリ。帝詔シテ、曾國藩ヲ起シ、浙江ニ行キテ、軍務ヲ辨理セシム。時ニ賊勢日ニ猖獗ヲ極メ、崇安、建陽ヲ取り、進ンデ、建寧府ヲ圍ム。國藩命ヲ奉ジテ、閩省ヲ援ヒ、鉛山ヨリ、軍ヲ進メ、勢威大ニ振フ。然ルニ、陳玉成ノ軍、楊洲ヲ攻メ、六合、三河ヲ下シ、常ニ官軍ヲ破リ、勢ニ乗ジテ、廬州ヲ下ス。后、遂ニ胡林翼ニ破ラル。石達開ハ、江西ヨリ、湖南ヲ犯シ、諸城ヲ陷レ、遂ニ廣東ヲ犯ス。是レヨリ先、秀全、金陵ニアリテ、和春、及ビ張國樞等ニ攻メラレ、戰屢敗レシガ此ニ至リ、漸圍城ノ官軍ヲ破リ、出デ、丹陽ヲ下セリ。斯ク、内憂未治マラザルニ當リ、清更ニ、

外國ト繋ヲ開キ、英佛ノ二國、兵二萬ヲ合シ、來リテ、北京ニ逼レリ。サテ、此ノ年、賊蘇州ヲ犯シ、嘉興ヲ陷レシカバ、十年ニ至リ、帝更ニ、曹國藩ニ詔シテ、兩江ノ總督トナシ、尙書ヲ加ヘ、江南ノ軍務ヲ督セシム。國藩、左宗棠等ヲシテ、湘勇四營ヲ増募セシメ、軍ヲ練リ、以テ進勦ニ資ス。時ニ、石達開、歸化城ヲ陷レ、別ニ湖南ニ侵入シテ、綏寧、東安ヲ下ス。陳玉成、亦、衆十萬ヲ率キテ、霍山ノ營ヲ犯シ、城將余際昌ヲ破リ、襲ウテ、黃州ヲ取り、蘄州ヲ陷レ、勢益張ル。官軍ニテハ、曾國藩、胡林翼ヲ始メ、大常卿、左宗棠、浙江巡撫、曾國荃等、四方ニ轉戰シテ、賊兵ヲ破リシカバ、金陵ノ賊勢ハ、漸衰ラ。然レドモ、秀全、其ノ將李秀成等ヲシテ、浙江ヲ犯サシム。賊又、上海ニ侵入シテ、怨ヲ外人ニ結ビシカバ、外人、大ニ怒リ、賊ヲ討タント欲スルモノアリ。是ニ於テ、上海ノ官紳、相議シテ、京師ニ奏シ、會防局ヲ立テ、洋兵ヲ借リテ、賊ヲ討タント請フ。時ニ、咸豐十年ナリ、翌年、帝崩シ、皇太子位ニ即ク。之ヲ穆宗トイフ。

穆宗諱ハ載仁先帝ノ長子ナリ同治ト改元ス是レヨリ先上海ノ守吳煦、呂宋人ヲ募リテ兵トナシ亞米利加人華爾ヲシテ之ヲ統ベシメ以テ洋槍隊ヲ設ク蓋吳郡ノ處士王韜ノ建議ニ由レリ洋槍隊毎戰先ヲ爭ヒ常ニ砲軍ヲ破リシカバ遂ニ常勝軍ノ名ヲ得タリ已ニシテ華爾戰没シ白齊文之ニ代リ賊ヲ討チテ戰功アリ然レドモ其報酬意ニ滿タザルヲ以テ去リテ賊ニ投ジ其ノ謀主トナル白齊文ハモト米國無頼ノ徒ニシテ遂ニ官軍ニ捕ヘラレテ死ス是ニ於テ英國ノ士官戈登常勝軍ノ將トナリテ兵ヲ指揮セシヨリ官軍漸勢ヲ得李鴻章曾國荃左宗棠劉銘傳等荐ニ賊ヲ破リ遂ニ陳玉成ヲ壽州ニ擒ニシ石達開ヲ四川ニ擒ニセリ勢ニ乗ジテ曾國藩彭玉麟曾國荃等兵ヲ合セテ金陵ヲ圍ム賊殊死シテ戰フコト三日城中食盡キ斃死セシ者多シ秀全爲スベカラザルヲ知り遁レテ民舍ニ入り遂ニ毒ヲ服シテ死スコトニ至リテ官軍金陵ヲ復シ盡其ノ餘黨ヲ誅ス時ニ同治三年ナリ秀全兵ヲ起シテヨリ大凡十五年其ノ

禍十六省ノ地ニ波及シ庶民ノ不幸殊ニ甚シカリシトイフ亂平ギテ后帝詔シテ告成ノ禮ヲ修メ大ニ功臣ヲ封ズ即曾國藩ヲ一等侯ニ封ジ以テ世襲セシメ國荃及ビ李鴻章ハ共ニ二等伯ニ封ゼラル其ノ他ノ大臣將士戰功アルモノ皆恩賞ヲ受ケヌ

第八章 英佛同盟軍トノ戰爭。

咸豐十年清廷ガ英吉利佛蘭西ノ同盟軍ニ攻撃セラレ舟山島其ノ守ヲ失ヒ太沽天津北京ノ防備終ニ寸効ヲモ奏セズシテ城下ノ盟ヲナシハ其ノ原因實ニ攘夷ノ心ニ存セリ咸豐六年清人放火シテ廣東ナル歐人ノ家屋ヲ焚キシハ是レ英佛兩政府ノ憤怒ヲ招ギシ導火ニシテ七年十二月事局平和ニ歸シタリシモ其ノ次年六月ニ至リ清兵不意ニ英佛ノ軍ヲ白河口ニ攻撃セリ是ニ於テカ兩國政府ハ事ヲ兵戈ニ訴ヘテ理

否ヲ決セント欲セリ。清廷ハ、僧格琳沁親王ヲ以テ、防禦ノ將トナシ、太沽ノ砲台ヲ固メテ、茲ニ同盟軍ノ進行ヲ扼セント謀ル。英佛ノ兵ハ、大約二萬、英ノ中將グラント、佛ノ中將モントバン、各其ノ國ノ兵士ヲ師キテ來レリ。サテ、英佛兩國ノ軍隊ハ、東洋ニ來着シテヨリ、香港、澳門、及ビ廣東等ニ屯集セシガ咸豐十年三月ニ至リ、佛軍ノ總督モントバンノ發議ニテ開戦根據ノ地ヲ定メントシ、英佛ノ諸將、集會ヲ開ケリ。四月、佛國ノ小艦隊、先鋒トナリ、英國ノ艦隊、之レニ次ギ、舟山島ニ進ミ、該島ノ都、定海府ノ港頭ニ在ル、堡壘ノ前面ヲ通過セシニ、岩内武備ノ嚴ナラザルニ乘ジ、諸艦、此處ニ投錨シ、士官數名、島吏ト應答シ、該島ヲ交付スベキ事ヲ請フ。吏之ヲ拒ム能ハズ、其ノ意ノマ、ニ隨ヘリ。

英佛兩國ノ長官ハ、該島ノ長官ト、條約ヲ結ビタリ。其ノ要領ニ曰ク、(一)舟山島、及ビ定海府ノ官吏ハ、其ノ軍用品ハ、勿論、政廳ニ至ルマデ、同盟軍ニ

交付シ、局外中立ノ旗下ニアル事。(二)該地ノ戍兵ヲ解散スル事。(三)英佛、各二名宛ノ委員ヲ設ケ、官吏ノ職務ヲ統轄スル事。(四)行政、立法、會計、租稅等ヲ担任スル島吏ハ、右委員ニ屬シ、委員ハ、司令長官等ノ命ニヨリ、島吏ヲ使用シ得ル事。(五)島内、及ビ府内ヲ鎮撫スル爲、同盟兩軍ヨリ、兵員ヲ出シテ、警衛セシムル事等、是レナリ。

兩軍、舟山島ヲ略取シテヨリ、舊規ノ弊政ヲ改革シ、法廷ヲ開キ、風紀ヲ警戒シ、務メテ、居民ヲ撫輯セシカバ、島民安堵シ、却リテ、同盟軍ノ統治下ニ在ルヲ喜ビタリ。

六月、佛ノ將官ハ、軍ヲ進メテ、芝罘ニ據リ、兵食ヲ蓄ヘ、軍馬ヲ修練シ、英ノ將官ハ、大連灣ヲ占領シ、日ヲ期シテ、太沽ニ向ハントス。當時、太沽ノ堡砦ハ、清廷ハ、最意ヲ用ヒテ、建築セシモノニシテ、五個ノ堅壘兵器ト、軍兵トヲ以テ充タサレ、壘外、亦柵ト濠トヲ設ケテ、支那第一ノ砲台ト號セリ。八月初旬、清兵ノ防備、嚴ナラザルヲ察シテ、同盟軍ハ、北塘近傍ニ、上陸シ、日

ナラズシテ、太沽ニ進マントス。依ツテ、清兵之ヲ塘沽ニ防ギシモ、終ニ利アラズ。然レドモ、同盟軍モ、地理ニ暗キト、泥水ノ多キトニヨリテ、頗苦戦シタリ。

八月中旬、英佛ノ將官等、太沽攻撃ノ準備ヲナシ、且、攻撃ノ方略ヲ議定セシニ、英ノ司令長官グラントハ、堅壘ヲ抜クニ方リテハ、專、策略ヲ施シ、兼、ネテ、同盟ノ兵士ニ損傷ナキヲ欲シ、佛ノ司令長官モントバンハ、之レニ反シテ、直ニ猛進シテ、清將僧格琳珖ノ營下ニ突入シ、先、須ラク將ヲ擒ニスベシ。而シテ、天津、北京ニ向ハンニハ、吾人ノ生命ヲ犠牲ニ供シテ奮前スベシト主張セシガ、終ニ熟議ノ上、温論ニ決セリ。二十一日、黎明、同盟兵ハ、清砦ヲ攻撃シ、砲兵ヲ點置シテ、發射法ヲ行フ。清兵、亦、壘中ヨリ、應ジテ、發砲シ、是レヨリ、砲聲激烈トナリ、二時間、兩軍、死戦シ、殊ニ、韃靼兵、能ク守レルヲ以テ、同盟ノ兵士モ、砦壘ノ堅キニ一驚シタリ。然ルニ、同日午前七時頃、胸壁ノ背后ニ、一大爆聲ノ起ルアリテ、黒烟、天日ヲ蔽フニ至リシガ、

又、三十分ヲ經テ、白煙赤光、四方ニ散亂シテ、大ニ清軍ヲ惱マシヌ。是レ、敵ノ小艦ヨリ發シタル砲彈ノ火藥庫ニアタリテ、破裂シタルモノニシテ、清軍ノ敗兆ハ、正ニ此ノ時ニ現レタリ。

然レドモ、壘中ノ發砲ハ依然トシテ、敵兵ヲ困メシカバ、佛軍ヨリ十二斤砲二門、英軍ヨリ、忽、微砲二門ヲ送り來リテ、此ノ堡壘ヲ急撃シ、更ニ佛將コリノトハ、大尉某ヲシテ、軍前ノ壘内ニ闖入スル爲、其ノ障害物ヲ探檢セシム。ソノ后、暫時、諸堡壘ノ發砲ヲ止メ、同盟兩軍ノ將官ハ、協議ノ上、各、侵入隊ヲ進メ、佛兵ハ右ヨリ、英兵ハ左ヨリ、海ニ接シテ、壘后ノ中央ニ向ツテ、進發セリ。

此ノ際、最苦戦シ、最勇氣ヲ鼓シタルハ、佛將コリノト部下ノ兵士ナリトス。佛ノ尉官ハ、人夫隊ヲ率キテ、河ニ沿フ、敵砦ノ凸角マデ突進シ、尙、水沼ヲ越エテ、外營ノ側ナル、狹處ニ赴キ、更ニ此ノ處ヨリ、砦壁ヲ攀チ、其ノ内ニ侵入セント欲セシガ、傷ヲ負フ者多キニヨリ、擔夫隊ノ一二人ハ、遂巡

シテ歩ヲ進メズヨリテ、工兵ハ擔夫隊ノ遺棄シタル梯ヲ持シテ勇進シ、梯ヲ以テ、壘壁ニ靠ラシメ、辛ウシテ、壘中ニ闖入スル事ヲ得タリ。此ノ際、壕内ニ扁艇橋ヲ架セン爲ニ、之レヲ擔行シタル兵卒十五人許ハ、一瞬間ニ擊殺セラレ、扁艇橋亦、一個ヲ毀タレタリ。幸ニ、海兵モ亦、援兵トシテ、來會シ、接戰肉薄ノ法ヲ行ヒ、銃劔ヲ提ゲテ、胸壁ニ攀躋セシカバ、清兵ハ、死力ヲ盡シテ拒死シ、ゴングール砲ヲ始メ、弓矢ハ、佛兵ノ頭上ニ雨下シ、其ノ甚シキニ至リテ、手中、彈丸ヲ擲チテ、敵兵ニ中ツル者アリ。然レドモ、佛ノ鼓手ハアンヤ、ルヲシテ、先登、國旗ヲ胸壁上ニ建テシメタリ。英將ネビエールノ部下ハ、此ノ機會ニ乗ジテ、或ハ佛ノ扁艇橋ヲ渡リ、或ハ水中ニ投ジテ、水ヲ越エ、路ノ狹隘ナルニモ拘ハラズ、突岩各處ノ破口ヨリ、奮進シテ、佛軍ト同ジク、高臺ニ聯隊旗ヲ翻セリ。兩軍此ノ如ク、壘中ニ侵入セルニヨリ、清兵、竟ニ支フル事能ハズ、壘外ニ遁レシガ、同盟軍ノ進撃ヲ妨ゲタル濠泥、及ビ尖柵ハ、同ジク、健兵遁走ノ

害ヲナシ、三人ノ清人ハ、尖竹ニ懸リテ死セリ。殊ニ同盟軍ハ、舊敵地タリシ高臺ヨリ、敗卒ヲ射擊セルニヨリ、走者ノ死者、傷者、磊々トシテ堆ヲナシ、鮮血ハ流レテ濠ニ入り、血河尸山ノ野ト變ゼリ。此ノ第一壘ノ激戰ニテ、清人ノ死傷千人ヲ超エ、同盟軍ニテハ、死傷四百人ニ及ビ、戰鬪ノ猛烈ナル、此ノ戰爭中ノ最大一トナス。時ニ、午前第九時ナリ。同盟軍ハ、直ニ進ンデ、第二壘ノ砲擊ニ從事セントスルヤ、清兵ハ、全ク、右岸ノ砲火ヲ止メ、諸壘上ニ、白旗ヲ翻セリ。既ニシテ、清兵、英、佛兩國ノ公使等ニ面謁セン事ヲ求ム。會、公使等ノ不在ナルヲ以テ、兩國ノ將官、協議シテ、英人パークスト共ニ、各、其ノ部下ノ士官ヲ送リタリ。清人ノ意ハ、同盟兵ハ、既ニ、一堡砦ヲ據有シタルニヨリ、是レヨリ、天津行ノ自由ヲ許スベシトイフニ在リ。然ルニ、同盟軍ノ使者ハ、其ノ書ヲ寸裂シテ、清人ノ面上ニ投ジ、叱シテ曰ク、同盟軍ノ向フ所、金城、鉄壁、尙、破ル可シ、汝等ノ堡砦ノ如キハ、一投足ノ勞ノミ、本日午後二時ニ及ビ、全ク、恭順ノ禮ヲ行ハザレ

バ、數萬ノ騎兵ヲ一時ニ屠ル可シ。汝之レヲ其ノ將ニ傳ヘヨト。清吏悄然タリ。午后第二時、同盟ノ兵士梯シテ第二壘ノ城壁ニ上レバ、壘中三千ノ清人ハ、砦門ヲ開キテ、同盟軍ヲ迎ヘリ。

此ノ際、佛國ノ士官等、清國船若干艘ヲ掠有シ、英人パークス等ト共ニ、右岸ニ上リ、南壘ニ進ミテ、白河諸壘ノ交付ヲ請求セリ。始メ、此ノ一行三百人ノ第一壘ニ入ラントスルヤ、清兵、橋梁ヲ撤シテ、其ノ進入ヲ拒絶セリ。又、書ヲ贈リテ、北部ノ諸壘、及ビ白河口ハ、交付スルモ、右岸バ、永久ニ維持セン、トノ意ヲ述ベタリ。ヨツテ、兩國ノ將官、公使等ハ、協議シテ、更ニ副王(北直隸)ニ面會セン事ヲ請ヒシニ、副王ハ、使者ヲ待遇スル事、頗懇切ヲ極ムレドモ、其ノ辯論ニ至リテハ、依遲シテ決行セズ。使者パークス、殊ニ精神ヲ竭シテ、清吏ト論談セシニヨリ、辛ウジテ、左ノ條款ニ捺印セシメタリ。

一、白河右岸ニ沿フ諸堡壘、及ビ附屬スル砲煩彈藥ヲ、交附スベシ。

一、清吏ヲ派遣シテ、火藥庫、並ニ地雷ヲ、指摘スベシ。

一、白河ノ水柵工事ヲ、詳示スベシ。

然ルニ、不幸ニシテ、此ノ條約書ハ、二十二日ノ早天。兩軍ノ將官ニ達シタルニヨリ、前日ノ二十一日ノ午后、兩軍ノ兵士ハ、進シテ、南壘ニ據リ、衛兵守ヲ棄テ、天津ニ走ル。是ニ至リテ、白河諸壘、全ク、敵軍ノ掌裡ニ歸シ、堡壘五個、陳營二個、武器彈藥、其ノ他、砲煩五百十八門、内百十一門ハ、皆、敵手ニ入レリ。

白河口ノ諸壘、敵手ニ歸シタルヲ以テ、清廷ハ、上下色ヲ失ヒ、朝臣ノ議論、頗、紛然タリシガ、同盟軍ハ、水陸并進シテ、八月二十五日ニハ、天津近傍ニ進軍セリ。此ノ時、兩司令長官ハ、書ヲ清吏ニ贈リテ曰ク、天津ハ、既ニ英佛ノ有ニ歸シタリ、ト見做スベシ。但、地方官ノ如キハ、各、其ノ職ヲ守リ、務メテ、其ノ任務ヲ盡シ、人民ノ保護ヲ能クセヨト。蓋、是レヨリ先、一隊ノ水兵ハ、天津城ノ東門ニ占據セシガ、更ニ、門上ニ英佛兩國ノ章旗ヲ懸シ、其ノ

所屬ノ改マリタル事ヲ布告シ、尙、市民ノ豪富ナル者ト、契約ヲ結ビテ、不日、英佛ノ大軍、此ノ地ニ至ルモ、其ノ食料ノ買收ニ、不都合ナカラシメン事ヲ、盟訂セリ。當時、此ノ市外ニ在リシ清兵ハ、前日ノ敗ニ懲リテ、多クハ遁竄シ、人民ハ、皆、平和ヲ望ミタリ。

カクシテ、英佛ハ、天津府ヲ占領シ、英兵ハ、天津河ノ右岸ニ、佛兵ハ、其ノ左岸ニ、露營ヲ張レリ。時ニ八月二十七日ナリ。

九月初旬、僧格琳珺、苦策ヲ運ラシテ、敵兵ト詐リ和シ、其ノ虛ニ乗ゼントシテ、事成ラズ。却リテ、敵ノ怒ヲ招ク。乃、英佛ノ大兵ハ、九月九日、天津ヲ發シテ、北京ヘ進軍セリ。張家灣ニ於テ、清兵三萬死力ヲ竭シテ、之ヲ防ギシガ、又敗レ、其ノ地方ノ人民ハ、四方ニ奔竄シテ、頗、慘狀ヲ極メタリ。此ノ戦争、清人、偽計ヲ設ケテ、英人バークスヲ虜ニス。然レドモ、通州ト、北京トノ要衝ニ當レル八里橋モ、佛軍ノ手ニ奪レテ、清兵、皆、北京城ノ内外ニ退カザルヲ得ズ。此ノ際、恭親王、書ヲ敵ニ贈リテ、和ヲ求メタレドモ、敵兵ハ、之

レヲ信ゼズシテ、二萬ノ兵、直ニ北京廓外ニ侵入シ、離宮圓明殿ニ據リ、其ノ寶物ヲ奪ヒ、且、后日ニ至リ、之レヲ燒夷セリ。

十月十日ニ至リ、兩國ノ司令長官、書ヲ恭親王ニ贈リテ曰ク、本月十三日正午ヲ期シテ、安定門ヲ開キ、我が兵隊ヲ都城内ニ導ク可シ。若、之レヲ肯ゼザル時ハ、止ムヲ得ズ、發砲シテ、侵入スベシト。是レヨリ、兩軍ハ、攻城ノ工事ヲ開キ、將校士卒、皆、勉勵シテ、速ニ、其ノ實ヲ舉ゲンドセリ。而シテ、破壊隊ハ、砲兵二中隊ニシテ、其ノ一ハ、英ノ六十八リール砲四門、其ノ二ハ、佛ノ十二斤忽微砲四門ニシテ、安定門ト、城廓ノ東北隅トノ間ニ備ヘ、英砲兵ハ、地壇ト稱スル所ニ在ツテ、都城ヲ距ル事、殆、二百五十米突ニシテ、佛砲兵ハ、大凡七十五米突ノ所ナリ。而シテ、同盟ノ軍ハ、區々タル砲隊ノ、一兩日間ノ工事ニヨリテ、壯大無比ノ城門ヲ破ラントノ企ナレバ、英佛ノ將校モ、頗、苦辛ノ体ニシテ、且、清兵ハ、之レヲ輕蔑シ、胸壁ヨリ瞰視シテ、冷笑漫罵セリ。

既ニシテ調停ノ事ニ盡力セル恒貴ハ、兩國ノ委員ニ應接シテ、愈々其ノ請求ヲ許可セントノ模様ナリシカバ、佛ノ將校カンベノン、及ビバトクスノ二人バ、恒貴ト應接シテ、辨論刻ヲ移シ、始メ恒貴ハ、兩國ノ請求ヲ拒マント試ミシガ、又成ラズ。

當時ノ安定門ハ、聳然トシテ、高大ナル巨屋ナリ。其ノ外郭ヨリ南ニ向ツテ、門ニ近附ケバ、突出シタル高壁アリテ、壁頭ニ巨大ナル方形ノ成樓アリ。又、其ノ樓ニ、上下四層ノ鏡眼アリ。每層一列ニ十二眼アリ。而シテ、門前ニ石橋アリテ、其ノ下ニハ、堀アレドモ、時アツテ乾燥ス。橋ヲ越エ、左ニ回ツテ行ケバ、甃路圓壁ニ沿ウテ、屈繞シ、第一門ニ入ル可シ。而シテ、胸壁ハ、幅十七米突許ニシテ、巨口砲數門、無數ノ小砲ヲ具ヘタリ。

十三日正午ニハ、清人約ニ背カズシテ、安定門ヲ開キシカバ、兩軍ノ一大隊ハ、進ンデ、城郭上ニ旌旗ヲ立ツ。此ノ時、都民群集シタルヲ以テ、街道ニハ、繩ヲ横タヘテ、以テ、群集ノ人ヲ止メ、更ニ番兵ヲ置キ、且、其ノ出入ヲモ

禁ゼリ。

カクノ如ク、同盟軍ノ請求ハ、着々、其ノ歩ヲ進メタリト雖、未、判然タル盟訂ヲナササルニ、漸々、寒氣ニ向ヒ、四方ノ樹林ハ、松葉散落シテ、毎朝、霜ノ軍營ニ滿タザルナク、山々、皆、雪ヲ戴キ、太陽、亦、冬色ヲ帯ビテ、寒風、肌ヲ侵シ、カバ、暖國ニ生長シタル、印度兵ノ如キハ、病体トナリテ、戦鬪力ヲ失ヒシカバ、將校始メ、兵卒ニ至ルマデ、早ク、講和ノ件ヲ整ヘ、歸國セン事ヲ思ヘリ。殊ニ、佛將モントパンハ、十一月一日ヲ期トシテ、此ノ地ヲ去リ、一旦、天津ニ退軍セン事ヲ、主張スルニ至レリ。

是ニ於イテ、兩公使ハ、兩總督ノ意見ニ從ヒ、更ニ清政府ニ向ツテ、國書ヲ送ル。其ノ大略ニ曰ク。

「英、佛兩國ノ臣民、今回ノ事件ニ付キ、死傷セシ者ノ償金トシテ、先般、談判ニ及ビシ高、即、英三十万テール、佛二十万テールヲ、本月二十二日ニ渡シ、且、二十三日ニ、盟約書ニ押印シ、天津條約ヲ、取リ替ス可キ事ヲ二十日(因

ニ云フ。英將等ハ、始メ、二十日トイフ期限ヲ縮メ、十九日ニ確答ヲ得ズンバ、二十日ニ攻撃スベシト主張セシニ、佛將等ハ、英公使等ニ諭シテ、佛軍ニテハ、二十三日前ハ攻撃セザル事ヲ以テセリト、ノ午前十時前迄ニ確答ナキ時ハ、我ガ軍ハ、兵戈ヲ以テ、北京ノ帝宮ヲ取り、支那政府ヲシテ、強國ヨリ、談判ニ及ビシ、各件ニ從ハシム可シ。且、支那政府、若、頑固ニシテ、到底、予等ガ言ヲ聽カザランカ、海陸軍ノ將帥ハ、勝戦ニ乗ジテ、其ノ爲ス所、必、計ル可ラザルニ至ラン。是レ、予等ノ、預、此ノ書ヲ送クル所以ニシテ、又、予等ノ好意ニ外ナラス。尙、聊、茲ニ、支那政府ニ教ヘン。清廷、若、穩和ナル方便ニ傾カバ、廣東府ハ、同盟軍ノ占領セシ地ナリト雖、其ノ地ノ諸税ハ、支那ニ納レシム可ク、又、嘗テ一揆ノ爲、上海ノ陷ラントセシヲ保護セシハ、同盟軍ノ力ニ由レバ、河海ハ、同盟軍ノ權内ニアリト雖、北京ニ搬輸スル、米穀貢税ヲ載スル船隻ハ、敢テ、害ヲ加フルコトナカルベシ。清廷、須、是等ノ事ヲ、熟思セラル可シ。之レニ反シテ、和約ノ破ル、時ハ、是等ノ物ヲバ、

今日ノ景狀ニアラシムルヲ得ズ。予等、直ニ、海軍總督ト謀リテ、其ノ貢税又押へ、舟路ヲ斷テ、支那政府ノ不信ヨリ生ジタル軍馬ノ費用ヲ償ハシム可シト。

英佛ノ兵ハ、寒氣ニ困難ヲ生ゼン事ヲ恐レタリト雖、其ノ戦争上ニ於イテハ、又、恐ル、憂ナカリキ。何トナレバ、此ノ時ニ當リ、清政府ハ、一揆長髮賊ノ北京ニ侵入セントノ風評サヘアルニ加ヘテ、帝ハ、熱河ニ遁レ、驍將價格琳沁ハ、最早、同盟軍ヲ掩撃セントノ勇氣ヲ失ヒタレバナリ。

二十日ノ朝、清政府ハ、其ノ請求ヲ皆承諾セリ。

此ノ許諾ハ、當時支那ニ在留スル魯國特命全權公使ノ、政府ニ向ツテ、兩強國ト永ク怒ヲ結ビ、戦争ヲ事トスルハ、智人ノ爲スベキ事ニアラザルヲ説諭セシニ由レリトノ風説アリ。又、此ノ時、天主教徒ノ二人某々トイフ人、北京府内ニ在リテ、和議ヲ勸メタルニモ由レリト。故ニ、其ノ后、禮謝トシテ、清廷支那六等官ノ掛クル、扣鈕ヲ送リシガ、僧等ハ、辭シテ、之レヲ

受ケザリキトモイフ。
 因ツテ二十二日ニハ、請求ノ金額五十萬テールノ交附ヲ爲シ和約ノ信
 書交換ノ準備モ、亦全ク整頓シ、且、清帝ノ批准サヘ得タルヲ以テ、翌二十
 三日ニ至リ、兩公使ハ、府知事ノ請ニヨリ、清政府ノ館内ニ住スル事トセ
 リ、而シテ、和親ノ祝會ハ、英ハ、二十四日ニシテ佛ハ、其ノ翌日ト定メタリ。
 今、其ノ訂盟ノ條件ヲ案ズルニ、清廷ハ、英佛ノ兩國ニ、各、八百萬テールノ
 償金ヲ出シ、天津府、及、ヒ其ノ他ノ港頭ヲ以テ、互市場トナシタル等、總テ、
 同盟軍ノ大勝ニ歸セリ。
 十一月一日ニ到リ、佛軍ノ總督モンパントバンハ、一隊ヲ北京ニ駐メテ、同國
 公使館ノ護衛トナシ、自、其ノ餘ヲ提ゲテ、歸路ニ着ケリ、而シテ、英兵モ、亦
 數日ヲ經テ、北京ヲ去リ、互ニ舟山島ノ戍兵ヲモ撤シテ、風帆高ク、大西洋
 ノ天ニ歸レリ。

第九章 大日本トノ關係。

支那ノ、日本ト交通ヲ開キシハ、遠ク、隋唐ノ世ニアリ。宋元ヲ經テ、明ニ至
 ルマデ、屢使臣ヲ往來セシガ、清朝ニ至リテ、彼我ノ交通、中絶シテ、修交ノ
 事ナカリシニ、穆宗即位ノ初、日本ハ、已ニ王政ヲ復古シ、維新ノ政ヲ行フ
 ニ至リ、同治八年(明治二年)我ガ政府ハ、柳原前光ヲ遣シ、書ヲ清廷ニ贈リ
 始メテ好ヲ通ゼンコトヲ約ス。其ノ書ニ曰ク、

大日本國、從三位外務卿清原宣嘉、從四位外務大輔藤原宗則等、謹呈
 書大清國總理外國事務衙門大憲台下、方今文明之化大開、交際之道
 日盛、宇宙之間、無有遠邇矣。我邦近歲與泰西諸國互訂盟約、其通有無
 况隣近如貴國、宜最先通情結和親、而惟有商船往來、未嘗修交際之禮
 不亦一大闕典也乎。曩者我邦政治一新之始、即欲遣差公使、修盟約、因
 內地多事、遷延至今、深以爲憾焉。茲經奏准、特遣從四位外務權大丞藤

原前光正七位外務權少丞藤原義質從七位文書權正鄭永寧等于貴國預前商議通信事宜以爲他日我公使與貴國定和親條約之地伏冀貴憲台下款接右官員等取裁其所陳述謹白

ト清廷之ニ報セシヲ以テ后十年ニ至リ我ガ國更ニ大藏卿伊達宗城ヲ以テ欽差全權大使トナシ清國ニ遣シ條約十八ヶ條ヲ訂セシム是レ東洋諸國互ニ條約ヲ結ビシ嚆矢ナリ其ノ文ニ曰ク

大日本國欽差全權大臣從二位大藏卿伊達宗城大清國欽差全權大臣辨理通商事務太子太保協辦大學士兵部尙書直隸總督一等肅毅伯李鴻章各遵所奉諭旨公同會議訂立修好條規以期彼此信守歷久弗渝所有議定各條開列于左

第一條

嗣後大日本國大清國倍敦和誼與天壤無窮即兩國所屬邦土亦各以禮相待不可稍有侵越俾獲永久安全

第二條

兩國既經通好自必互相關切若他國偶有不公及輕藐之事一經知照必須彼此相助或從中善爲調處以敦友誼

第三條

兩國政事禁令各有異同其政事應聽己國自主彼此均不得代謀于預強請開辨其禁令亦應互相爲助各飭商民不准誘惑土人稍有違犯

第四條

兩國均可派秉權大臣並携帶眷屬隨員駐節京師或長行居住或隨時往來經過內地各處所有費用均係自備其租賃地基房屋作爲大臣等公館並行李往來及專差送文等事均須妥爲照料

第五條

兩國官位雖有定品授職各異如彼此職掌相等會晤文移均用平行

之禮職卑者與上官相見則行客禮遇有公務則照會職掌相等之官轉申無須經達如相拜會則各用官位名帖凡兩國派員初到任所須將印文送驗以杜假冒

第六條

嗣後兩國往來公文中國用漢文日本國用日本文須副以譯漢文或只用漢文亦從其便

第七條

兩國既經通好所有沿海各口岸彼此均應指定處所准聽商民往來貿易並別立通商章程以便兩國商民永遠遵守

第八條

兩國指定各口彼此均可設理事官約束己國商民凡交涉財產詞訟案件皆歸審理各按己國律例駁辨兩國商民彼此互相控訴俱用稟呈理事官應先為勸息使不成訟如或不能則照會地方官會同公平

訊斷其竊盜逋欠等案兩國地方官只能查拏追辦不能代償

第九條

兩國指定各口倘未設理事官其貿易人民均歸地方官約束照料如犯罪名准一面查拏一面將案情知照附近各口理事官按律科斷

第十條

兩國官商在指定各口均准雇用本地民人服役工作管理貿易等事其雇主應隨時約束勿任藉端欺人尤不可偏聽私言致令生事如有犯案准由各地方官查拏訊辦雇主不徇庇

第十一條

兩國商民在指定各口彼此往來各宜友愛不得攜帶刀械違者譴罰刀械入官並須各安本分無論居住久暫均聽己國理事官管轄不准改換衣冠入藉考試致滋冒混

第十二條

此國人民因犯此國法禁隱匿彼國公署商船行棧及潛逃彼國各處者一經此國官查明照會彼國官即應設法查拏不得徇縱其拏獲解送時沿途給予衣食不可凌虐

第十三條

兩國人民如有在指定口岸勾結強徒為盜為匪或潛入內地放火殺人搶劫者其在各口由地方官一面自行嚴捕一面將情飛知理事官倘敢用凶器拒捕均准格殺勿論惟須將致殺情跡會同理事官查驗如事發內地不及赴驗者即由地方官將實在情由照會同理事官查照其拏獲到案者在各口由地方官會同理事官審辨在內地即由地方官自行審辨將案情照會理事官查照倘此國人民在彼國聚眾滋擾數在十人以外及誘結通謀彼國人民作害地方情事應聽彼國官徑行查拏其在各口者知照理事官會審其在內地者由地方官審實照會理事官查照均在犯事地方正法

第十四條

兩國兵船往來指定各口係為保護己國商民起見凡沿海未經指定口岸以及內地河湖支港概不准駛入違者截留議罰惟因遭風避險收口者不在此例

第十五條

嗣後兩國倘有與別國用兵情事應防各口岸一經布知便應暫停貿易及船隻出入免致誤有傷損其平時日本人在中國指定口岸及附近洋面中國人在日本指定口岸及附近洋面均不准與不和之國互相爭鬪搶劫

第十六條

兩國理事官均不得兼作貿易亦不准兼攝無約各國理事如辨事不合衆心確有實據彼此均可行文知照秉權大臣查明撤回免因一人債事致傷兩國友誼

第十七條

兩國船隻旗號各有定式倘彼國船隻假冒此國旗號私作不法情事船貨均罰入官如查係官爲發給即行參撤至兩國書籍彼此如願誦習應准互相採買

第十八條

兩國議定條規均係預爲防範俾免偶生嫌隙以盡講信修好之道爲此兩國

欽差全權大臣先行書押蓋印用昭憑信俟兩國

御筆批准互換後即刊刻通行各處使彼此官民咸知遵守永以爲好

是ニ於テ同治十二年我が國ヨリ外務卿副島種臣ヲ遣シ特命全權大使ト爲シ條約ヲ交換シ兼テ台灣ノ事ヲ申理セシム大丞柳原前光之ニ副フ是レヨリ先琉球土民風ニ漂フテ台灣ニ到リ其ノ生蕃ニ虐殺セラレ藩主之ヲ政府ニ訴フ次ギテ備中ノ民復台灣ニ漂着シテ生蕃ニ害セ

ラル此ニ至リ我が使臣大臣毛昶熙董恂等ニ會シテ事ヲ議セシム毛昶熙等答フルニ台灣ハ清ノ化外ニシテ其ノ版圖ニ非ルヲ以テシ我が言ヲ容レズヨリテ我が朝議征台ノ議決シ陸軍中將西鄉從道ヲ以テ台灣事務總督ト爲シ陸軍少將谷干城海軍少將赤松則良ヲ參軍トナシ兵ヲ率キテ進討セシム殊ニ參議兼大藏卿大隈重信ニ命ジテ之ヲ總理セシム從道重信ノ二人長崎ニ到ル會米國公使局外中立ノ說ヲナシ米船ヲ用ヒ米人李仙得ヲ備使スルヲ拒ミ英國公使亦此ノ說ニ贊ス朝廷止ムヲ得ス進軍ヲ止メ重信ヲ召シ還シ大久保利通ヲシテ長崎ニ至リ之ヲ處分セシム總督等肯セシテ曰ク我レ自蕃虜ノ巢窟ヲ擣キ死シテ后已マン清國モシ異議ヲ發セバ政府宜シク西郷以下ノ徒ハ脱艦ノ賊徒ナリト答フ可シト利通乃二人ト議シ米人米船ヲ用フルコトヲ止メ別ニ船艦ヲ購ヒ征役ノ用ニ供セシム軍艦尋イデ台灣ニ至ル諸酋長風ヲ望ミテ或ハ降リ或ハ款ヲ納ル獨牡丹社ノ酋長凶頑ニシテ服セズ日兵

進ンテ石門ヲ破リ、其ノ酋長ヲ斬ル。是ニ於テ、諸蕃相繼ギテ降り、台灣盡平ク。時ニ、柳原前光駐節全權公使トナリ、北京ニ在リ。日ニ、台灣ノ事ヲ議シテ、牴牾決セズ。狀ヲ我が國ニ報ズ。ヨリテ參議大久保利通ヲ、辦理大臣トナシ、清國ニ赴カシメ、和戰ノ權、一ニ之ニ委テ、八月ヲ以テ、東京ヲ發シ、九月清國ニ至リ、直ニ恭親王、及ビ文祥等ニ、總理衙門ニ會シ、爾后、屢事ヲ議スルモ、恭親王等、生蕃ヲ以テ、其ノ版圖トナシ、日本ノ征台ヲ以テ、疆土ヲ侵ストナシ、其ノ外交上ノ慣手段ヲ用ヒ、數日、猶其ノ要領ヲ得ズ。參議思ヘラク、是レ、口舌ノ能ク決スル所ニ非ズト。彼レニ告ゲテ曰ク、事理明白此ノ如シ、而シテ、翻然改圖セズ。是レ貴國、自和好ヲ棄ツルナリト。遂ニ去ラント欲ス。清廷ノ諸臣、皆歸期ヲ延バサントコトヲ乞ヒ、遂ニ討蕃ヲ認メテ、義舉トナシ、銀兩ヲ償辨スルコトヲ許ス。然レドモ、其ノ體面ヲ損スルヲ慮リ、名ヲ恩恤ニ假リ、文據ヲ立ツルヲ欲セズ。是ニ於テ參議決然、結束シ、將ニ駐清公使ト俱ニ發セントス。英國公使、ウエード、之ヲ聞キ、深ク、

兩國ノ不和ヲ憂ヘ、間ニ居テ、調停シ、其ノ夜、清廷ノ議ヲ傳ヘテ曰ク、償銀五十萬之ヲ出シ、文據日本ノ欲スル所ニ從ハント。參議ヨリテ、條款三章ヲ草シテ、之ヲ交換シ、遂ニ我が師ヲ、台灣ヨリ班スコトヲ約シ、和議全ク成レリ。參議北京ヲ發シ、歸途、天津ニ到リ、直隸總督李鴻章ニ會シ、共ニ欸曲ヲ通ジ、上海ヲ經テ、台灣ニ到リ、總督ト、撤兵ヲ議シ、此ノ年十一月、東京ニ還ル。已ニシテ、清廷李鴻章ノ建議ニヨリ、公使ヲ、我が大日本、及ビ西洋各國ニ遣セリ。

同治十三年帝崩シ、子ナカリシヲ以テ、醇親王ノ子載湉入リテ、位ニ即ク。是レ、即、今上光緒帝ナリ。

光緒五年、我が政府琉球藩ヲ廢シテ、沖繩縣トナシ、其ノ藩王ヲ東京ニ召ス。琉球ハ、モト、大日本ト使節ヲ通ゼシガ、又、支那ノ正朔ヲ奉ジ、貢物ヲ進メ來リシヲ以テ、支那政府、大ニ之ニ不滿ヲ抱キ、再、琉球藩王ヲ立テ、以テ、兩國ノ附庸トナサントス。事、皆、姑息ニ出ヅ。始メ、琉球ハ、其ノ所屬判然セ

ザリシガ北京條約以來、各國皆我が國ニ屬スルヲ公認スルニ至リシヲ以テ、我が政府之ヲ肯ゼズ。時ニ合衆國ノ大統領額蘭德氏、支那ニ遊ビ、日本ニ來リ、兩國ノ爲ニ謀リテ曰ク、日本ハ、宮古諸島ヲ割キ、以テ、清國ニ附シ、清國ハ、琉球諸島ハ、日本ノ經營ニ任セ、其ノ王ハ、日本ニ臣附シ、清國ハ、敢テ管セザレト。是ニ於テ、光緒六年(明治十一年)、我が太政官大書記官井上毅ヲシテ、清國トノ紛紜ヲ解カシム。清額蘭德氏ノ説ヲ聞キ、其ノ約ヲ訂サントシ、略成ルヲ以テ、毅歸リテ、之ヲ我が政府ニ報ズ。政府亦、之ヲ可トシ、再、毅ヲシテ、清國ニ到リ、其約ヲ結バシム。是レヨリ先、伊犁地方ノ人民亂ヲ起シ、西域ヲ騷擾セシカバ、魯國政府商民ヲ保護スルヲ名トシ、遂ニ伊犁ヲ占領セリ。然ルニ、左宗棠兵ヲ率キテ、不逞ノ徒ヲ征シ、之ヲ平定セシヲ以テ、清更ニ、崇厚ヲ全權大使トナシ、伊犁ノ地ヲ返還センコトヲ求メ、遂ニ條約ヲ訂シテ歸ル。已ニシテ、此ノ條約ニツキ、物議大ニ起リ、崇厚ヲ以テ、權限以外ノ條約ヲ結ビタルモノトナシ、獄ニ下シテ、其ノ條約ヲ廢

棄セシヲ以テ、兩國復、兵ヲ境上ニ出シテ、將ニ事アラントセリ。然ルニ、清更ニ、曾紀澤ヲ以テ、全權大使ニ任シ、聖伯得堡ニ到リ、再度ノ談判ヲ開キ、露國ハ、伊犁ヲ支那ニ返シ、支那ハ、價金九百萬圓ヲ出スコトヲ約シテ、局ヲ結ビ、兩國ノ兵、遂ニ境上ヲ退ケリ。斯ク、清國ハ、北顧ノ患ナキヲ以テ、朝議、頓ニ變ジ、敢テ、日本トノ前約ヲ踏マズ。毅乃、其ノ約ニ違フヲ以テ、遂ニ清國ヲ辭シテ歸ル。清廷常ニ、誦詐ヲ以テ、外交ノ秘訣トセリ。然レドモ、又、常ニ、其ノ志ヲ遂ケタル事ナシ。海外諸國トノ衝突、豈免ルヲ得ンヤ。

第十章 清佛戰爭

是レヨリ先、乾隆ノ末年、佛蘭西ノ人アドラン僧正ト、イフモノ、宣教師トナリテ、安南ニ來リ、國王ニ謁シ、其知遇ヲ受ケ、遂ニ、王ニ勸メテ、四境ヲ鎮壓セシメシヨリ、安南佛國トノ關係ヲ生セリ。其后、咸豐九年(日本安政二年)

至リ、安南ト佛國及ビ西班牙トノ間ニ葛藤起リ、和議遂ニ協ハズ。此ニ於テ、佛西ノ兩軍連合シテ安南ヲ攻メ、西貢ヲ陷レシガ、同治元年、遂ニ和議ヲ結ビ、安南國王ハ、西貢地方ヲ佛國ニ讓與スベシトノ條約ヲナセリ。是ヨリ、佛人東洋ニ地ヲ有スルニ至リシヲ以テ、増安南ニ志ヲ逞セントノ謀ヲナシ、同治十三年、更ニ佛安條約二十二款ヲ締結シ、安南國王ハ自主ノ權アルヲ認メ、安南ニ事アル時ハ、佛國ノ之ヲ幫助スルコトヲ約シ、又佛人ハ、海口ヨリ東京ヲ經テ、直チニ雲南ニ抵ルコト等ヲ約シタリ。帝ノ時ニ至リ、佛國ハ、グレウキール大統領トナリ、フエリシ内閣議長タリ。機ニ乗ジテ、カヲ東洋ニ伸サントセリ。適安南國王、佛安條約ニ背キ、之ヲ履行セザリシカバ、佛國ハ、之ヲ責メントシ、直チニ、リウキールヲ司令官トナシ、遠征軍ヲ送リテ、安南ヲ征セシム。時ニ光緒八年ナリ。已ニシテ、リウキール兵ヲ率キテ、安南ニ着シ、直チニ、河南ニ入り、安南ノ兵ヲ破リ、遂ニ、其ノ地ヲ占領セリ。時ニ、清人劉永福トイフモノアリ。モト、長髮賊ノ餘黨ニ

シテ、亂平クニ及ビ、其ノ徒黨數十人ヲ率キテ、安南ニ入り、遂ニ、國王ノ招撫ニ歸シ、天府鎮ノ山中ニ入り、土地ヲ開墾シ、耕耘ニ從事シ、三年ノ后、其ノ地租ヲ國王ニ納ル。永福、モト、武畧アリ、能ク四方ノ壯士ヲ招撫シ、兵ヲ練リシヲ以テ、皆強悍驍勇ニシテ、其ノ地、遂ニ一巨鎮トナル。其ノ兵ヲ稱シテ、黑旗兵トイフ。此ノ時ニアタリ、劉永福、佛國ノ慾ヲ逞クシ、蠶食ヲ擅ニスルヲ憤リ、兵ヲ出シテ、國王ヲ助ケ、屢佛軍ヲ破リ、河内城ヲ陷レ、遂ニリウキールヲ殺ス。安南國王、此ニ於テ、清國ニ依リテ、佛國ヲ敵トスルノ意ヲ決セリ。清國ノ兵士、亦陰ニ來リテ、黑旗兵ニ投ジ、佛軍ト戰フモノアリ。未、幾ナラズシテ、佛將クールベール、援兵ヲ率キテ、山西ヲ攻撃シ、連戰三日ノ后、遂ニ、其ノ城ヲ拔ケリ。蓋シ、山西ハ、東京ノ城堡中、最モ、堅牢ニシテ、清兵、及ビ、黑旗兵ノ根據タリ。城陷ルニ及ビ、黑旗兵、清兵、及ビ、安南兵ハ、走リテ、北寧城ニ入り、壘ヲ高クシ、溝ヲ深クシ、精銳ヲ集メテ、固守セリ。佛軍、時ニ桑臺ニアリ。光緒九年三月、佛國ノ援兵來リ、其ノ將ブリール、之ヲ統

ベ、全軍ヲ分チテ三隊トナシ、一隊ハ將軍ロミー之ヲ率キテ河内ヨリ進
 ミ他ノ一隊ハ將軍ネグロール之ヲ率キテ海東ヨリ進ミ、敵兵ヲ破リテ、
 北寧城ヲ陷レ、勢ニ乗ジテ、一軍ハ山西ヲ根據トシテ、興屯鎮ヲ占領シ、一
 軍ハ北寧大原ヲ根據トシテ、諒山鎮ヲ破ル。此ニ於テ、東京地方皆佛軍ノ
 占領ニ歸シ、更ニ進ンデ順化府ヲ攻メテ、其ノ砲臺ヲ畧取セシヲ以テ、安
 南到底佛軍ニ抗スベカラザルヲ知リ、遂ニ和議ヲ約シ、佛國ハ安南ヲ保
 護國トナシ、以テ其ノ局ヲ結ベリ。然ルニ清國ハ、佛國ノ遠征ヲ以テ、不當
 トナシ、李鴻章ハ佛國公使ブーレート天津ニ會シテ、談判ヲ開キシガ、其
 ノ要領ヲ得ズ、ブーレート遂ニ佛國ニ還リトリ、公使之ニ代リ、天津ニ至
 リ、李氏ト會シテ事ヲ議セシモ、議遂ニ協ハズ。清國更ニ公使曾紀澤ヲシ
 テ、佛相フエリトバリニ會シテ、談判ヲ開カシム。曾紀澤曰ク、佛國ニシ
 テ安南ヲ侵凌セバ、清國ハ唯戰アルノミト。而シテ清廷ハ、日夜兵備ヲ嚴
 ニシ、黑旗兵ノ首領劉永福ヲシテ、佛軍ニ當ラシメ、其ノ他、彭玉麟、張樹聲

ノ諸將ヲシテ、兵ヲ率キテ南下シ、以テ萬一ニ備ヘシム。此時ニアタリ、清
 廷ノ議論ニ派ニ分レ、互ヒニ黨派ヲ結ビ、一方ニハ恭親王ヲ奉ジテ、媾和
 ヲ主トシ、一方ニハ醇親王ヲ奉ジテ、主戰ヲ論セリ。然レドモ、恭親王以下
 四人、職ヲ退クニ及ビ、李鴻章ハ佛國艦隊長フールニト天津ニ會シテ、
 平和ノ條約ヲ結ビ、各其ノ兵ヲ撤センコトヲ約セリ。時ニ佛軍、命ヲ奉ジ
 テ諒山鎮ニ至ラントスルニ當リ、清軍ノ諒山ニ屯在セシモノ、突然佛軍
 ヲ襲撃セリ。佛國政府、此報ヲ得テ、痛ク清國ノ不信ヲ怒リ、償金二千萬磅
 ヲ清國ニ要求シ、之ヲ聽カズンバ、直ニ開戰ニ決シ、公使ヲ北上セシメ、更
 ニ軍艦ヲ召集セリ。然ルニ清廷、佛國ノ要求ニ應ゼス、更ニ會國荃ヲ全權
 大使ニ任シ、佛國公使バテノートルト談判セシメ、又在歐清國公使曾紀
 澤ニ命ジテ、佛相フエリトニ會シテ事ヲ議セシム。然レドモ、其ノ談判共
 ニ平和ノ局ヲ結ハズ、直ニ破裂シテ兩國兵ヲ構フニ主レリ。
 此ニ於テ、佛國政府ハ、在清ノ諸將ニ命ジテ、雞籠港ヲ占領シ、福州ヲ略取

セシム。光緒十年八月、佛國東洋艦隊ノ提督レスベール軍艦ヲ率キテ、雞籠港ニ至リ、使ヲ其ノ守令ニ贈リテ、二十時間ニ、此ノ地ヲ讓與ス可キ旨ヲ言ハシム。守令之ニ應ゼズレスベール、乃其ノ砲台ヲ攻撃シ、遂ニ之ヲ占領セリ。時ニ督辦台防事宜劉銘傳之ヲ聞キテ大ニ怒リ、兵ヲ率キテ佛軍ノ後背ヨリ進撃シ、銃丸兩飛ヲ願ミズ、士卒憤激シテ佛軍ニ逼ル。佛軍、遂ニ雞籠港ヲ棄テ、軍艦ニ投ジテ去ル。爾后佛艦常ニ其ノ近海ニ出沒セシモ、敢テ上陸セズ。同港ハ、遂ニ佛軍ノ侵畧ヲ免レタリ。此ノ時、グールベール提督ハ、福州ヲ攻撃セント欲シテ、其ノ對面ニ碇泊セリ。レスベール亦、軍艦二隻ヲ率キテ之ニ會シ、佛艦總テ十四隻アリ。而シテ清國ノ軍艦福州ニ在ルモノ九隻ニ過ギス。此ノ月廿三日、グールベール軍艦及ビ水雷艇ヲ排列シ、清艦ト戰ヲ交ヘント欲シ、佛艦ウルタ號先砲撃ヲ始メ、清艦揚武號ヲ擊沈シ、佛軍機ニ乗ジテ、盡砲門ヲ開キ、激戰數刻ニシテ、遂ニ七隻ノ清艦ヲ破碎シ、更ニ進ンテ、福建船政局ヲ破レリ。其ノ后、羅星塔、閩安、金

皮等ノ諸砲臺皆佛軍ニ破壊セラル。然ルニ佛國政府ノ議論、俄カニ一變シ、提督亦其ノ志ヲ得ス。空シク支那海ニ浮ビ、遂ニ福州海ノ澎湖島ヲ占領シ、以テ本國政府ノ命令ヲ待テリ。此ノ時ニアタリ、佛ノ陸軍ハ廣西ニアリ。將軍チグール及、ミロー等コレヲ指揮シ、連戰勝ヲ制シ、進ンテ鎮南關ニ入ル。廣西ノ將楊玉科戰死シ、董履商重傷ヲ負ヒ、諸軍盡潰。佛軍遂ニ諒山ニ據ル。地方ノ人民、敗報ヲ得テ、皆荷擔奔竄シ、敗兵亦抄略ヲ肆ニシテ、皆東奔セシカバ、廣西城遂ニ空虚トナリ、能ク佛軍ニ當ルモノナシ。是ヨリ先、前ノ廣西ノ提督馮子材、及ビ廣西右江鎮ノ總兵王孝禎、兵ヲ募リテ龍州ニ在リ。光緒十一年一月一日、子材清軍ノ敗ヲ聞キ、一營ヲ留メテ根據ヲ守ラシメ、別ニ一營ヲ率キテ、躬カラ南關ニ至リ、孝禎ト共ニ潰兵ヲ收メ、使ヲ巡撫潘鼎新遣ハシ、八營ノ兵ヲ以テ、同關ニ會センコトヲ請フ。聽カレズ。子材、乃手兵ヲ率キテ、關外ニ出デ、佛軍ニ當リシガ、九月巡撫ノ命ニ接シ、兵ヲ返シテ南關ニ至

ル子材地勢ヲ察シ、要害ニ據リ、三里ノ長墻ヲ築キ、自所部ノ兵ヲ以テ之ヲ守リ、別ニ廣西ノ兵ヲ徵シテ之ヲ練ル。時ニ佛軍北海ヲ封シ、廣西ノ歸路ヲ絶タントストノ報アリ。加之、廉州將師ナキヲ以テ、馮子材ノ廉州ニ歸ランコトヲ乞フ。子材慨然トシテ曰ク、我兵一營ナリト雖、輕シク他ニ移スベカラズト。子材乃、兵ヲ進メテ佛軍ヲ破リシガ、二月ニ至リ、佛軍又來リ攻ムルニ會シ、子材ノ兵、擊テ之ヲ奔ラス。是ニ於テ、佛軍大ニ怒リ、諒山屯在ノ兵ヲ悉クシ、疾ク馳セテ、關ニ入ル。子材揚言シテ曰ク、佛軍再ビ關ニ入ラバ、余輩何ノ面目アリテ粵民ニ見ンヤト。孝禎亦、准軍ヲ率井テ來リ援ヒ、佛軍ト戰ヒ、子材諸軍ヲ督シテ、防戰最モ、勦メシカバ、佛軍遂ニ支ヘズシテ退ク。清軍乃、路ヲ分チテ諒山ニ向ヒ、屢佛軍ト戰ヒ、遂ニ大舉シテ諒山ヲ復ス。此ニ至リ、清軍漸勢ヲ得、安南ノ人民亦、將ニ響應セントス。子材更ニ、全軍ヲ率キテ、北寧ニ向ハントス。時ニ、清廷休戰ヲ布告シ、子材ニ命ジス。兵ヲ解カシム。子材時ニ、年七十、性剛毅ニシテ能ク士ヲ愛ス。

軍ニ臨ムヤ、短衣寸鞋常ニ、士卒ニ先ツ。故ニ士卒亦、之レガ用ヲ爲スヲ樂メリトイフ。是ヨリ先佛將クールベ一北海碇舶中、其ノ策ノ行ハレザルヲ以テ憤死シ、佛國ニテハフエリ一人民ノ輿望ニ背キ、其ノ内閣ハ俄然反對黨ニ倒サレシヲ以テ、征清ノ議、遂ニ一變シ兩國ノ使臣、天津ニ會シ、昨年提督フルニート、及ビ李鴻章ノ間ニ結ビタル豫約ノ意ニ則リ、更ニ條約十ヶ條ヲ訂結シ、兩國始メテ兵ヲ解クニ至レリ。

第十一章 天津條約

是ヨリ先、我が大日本、朝鮮國ト盟約ヲ結ビ、其ノ公使館ヲ、同國京城ニ置キ、辨理公使花房義質ヲシテ、駐在セシム。時ニ、韓廷ノ外戚、閔氏政ヲ擅ニシ、專横至ラザルナシ。國王ノ生父大院君、之ヲ憤リ、密ニ乘ス可キ時變ヲ待チシニ、閔鎌鎬トイフモノ、兵曹判書タリ、公財ヲ私セシヲ以テ、兵士、大

ニ怒リ、直ニ鎌鎬ノ家ヲ圍ミテ、之ヲ破碎シ、更ニ、大院君ノ門ニ到リテ、情ヲ訴ヘ、諸閔ヲ誅スル令ヲ得ンコトヲ乞フ。是ニ於テ、大院君、蹶起シテ、陰ニ兵ヲ指揮シ、諸閔ヲ誅スルト共ニ、日本ノ公使館ヲ襲撃シテ、其ノ鎮國ヲ行ハントセリ。時ニ、光緒八年(明治十五年七月)ナリ。公使花房義質、書記官近藤真鋤等、力支ヘズシテ、遂ニ仁川ニ至リ、濟物浦ヨリ、英船ニ投シテ、長崎ニ達シ、變ヲ東京ニ報ズ。我が政府、直ニ海陸ノ兵ヲ整ヘ、井上外務卿自馬關ニ出張シ、以テ訓令ヲ傳フ。是ニ於テ、花房公使、海陸軍ト共ニ、復朝鮮ニ到リ、軍艦ヲ仁川ニ止メ、自進ンデ京城ニ入り、談判ヲ韓廷ニ望ム。韓廷言ヲ左右ニ托シテ、更ニ要領ヲ得ズ。是ヲ以テ、公使憤然京城ヲ去リ、已ニ濟物浦ニ達スルニ及ブ頃、韓全權大臣ヲシテ、之ヲ追ハシメ、談判兩日、遂ニ朝鮮政府ハ、其ノ兇徒ヲ誅シ、又年五萬圓ヲ出シテ、日本人ノ死傷ニ酬ヒ、更ニ金五十萬圓ヲ出シテ、日本ノ損害ヲ償ヒ、自今、日本ノ兵ヲ朝鮮ニ駐在セシムルコトヲ約シ、以テ、其ノ局ヲ結ベリ。清廷、之ヲ聞キ、遂ニ軍艦數隻ヲ派シ、觀察馬建忠ヲシテ、之ヲ率キシメ、花房公使ノ京城ヲ退クヤ、馬建忠、直ニ京城ニ入り、大院君ヲ、其ノ軍艦ニ誘致シ、之ヲ北京ニ護送シ、清帝、詔シテ保定府ニ安置ス。是レヨリ、清國、大ニ朝鮮ノ内治ニ干涉シ、我が國、亦公使館護衛ノ爲、京城ニ兵士ヲ置キシヲ以テ、兩國ノ衝突、將ニ起ラントセリ。此ノ年、我が辦理公使竹添進一郎ヲ以テ、韓京ニ駐在セシメ、務メテ交誼ヲ厚クシ、其ノ感情ヲ害セザランコトヲ欲シ、公使護衛ノ兵員ヲ減ジ、僅ニ一中隊ヲ停メ、又、償金五十萬圓ノ中、四十萬圓ヲ還附シテ、以テ、其ノ國費ニ充テシム。然ルニ、光緒十年(明治十七年)朝鮮郵政局ノ開業式ニ乘ジ、朴泳孝、金玉均、突然立チテ、列席ノ閔族ヲ殺シ、王宮ニ侵入シ、國政ヲ改革セントセリ。國王、自安ゼズ、使ヲ日本公使館ニ遣シ、兵ヲ以テ、王宮ヲ護ランコトヲ乞フ。ヨリテ、竹添進一郎、兵ヲ率キテ、王宮ニ入ル。時ニ、清兵韓兵ト共謀シ、不意ニ四方ヨリ起リテ、之レヲ圍ミ、日本兵ニ發砲ス。其ノ間ニ國王ハ逃レテ、清陣ニ投ズ。是レヲ以テ、日本兵留リ戰フ能

艦數隻ヲ派シ、觀察馬建忠ヲシテ、之ヲ率キシメ、花房公使ノ京城ヲ退クヤ、馬建忠、直ニ京城ニ入り、大院君ヲ、其ノ軍艦ニ誘致シ、之ヲ北京ニ護送シ、清帝、詔シテ保定府ニ安置ス。是レヨリ、清國、大ニ朝鮮ノ内治ニ干涉シ、我が國、亦公使館護衛ノ爲、京城ニ兵士ヲ置キシヲ以テ、兩國ノ衝突、將ニ起ラントセリ。此ノ年、我が辦理公使竹添進一郎ヲ以テ、韓京ニ駐在セシメ、務メテ交誼ヲ厚クシ、其ノ感情ヲ害セザランコトヲ欲シ、公使護衛ノ兵員ヲ減ジ、僅ニ一中隊ヲ停メ、又、償金五十萬圓ノ中、四十萬圓ヲ還附シテ、以テ、其ノ國費ニ充テシム。然ルニ、光緒十年(明治十七年)朝鮮郵政局ノ開業式ニ乘ジ、朴泳孝、金玉均、突然立チテ、列席ノ閔族ヲ殺シ、王宮ニ侵入シ、國政ヲ改革セントセリ。國王、自安ゼズ、使ヲ日本公使館ニ遣シ、兵ヲ以テ、王宮ヲ護ランコトヲ乞フ。ヨリテ、竹添進一郎、兵ヲ率キテ、王宮ニ入ル。時ニ、清兵韓兵ト共謀シ、不意ニ四方ヨリ起リテ、之レヲ圍ミ、日本兵ニ發砲ス。其ノ間ニ國王ハ逃レテ、清陣ニ投ズ。是レヲ以テ、日本兵留リ戰フ能

ハズ。公使全軍ヲ以テ、使署ニ歸ル。歸途、清韓ノ兵、日本兵ヲ途ニ要シ、加之、亂民四方ニ蜂起シ、日本人ノ京城ニ在留スルモノヲ傷ケ、其ノ家屋ヲ破リ、貨財ヲ掠奪シ、遂ニ來リテ、日本公使館ヲ圍ム。我が兵、糧乏シク、久シク防戦スル能ハズ。遂ニ、盡仁川ニ返ル。盧ニ乘ジテ、清韓ノ兵士、日本公使館ヲ燒ク。時ニ、陸軍大尉磯林眞三、京城以外ニ在リ。變ヲ聞キ、京城ニ返ラントシテ、亂民ニ殺サレ、其ノ地ニ戰死スルモノ、亦、甚多シ。我が政府、此ノ報ヲ得テ、井上外務卿ヲ、全權大使トナシ、高島樺山ノ諸將ト共ニ、薩摩丸ニ搭シ、護衛ノ海陸軍ヲ率キテ、仁川ニ到ラシム。而シテ、此ノ變報ノ、清國ニ達スルヤ、其ノ關係至大ナルヲ以テ、直ニ、欽差吳大澂ヲシテ、陸海軍ヲ率キ、馳セテ、朝鮮ニ到ラシム。翌年一月、井上大使、直ニ京城ニ入り、國王ニ謁シ、其ノ翌日談判ヲ始メ、朝鮮國王ノ書ヲ奉ジテ、大日本皇帝ニ謝スルコト、及ビ、負傷者ノ恤給、貨物損害ノ償トシテ、金十萬圓ヲ出スコト等ヲ約シ、遂ニ、平和ノ局ヲ結ビ、將ニ日本ニ歸ラントス。然ルニ、清國ノ欽差吳大

澂、此ノ事ヲ聞ヤ、井上大使ニ先チ、俄然、朝鮮ヲ去レリ。

日韓ノ談判ハ、已ニ、其ノ局ヲ結ビタリト雖、日清ノ交渉ハ、到底免ル可カラズ。思フニ、我が日本公使ニ對シ、日本國民ニ對シ、亂民ノ暴行ハ、モト、朝鮮ノ事變ニ基クト雖、多クハ、清兵ノ教唆ニ出ヅ。故ニ、我が國、清國ニ向ツテ、要求スル所、決シテ、朝鮮ニ讓ル可カラス。況ンヤ、清國ノ朝鮮ニ對スル、常ニ、屬邦視シ、且、其ノ内政ニ干涉スルニ於テ、オヤ、ヨリテ、我が朝廷ハ、宮内卿伊藤博文ヲ以テ、特派全權大使トナシ、清國ニ遣セリ。博文、乃、西郷參議及ビ仁禮、野津ノ兩將ト共ニ、薩摩丸ニ搭シテ、橫濱ヲ解纜シ、此ノ年三月、天津ニ着セリ。清、李鴻章ニ全權ヲ委任シ、吳大澂ヲ其ノ副トナシ、以テ、日本ノ大使ヲ、天津ニ要シ、其ノ談判ヲ開カンコトヲ望ム。博文、之ニ應ゼ、ス。榎本公使ト共ニ、北京ニ到リ、總理衙門ノ諸大臣ニ會シテ、來意ヲ述べ、更ニ、李鴻章全權ノ事ヲ確メ、四月、復、天津ニ返リ、始メテ、李總督ト談判ノ端ヲ開キ、論辯互ニ相下ラズ。終ニ、日本ノ請求ヲ容レ、談判、全ク、終ヲ告グ、

此月十九日、博文天津ヲ發シ、歸路ニ就ケリ。蓋其ノ條約ハ、日清兩國ハ、條約調印濟ノ日ヨリ、四ヶ月ノ間ニ、各朝鮮ノ駐兵ヲ引揚ゲ、朝鮮ヲシテ、他國ノ武辨ヲ、選備シテ、其ノ兵ヲ教練セシメ、日清兩國、共ニ、將來、朝鮮ニ出兵スル要アルトキハ、互ニ、前以テ通知シ、其ノ事定マレバ、直チニ引揚ク可キ事ナリ。李總督ハ、伊藤大使ニ照會シテ、即今、朝鮮駐在ノ清兵ヲ戒飭シ、又、清兵ニシテ、暴行ノ確證アルモノハ、軍法ニ照シテ、之ヲ嚴刑ニ處スベキ事ヲ約シタリ。世之ヲ天津條約ト云フ。然ルニ、昨年(明治二十七年)朝鮮東學黨ノ亂アルニアタリ、朝鮮ノ支那ニ援兵ヲ乞ヒシヲ名トシ、此ノ條約ニ背キ、日本政府ニ知照セズシテ、兵ヲ朝鮮ニ出シ、カバ我ガ大本、天皇陛下、大ニ此ノ舉ヲ怒リ給ヒ、天津條約ヲ破棄シ更ニ、宣戰ノ大詔ヲ下シ給ヒ、兵ヲ出シテ、清廷ヲ膺懲セシム。是レ征清ノ起原ナリ。而シテ、其ノ結果ノ如何ハ、瞭トシテ、火ヲ賭ルヨリモ、明ナリ。著者、筆硯ヲ費スヲ惜ム。

第十二章 國政

一、政府組織

清廷ノ政府ハ、大別シテ、一内閣三部政府トナス。三部トハ、支那本部、滿州部、及ビ内外蒙古、西藏部ヲイフ。而シテ、三部各、特殊ノ政体ヲ立ツ。支那本部ニハ、内閣ヲ首トシテ、八部、及ビ各省地方官アリ。即、左ニ述ブルモノ、是レナリ。

内閣。清廷最要ノ官衙ニシテ、一國ノ頭腦ナリ。長官ハ、滿人、漢人、各二人アリ。長官ヲ大學士トイヒ、清帝ノ特選ニ係ル。各部ノ提出書ハ、一切、此ノ閣ヲ經テ、皇帝ノ親裁ヲ仰ギ、又、閣ヲ經テ、各部ニ下ス。其ノ職員ハ、

大學士 協辦大學士 內閣學士

侍讀學士 侍讀 典籍

中書

中書科中書舍人

掌書誥勅

貼寫

筆帖式

然ルニ雍正七年ノ頃、西北兩路干戈ヲ動シ、ヲ以テ、別ニ軍機處ヲ設ケ、機務ヲ鄭重秘密ニ審議セシヨリ、内閣翼賛ノ任、自然、此處ニ移リ、今ハ、其ノ常例ノ勅令ハ、内閣ヨリ頒ツト雖、其ノ實權ハ、軍機處ニ在リトイフモ、不可ナシ。乾隆元年ニハ、總理處ト改メシガ、後、復、前ノ名稱トセリ。而シテ、軍機大臣ニハ、定員ナク、各部ノ尙書侍郎ヨリ、才學秀絶ノ者ヲ擇ミテ、コレニ充ツ。其ノ下ニ、軍機大臣行走、章京、筆帖式等アリ。

吏部。我ガ内務省ノ職掌ニ等シク、中外文官ノ任免黜陟ヲ司ル。吏部尙書ハ、宛モ、我ガ内務大臣トイハンガ如シ。所屬四司アリ。一ニ曰ク、文選清吏司、二ニ曰ク、考功清吏司、三ニ曰ク、稽勳清吏司、四ニ曰ク、驗封清吏司、各司ニ郎中アリ、司務ヲ統理ス。吏部ノ職員ハ、戸部以下ハ大同小異ナルヲ以テ之ヲ略ス

尙書漢一

左侍郎

右侍郎

文選司郎中

考功司郎中

稽勳司郎中

驗封司郎中

員外郎

堂主事

主事

司務

筆帖式

戸部。我ガ大藏省ニ等シク、土地、戸口、財政一切ヲ掌ル。尙書コレガ長官タリ。所屬十四司アリ。一ニ曰ク、山東清吏司、二ニ曰ク、山西清吏司、三ニ曰ク、河南清吏司、四ニ曰ク、江南清吏司、五ニ曰ク、江西清吏司、六ニ曰ク、福建清吏司、七ニ曰ク、浙江清吏司、八ニ曰ク、湖廣清吏司、九ニ曰ク、陝西清吏司、十ニ曰ク、四川清吏司、十一ニ曰ク、廣東清吏司、十二ニ曰ク、廣西清吏司、十三ニ曰ク、雲南清吏司、十四ニ曰ク、貴州清吏司。各司ノ職掌ハ、各省ノ布政使ヨリ送レル賦稅收支、奏冊ヲ調査シ、兼ネテ、各稅關ノ徵收ヲ考稽スルヲ掌ル。

別ニ、寶泉局アリ。鑄錢ノ事務ヲ掌ル。戸部三庫ハ、戸部尙書ニ隸屬セズ。別ニ、管理大臣アリ。銀、緞匹、顏料ノ三庫ニシテ、政府ノ國庫トス。又、戸部倉場

アリ。戸部右侍郎、滿漢各一人ヲ以テ、ソノ總督トス。北京へ漕運スル、糧穀事務ヲ司ル。

禮部。大略、我が文部省ニ似タリ。吉禮、嘉禮、軍禮、賓禮、凶禮、五禮秩序、學校、貢舉等ヲ掌ル。所屬四司アリ。一ニ曰ク、儀制清吏司。二ニ曰ク、祠祭清吏司。三ニ曰ク、主客清吏司。四ニ曰ク、精膳清吏司。外ニ、鑄印局、會同四譯館、馬館、樂部ノ四ツ、皆禮部ニ屬ス。

兵部。我が陸軍省ニ等シ。所屬ハ、武選清吏司、車駕清吏司、職方清吏司、武庫清吏司ノ四ナリ。武選司ハ、武職、車駕司ハ、驛傳、及ビ馬政、職方司ハ、輿圖、武庫司ハ、兵籍、戎器、及ビ鄉會武科ヲ掌ル。外ニ、館所監督アリ。

刑部。我が司法省ニ當ル。所屬十八司アリ。直隸、奉天、江蘇、安徽、江西、福建、浙江、湖廣、河南、山東、山西、陝西、四川、廣東、廣西、雲南、貴州清吏司、及ビ督捕清吏司、是レナリ。各省司ハ、其ノ省ノ刑名案ヲ調査スル職ニシテ、督捕司ハ、中外八旗人逃亡、逮捕ヲ職掌トス。提牢、賊罰庫、律例館等モ、亦此ノ刑部

ニ屬ス。其ノ各職掌ハ、文字ノ如シ。

工部。我が舊工部省ニ當ル。所屬四ツ。一ニ曰ク、營膳清吏司。二ニ曰ク、虞衡清吏司。三ニ曰ク、都水清吏司。四ニ曰ク、屯田清吏司。而シテ、營膳司ノ下ニ、琉璃窑、木倉、及ビ皇木廠アリ。虞衡司ノ下ニ、資源局アリ。都水司ノ下ニ、街道廳アリ。屯田司ノ下ニ、柴薪監督、煤炭監督アリ。又、節慎庫ト、製造庫トアリ。

海軍部。我が海軍省ノ事務ニ似タリ。此ノ部ハ、清廷ノ光緒十年創設セル所ナリ。故ニ事務章程、確定セズ。始メハ、醇親王、コレガ總理トナリ、李鴻章、曾紀澤、コレニ副タリ。

總理衙門。各國交際ニ關スル事務ヲ統理スル所ニシテ、咸豐十一年十二月ノ創設ニ係ル。專任尙書ナク、各部尙書侍郎ノ才望アル者ヲ拔擢シテ、兼務セシム。

都密院。我が舊時ノ彈正臺、現今ノ會計検査院、及ビ大審院ニ當リ、官

常ヲ察覈シ、庶政ヲ稽考シ、綱紀ヲ整飾スルヲ掌ル。院屬ハ、則給事中、及ヒ
 監察御史ナリ。
 通政使司、天下ノ章奏ヲ傳達スルヲ掌ル、但封事ヲ上ル者、京内ハ内
 閣ニ京外ハ、此ノ司ニ郵送ス。而シテ、其ノ郵送ノ封事ヲ、此ノ司ヨリ、内閣
 へ移送スルモノトス。
 大理寺、我ガ大審院ニ當リ、重辟ヲ平反スル事務ヲ司ル。
 宗人府、皇族ノ屬籍ヲ掌リ、并ニ其ノ教令等ヲ管ス。
 内務府、我ガ宮内省ニ當リ、内府一切ノ事務ヲ掌ル。府内ヲ分チテ七
 トス。廣儲司、會計司、掌儀司、都虞司、慎刑司、營造司、慶豐司、是レナリ。此ノ府
 ノ總管ハ、滿州文武大臣、或ハ王公ヨリ簡用シテ、府務ヲ綜理ス。各司ニハ、
 郎中アリ。以テ、司務ヲ統ブ。奉宸苑ノ花園ヲ掌ル、上駟院ノ群牧ノ政ヲ掌
 ル、武備院ノ御用ヲ武備ヲ掌ル等、皆此ノ府ニ隸屬ス。
 翰林院、國史、圖籍、制誥、文章ノ事ヲ掌ル。故ニ、外面ノ觀察ハ、一個ノ修

史館ノ如シト雖、其ノ内面ハ、大ニコレニ反シ、士ノ科第ヲ歷テ、正途進仕
 者ノ集ル所ナレバ、資格殊ニ貴シ。サレバ、此ノ院ノ出身者ハ、官途ヲ上進
 スル事、他途ノ者ニ比シテ、甚迅速ナリ。掌院學士、院務ヲ綜理シ、侍讀學士、
 侍講學士、侍讀、侍講、其ノ他ノ職員アリ。庶吉士トイフハ、執職ナク、館ニ在
 リ、講習三年ノ後、詩賦ノ試業アリ。此ノ試業ニヨリテ、出身各差アリ。
 國士監、我ガ大學ノ制ニ當リ、學生ヲ教育スル所タリ。
 右ノ外、光祿寺、大僕寺、鴻臚寺、太醫寺、欽天監等アレド、之ヲ詳言セズ。進ミ
 テ、各省地方官ノ事ヲ述ベントス。サテ、支那本部ノ各省ハ、省、府、州、縣ヲ區
 劃シ、其ノ區劃毎ニ、各員ヲ設ケ、北京政府ノ省令ヲ承ケ、ソノ事務ヲ施行
 ス。
 總督、地方ニ於イテ、最高ノ職ニシテ、文官ト、武職トヲ統フ、二省一員、
 或ハ一省一員。
 巡撫、總督ニ亞グ重官ニテ、教育、刑、政ヲ掌ル、各省一員。

承宣布政使 財政ヲ督ス。
 提刑按察使 法律治獄ヲ掌ル。
 道台 省内ノ糧儲監法驛傳兵備海關及ビ巡守等ヲ掌ル。
 知府 府下ノ行政訴訟賦稅等ヲ掌リ其ノ下ニ府同知事通判等アリ。
 知州 州下ノ行政訴訟賦稅等ヲ掌ル。
 知縣 知府知州ノ職ニ似テ小ナル者。
 右ノ外順天府ハ京城ナルニヨリ特別ヲ以テ府尹ヲ置ク其ノ下ニハ府丞治中通判ナドアリ又黃河運河等ニ沿フ地ニハ河道總督アリテ堤防ヲ改修シ河流ヲ利用スル事務ヲ掌ル。
 稅關 我ガ稅關ノ如クニシテ水陸物貨ノ會區ニ駐在シ以テ關稅ヲ掌ル。
 鹽務 鹽課ヲ徵收ス鹽政大臣之レヲ統轄ス運鹽使鹽法道等其ノ下ニ屬ス。

學政 禮部ノ下ニ在リテ每省ニ學政教授學正等アリ以テ學政ヲ督理シ教化ヲ普及セシム。
 土司 地方蕃族ノ酋長世襲ノ官ニシテ歲貢ヲ政府ニ納メシム蕃族ノ常政ヲ以テ律シ難キニヨリ此ノ官ハアルナリ。
 滿州部ニハ盛京ニ五部ヲ置キ政務ヲ統べ地方ニ又各官アリ此ノ部ノ政治ハ殆ト本部ノ如シト雖五部ノ權力ハ八部ノ如ク大ナルヲ得ズ。
 戶部 盛京ノ賦稅出納ヲ掌リ所屬ハ經會清吏司糧儲清吏司農田清吏司ノ三ツアリ其ノ各司ガ司ル事務ハ文字ノ如シ長官ハ正二品侍郎ニシテ以下ノ役員ハ略本部ノ戶部ニ同シ但其ノ小ナルノミ。
 禮部 盛京ノ朝祭禮儀ヲ掌リ所屬ハ左清吏司右清吏司外ニ迎送朝鮮官ナドモコレニ屬ス長官ハ侍郎ナリ。
 兵部 盛京ノ武備驛傳等ヲ掌ル左右ノ清吏司ハ其ノ屬司。
 刑部 盛京旗民ノ訟獄ヲ掌ル肅紀前後兩清吏司肅紀左右兩清吏司

ノ四屬司アリ。
 工部 盛京營造ヲ掌ル。左右兩清吏司、コレニ屬ス。
 滿州ノ地方官ハ、奉天府尹アリテ、府務并ニ錦州府務ヲ掌ル。下ニ府丞、治中アルハ、猶順天府尹ノ如シ。興京理事ハ、京務ヲ管理ス。又、知縣等モアリ、内外蒙古四部及ビ西藏ノ政令ハ、理藩院ノ掌ル所トス。此ノ院ニハ、所屬ノ司六ツアリ。旗籍清吏司、王會清吏司、典屬清吏司、柔遠清吏司、徠遠清吏司、及ビ理刑清吏司、是レナリ。院ノ綜理ハ、尙書ニシテ、左右兩侍郎、コレヲ助ク。其ノ下ノ官名ハ、支那本部ニ、大略同シ。而シテ各司ノ職務ハ、則、異ナリ。或ハ、朝貢祿賜ノ事ヲ掌ルアリ。即、王會司。或ハ、西藏喇嘛僧ノ承襲等ヲ掌ルアリ。即、典屬司。餘司ノ細事ハ、茲ニ記サズ。
 内外蒙古回部 ハ、部落ヨリ旗ヲ立テ、旗ヨリ盟ヲ設ケ、旗毎ニ旗務各官アリ。又、盟毎ニ正副盟長アリ。是等ハ、皆武官ニテ、之レヲ控制スル駐劄各官ハ、典屬司所轄ニ屬シ、其ノ重職ハ、定邊左副將軍、烏里雅蘇參贊大臣

等ナリ。

西藏 ハ、西藏辦事大臣、同地ニ駐劄シ、以テ鎮撫ス。

一、賦稅。附度量衡。

清廷ノ賦稅ヲ見ル、頗、其ノ細目ニ渡レリ。即、四種。二十類。三品(銀、穀、草)ニ分ル。

第一種、田賦。

(一) 田賦ハ、土地ノ肥瘠ニヨリテ、上、中、下トナリ。コレ、亦、各、三種ニ分チ、徵集ヲ二期トナス。

(二) 耗羨ハ、モト、州縣官田賦徵收ノ際、手數雜費トシテ、徵收シタリシガ、今ハ、地方經費稅トイフヤウナレリ。

(三) 丁口賦ハ、今日ハ、田賦ニ攤派シテ、併徵ス。

(四) 漕賦ハ、漕糧耗折トシテ、北京迄ノハ、每石三斗五升。通州迄ノハ、每石一斗七升ヲ徵收ス。

第二種關稅。

- (五) 蘆、課ハ、沿岸沙洲ヲ、土民ガ墾種スルモノニ課ス。
- (六) 屯田ハ、今ハ、僅ニ、其ノ名ヲ存スルノミ。
- (七) 土司貢賦ハ、偏地ノ蕃族ニ土司アリテ、其ノ部族ヲ管ス。毎年、若クハ、二年毎ニ、貢ヲ納ル、ヲイフ。

(八) 内地關稅ハ、内地ノ關稅ヲイフ。

(九) 釐金稅ハ、物貨運輸稅ニシテ、此ノ稅源ハ、近世長髮賊亂ノ際、財政困難ノ點ヨリ、創セシモノナリ。

(十) 海關稅ハ、各國ト通商場ヲ開キテヨリノ一大稅源ニシテ、海外貿易隆盛ニ赴クニ隨ヒ、此ノ稅益增加ス。

第三種經常稅。

(十一) 驛遞稅ハ、各省ノ驛遞ニ、夫馬ヲ備置シテ、以テ、公文ヲ遞達スルニヨリ、之レヲ徵收ス。

(十二) 鹽法ハ、支那ニ於イテ、古ヨリ、之レアリ、今日ニテハ、各省ノ製鹽、皆、官ニ管ヒラレ、私鹽ハ、嚴禁タリ、鹽政官ハ、交易價值、課稅ヲ徵驗ス、其ノ製鹽ノ地、鹽商ノ區域等ハ、總ベテ、官ヨリ、公定アリ、是レ、官ノ意ニ謂ヘラク、斯クスレバ、平均ク、價格ヲ得、私利ノ害ナカラムト、而シテ、貪官猾吏ハ、往々、私聚ヲ飽カシム、蓋亦愚ナリ。

第四種各種稅。

(十三) 礦稅ハ、礦山ニ課スル稅ナリ、近頃ニ至リ、技師ヲ聘シテ、益、ソノ多カラム事ヲ欲スルニ至レリ。

(十四) 漁稅ハ、漁民ヨリ徵收スルモノ。

(十五) 茶稅ハ、茶ヲ販運售賣スルモノニ課スル稅ナリ、茶樹ヲ種播スルモノハ、與ラズ。

(十六) 牙行稅ハ、運槽店、及ビ仲買周旋商ニ課スル稅ニシテ、地方ト、商業トニヨリ、異同アリ。

(十七) 商稅ハ、普通ノ商人ニ課スル稅ナリ。
 (十八) 典商稅ハ、質典商ニ課スルモノ。
 (十九) 酒稅ハ、近年山東巡撫ガ高粱酒造家ニ課シタルニ始マル。
 (廿) 契稅ハ、土地財産ノ賣買ニ當リ、地方官驗印ヲ加フル稅。
 (廿一) 鋪稅ハ、北京九門外ニ開鋪スルモノヨリ、徵集スルヲイフ。
 (廿二) 雜稅ハ、牛馬類材木類ノ稅及ビ雜項稅ナリ。
 以上ハ、清國政府ノ歲入トナルモノニシテ、其ノ歲出ノ重ナル者ハ、俸祿、養廉、公費、監務官經費、海關經費、陸海軍經費、滿洲邊境經費、及ビ其ノ他各經費トス。

清國政府ノ銀財ヲ儲藏スルモノニ、京內國庫ト、地方國庫トノ二ツアリ。又、京內國庫ニ、內庫、銀庫、緞疋庫、及ビ敵料庫ノ四ツアリ。地方國庫亦分レテ、八個トナル。曰ク布政使國庫、曰ク按察使國庫、曰ク糧道庫、曰ク河道庫、曰ク兵備道庫、曰ク監道司庫、監法道庫、曰ク各稅關庫、曰ク州縣衛所庫。是

レ、皆歲出歲入ノ貯藏所ナリ。尙、倉儲ノ設置アリテ、平日ノ儲蓄、荒歲ノ準備ヲナセリ。而シテ、倉儲ノ方法、三個アリ。曰ク常平倉、曰ク社倉、曰ク義倉。各、大小ハ異ナリト雖、賑恤ノ意ハ、則、一ナリ。

清國ノ貨幣ハ、銀及ビ錢ヲ以テ、主トナス。物貨ノ本位ハ、則、銀ナリ。銀ハ、明代ヨリ、租稅ノ定格ヲ立テシモノトス。清ノ咸豐八年、國家經濟ノ不都合ヲ生ジテ、臨時紙幣ヲ發行セシ事アリシモ、今ハ、行ハレズ。

銀ハ、元寶、小元寶、方寶、京餉銀、松江碎銀等ノ種類アリ。錢ハ、京城鑄錢局ノ鑄造ニ係ル。尤、各地方ノ總督、又ハ巡撫ガ、其ノ省域ニ於テ、鑄造セルモアリ。又、銀ト、錢ト、ノ外ニ、票アリ。分チテ、銀莊手券、錢莊手券ノ二ツトナス。何レモ、便利ナリト雖、其ノ區域ハ、銀莊、錢莊、ノ締約地内ニ限ルヲ以テ、流通治カラズ。

度量衡ハ、繁冗ニシテ、茲ニ詳載スルモ益ナシ。蓋、康熙帝ノ時、其ノ制ヲ定

メタリ。度法ニ、營造尺、律尺、及ビ裁衣尺アリ。上ナル者ヲ官尺ト稱ス。清國ノ一升ハ、大約我ガ五合六勺ニ當ル。衡ノ定制ハ、十錢ヲ一兩、一兩トナシ、十六兩ハ、一斤、百廿斤ハ、一石タリ。然レドモ、各地方ニ於テ、多少、不同アリ。

三、内治。

驛遞。ハ、甚、不完全ナリ。官府ノ遞送ヲ司ルコト、稍、敏捷ナリト雖、民間ノ私信ハ、之レヲ取扱ハズ。驛郵ヲ、四方ノ衝地ニ置ク。陸ニハ、人夫アリ。馬匹アリ。水ニハ、舟楫アリ。以テ、之レヲ傳送ス。又、民間商估ノ開設ニ係ル信局。アリト雖、或ハ信函遲滯シ、或ハ遺失シ、甚シキニ至リテハ、局夫ノ開封シテ、其ノ盡中ヲ探グルモノ、往々、之レアリ。保甲。ハ、我ガ警察ニ當ル。然レドモ、亦、我ガ警察ノ綱目備リ、細條整フ如キモノニアラズ。故ニ、有名無實ノ姿アリ。民壯ハ、民間ノ壯丁ヲ募リ、倉庫ヲ防衛シ、盜賊ヲ逮捕スルニ供ス。而シテ、京城、省城等、人烟繁察ノ處ニ

ハ、更ニ法ヲ設ケ、警察ヲ嚴ニス。即、京城ハ、步軍統領衙署、之レガ任トナリ、南京ハ、道臺、之レヲ綜理シ、夜間モ巡視スル等。鐵道。亦、近年、清政府ノ銳意開設セントスル處。然レドモ、惜ムラクハ、未、延長セズ。太沽アリ。芦臺、芦臺ヨリ開平、炭坑ニ至ル線路。北京ト天津トノ線路、及ビ臺灣鐵道等、既ニ落成セリ。電報。ハ、光緒四年ノ創設ニシテ、清政府ハ、銳意、コレガ増設ヲ計リ、今日ハ、其ノ延長、數万里ニ亘レリ。

四、外交。

身毒、安息、條支等ノ名ハ、此ノ國ノ古史ニ見ユ。身毒トハ、印度、安息トハ、波斯、條支トハ、亞刺比亞ヲ指シ、ナリ。此ノ點ヨリ、觀察スレバ、支那人ノ外交ハ、甚、上古ニアリシ如ク思ハルレド、是レ、所謂朝貢視セシ者ニシテ、真正ノ外交ニハアラズ。又、東洋一部ニ止マリキ。明ノ中葉、西人、葡人、蘭人等、粵東ニ通商セシ事アリキ。是レゾ、先、外交ノ始

メトモイフベキ然レドモ國人自尊ノ心深キ故ニ紅夷ト唱ヘテ對等ノ
 交際ヲナサハリシヲ以テ其ノ弊竟ニ廣東ノ敗北京ノ辱ヲ受ケ咸豐ニ
 及ビテ漸同等ノ外交ヲ見ルヲ得タリ而シテ同治ノ初使臣斌椿ヲ佛英
 蘭丁魯獨比等ニ遣シテヨリ多少泰西ノ趨勢ヲ知リ光緒ニ至リ始メテ
 公使ヲ簡派シ領事ヲ駐在セシメ外交事務ヲ司ラシムルニ至レリ
 各國ト條約ヲナシタル順序ハ左ノ如シ

魯西亞

- 一 黑龍江和約六條 康熙二十八年
- 一 恰克圖界約十一條 雍正五年
- 一 恰克圖市約五條 乾隆五十七年
- 一 伊犁塔爾巴哈臺通商章程十七條 咸豐元年
- 一 愛輝城和約三條 同 八年
- 一 俄國和約十二條 同 年

- 一 俄國續增條約十五條 同 十年
- 一 勘分東界約記 同 十一年
- 一 陸路通商章程廿一款 同 治元年
- 一 俄國續增稅則 同 年
- 一 勘分西北界約記十條 同 三年
- 一 改訂俄國陸路通商章程廿二款 同 八年
- 一 科布多界約三條 同 年
- 一 塔爾巴哈臺界約三條 同 九年
- 一 烏里雅蘇臺界約二條 同 年
- 一 中俄改訂條約二十條 光緒七年
- 一 改訂陸路通商章程十七條 同 年
- 英吉利
- 一 英國舊立和約十三條 道光二十二年

- 一、英國重修新約五十六款 咸豐八年
- 一、英國稅則暨通商章程 同 年
- 一、英國續增條約九款 同 十年
- 一、煙臺會議條約三端 光緒二年
- 佛蘭西
- 一、法國和約四十二款和約章程遺補六款 咸豐八年
- 一、法國稅則暨通商章程十款 同 年
- 一、法國續增條約十款 同 十年
- 一、更定法國商船完納船鈔章程 同 治 四年
- 一、中法會訂越南新約十款 光緒十一年
- 大日本
- 一、日本國修好條規十八條通商章程卅三款 同 治 十年
- 一、中日天津會議專款三條 光緒十一年

右ノ外、瑞典、那威、亞米利加、獨逸、丁抹、荷蘭、西班牙、比耳其、伊太利、澳大利、秘魯、巴西等ノ條約ハ、略シヌ。

五、刑法。

此ノ國ノ刑ハ、嚴ニ失スル譴ヲ免レズ、獄官ハ暴ヲ逞クシ、吏卒ハ利ヲ貪ル、蓋亦少カラザルナリ。刑部、都察院、大理等、其ノ長官衙ニシテ、省ニハ按察使アリ、府縣ニハ道台アリ。秩序ハ、稍制ヲ得タリ。

法官。京内ニハ、刑部、都察院、大理寺ノ三法司アリ。地方ニハ、總督、巡撫、按察使、道台等アリテ、法權ヲ執行ス。人民ノ訴訟、知縣ノ判決ニ不服ナレバ、知府ニ控訴スルヲ得。知府ノ判決ニ肯ンゼザレバ、次ニ道台ニ轉控ス。道台ノ上、按察使ニ扣訴スルモ、亦自由ナリ。

刑制。分レテ五等トナル。曰ク笞刑、曰ク杖刑、曰ク徒刑、曰ク流刑、曰ク死刑。而シテ上四刑、又各五等ニ分ル。笞刑ハ、輕罪中ノ最輕罪ニシテ、死刑ハ、極刑ナリ。輕キハ、絞ニ處シ、重キハ、斬ニ充ツ。獄具ニハ、板アリ。囚人ノ醫

部ヲ打ツニ供ス、枷木、紐鐵柵、及ビ脚鎖、各其ノ用アリ、宛然、我が幕府時代ノ刑律ニ似タリ。

法律ハ左ノ如シ。

一名律例

一吏律 職制、公式

一戶律 戶役、田宅、婚姻、倉庫、課程、錢債、市廛

一禮律 祭祀、儀制

一兵律 宮衛、軍政、關律、廐牧、郵驛

一刑律 盜賊、人命、鬥毆、罵詈、訴訟、受贓、詐譎、犯姦、雜犯、捕亡、斷獄

一工律 營造、河防

律毎ニ條例アリ、律ニヨリテ罪ヲ定メ、條例ニヨリテ輕重ヲ審ニス。律及ビ條例ハ繁多ナレバ、茲ニ載セズ。今、ソノ一二ヲ掲ゲバ、戶律、戶役ノ部ニ遺失子女ヲ收留シテ賣リテ奴婢トナシ、納レテ妻妾子孫トナス者ハ、徒二年半ノ刑ニ處セラル。戶律、婚姻ノ部ニ許嫁シテ、輟悔スル者ハ、笞五十ニ處セラル。兵律、軍政ノ部ニ主將固守セズシテ、城塞ヲ棄テタルモノハ、斬候ニ處セラル。刑律、盜賊ノ部ニ妖書妖言ヲ作り、衆ヲ惑ス者ハ、斬候ニ處セラル。刑事、罵詈ノ部ニ尊長ヲ罵ル、笞刑ニ處セラル。刑律、犯姦ノ部ニ官吏娼家ニ宿ス、杖六十ニ處セラル。等ノ規定アリ、輕カ、重カ、將、鄭重カ。

六學制

此ノ國ノ學制ハ整然トシテ具備ス然レドモ文章ノ末技記誦ノ瑣事ニ由リテ以テ人材ヲ登用シ得タリトナス弊風アルガ故ニ其ノ整然タル者ハ紛然タラザルヲ得ズ是レ科擧ノ害ヲナスモノニシテ實用ノ學科ヲ講習セザルニ起因ス焉ゾ經天緯地ノ大材ヲ出ス事ヲ得ンヤ

學官。禮部ニ屬シ其ノ儀制清吏司學政ヲ擔當ス地方ニハ學政使教授學正教諭及ヒ訓導アリ學政使ハ所管省ノ學政總理ニシテ教授以下ヲ管督ス秀才學位ヲ與ヘ稟生ニ補シ歲貢優貢ヲ擧グル事ナドハ皆學政使ノ權内ニ存ス

學校。ハ二ツニ分レ一ヲ官學トイヒ滿人子弟ノ教育所ナリ一ヲ國子監府縣學書院義學トス即漢人子弟ノ教育所ナリ官學ハ一ニ曰ク宗學順治二年始メテ設置セリ二ニ曰ク覺羅學雍正七年始メテ設置三ニ曰ク咸安宮官學四ニ曰ク景山官學五ニ曰ク八旗官學六ニ曰ク健銳營

官學七ニ曰ク火器營官學八ニ曰ク圓明園官學各官學ノ學生年齡ノ規定ト在學ノ期限ト試業トアリ

國子監ハ大學ニ等シ監生タラシモノハ其ノ所定ノ規則ニ合ハザレバ入學スル事ヲ得ズ學期ハ三箇年トス月毎ノ試業アリ三月毎ノ試業アリ祭酒司業之レヲ掌ル其ノ制嚴ナルガ如シト雖今日ハ頗有名無實トナリ監生ハ國子監ノ名ヲ借リテ故郷ノ父老ニ誇ルニ過ギズ

府縣學モ亦然リ書院ハ公私共立ノモノニテ高等ト尋常トノ二種アリ前者ハ經義史學制度等ヲ專修セシム入院試驗ヲ歷ザレハ入ル事ヲ得ズ後者ハ應試制義文ヲ修ムル所ナリ義學ハ貧民子弟ノ便ニ供スルモノニテ官吏又ハ豪家ノ義設ニ係ル

學校ノ制上ノ如シト雖富有ノ子弟ハ師ヲ家ニ聘シテ勉學スルモノ多シ又散學館トテ寒儒ノ私塾モアリ而シテ學ブ所ハ皆四書五經詩賦習字ノ類文明ノ實用的教育ニアラズ嗚呼子弟ヲ憫殺セザルヲ得ンヤ

貢舉。清人ノ立身ハ、試業ヲ經ル少カラス、即縣試ニ及第シテ、後府試ヲ經、其ノ後、又學政使ニ、所謂歲試ヲ受ク。歲試ノ題ハ、四書中ノ文句ニテ解釋ハ、必宋儒ノ意見ニ由ラザル可ラズ、及第者ハ、即秀才ナリ。鄉試ハ、三年毎ニ、各省城ニ於テ施行ス。督撫之レガ監試トナリ、中政府ノ派出員ト共ニ、四書制義文三題八股、五言八韻ノ詩一題、五經文一題、策論五道ヲ出シ、六日間ノ試験ヲ行フ。及第者ヲ舉人トイフ。會試ハ、五年毎ニ行フ。北京ニテ、各省舉人ヲシテ、受験セシムルモノナリ。試験ノ問題ハ、鄉試ノ時ニ同シク、日ハ一日長クス。及第者ヲ進士ト呼ブ。殿試ハ、其ノ後三十五日ヲ歷テ、保和殿ニ於テ施行ス。試策ハ、一千字以上ヲ限リ、且ヨリ暮ニ至ル。及第者ノ一甲(進士及第)及ビ二甲(進士出身)ハ、翰林院庶吉士トナル。三甲モアリ。一甲ハ、狀元、探花、榜眼ノ三人ナリ。外ニ、廩生、歲貢、恩貢、優貢、及ビ拔貢アリ。試業ノ際ハ、何レモ、規律嚴肅、物件ノ隱蔽ヲ稽查スル事甚シ。室ハ、狹クシテ、昂首スルヲ得ズ、食ハ、自之レヲ携フ。其ノ猜計ヲ防グ爲ナ

ラン。

右ハ、支那固有ノ學事ナルガ、茲ニ、又各國トノ交際、益隆盛ニ赴キタルニヨリ、泰西ノ學術言語等ヲ研究スル者少カラズ。即京師ニハ、同文館アリ。上海ニハ、廣方言館アリ。廣東ニ、同文館アリ。天津ニハ、天津醫學校アリ。電信學校アリ。臺灣ニ、洋文學堂アリ。清人ニシテ、ソノ性來ノ偏見ヲ脱セバ、必實用ノ學術ヲ大ニ研究スルニ足ラン。

七、兵備。

清政府ノ兵備ハ、實ニ語ルニ足ラズ。人員ノ數ハ、甚多シ。軍艦ノ備ハ、頗可ナリ。財源ト兵器ト、固ヨリ缺乏ヲ告ゲズ。然レドモ、外國ト戰ヒテ、常ニ敗績スル所以ノモノハ、地理ニ由ルカ、天時ニ由ルカ、曰ク否否。至ク人心。其ノモノハ、雜散腐敗セルニ由ルナリ。人心既ニ此ノ如シ、ソノ兵備ハ、勇壯雲ヲ吞ミ、鯨鱈海ヲ蔽フト雖、勝敗ノ決、豈齒牙ニカクルニ足ランヤ。昔、八旗軍ノ勇壯、古今ニ亘リテ、絶倫ト稱シ、雲南ニ、吳三桂ヲ平グ、福建ニ

耿精忠ヲ擒ニシ、西域、天山、向フ所、皆馬蹄ニ委シタルモ、今ハ、其ノ勇壯ヲ、
 夢ニダモ見ル能ハザルニ至リ、ソノ名コソアレ。後繼者ハ、大抵市儈野人
 ニシテ、無賴ノ一弱軍トナリ了リス。即、曾テ、曾國藩ノ長髮賊ヲ討平セシ
 ハ、八旗、綠旗ノカニアラスシテ、却リテ、鄉里ノ勇丁ニ倚リシナリ。近年、清
 政府、軍備ノ改良ニ孜々トシテ、陸ニ、海ニ、歐式ヲ採リ、新則ニ傾キ、李鴻章
 部下ノ兵ノ如キハ、自精銳無双ト號ス。然レドモ、ソレ、果シテ、能ク、清廷ヲ
 保護シテ、國家ノ干城タルヲ得ベキカ、人疑フヲ止メヨ。彼レ、自コレヲ証
 セン。

一、陸軍。

八旗。昔時、清廷ニ從ヒ、滿州ヨリ、支那本部ニ入りタル兵ニシテ、兵籍
 ヲ世々ニ傳フ。清廷ノ近衛兵ナリ。旗色八種ニ分ルヲ以テ、此ノ名アリ。曰
 ク、鑲黃、曰ク、正黃、曰ク、正白、曰ク、鑲白、曰ク、正紅、曰ク、鑲紅、曰ク、正藍、曰ク、鑲
 藍。或ハ、京城ニ駐在シ、或ハ、各省ニ散駐ス。

領侍衛府ハ、皇帝ニ隨侍シ、驍騎營ハ、我が近衛本團ニ當リ、前鋒營、護軍營、
 火器營、健銳營、及ビ虎槍營、各、其ノ定職アリ。神機器ハ、最銳ノ士ヲ選ビ、歐
 式ヲ修ム。尙、內府三旗、王公府屬五旗、圓明園、內府三旗、陵寢武職、步軍營、我
 ガ憲兵ニ等シ。巡捕五營、我が警視廳ニ等シ等アリ。是等ノ兵數ハ、數年前
 ノ調査ニヨレバ、十五万七千人ナリ。

各省ニ駐防スル八旗兵ハ、樞要ノ地ニ在リテ、將軍、都統、副都統等ノ統轄
 スル所タリ。

八旗軍政ハ、大略ヲイヘバ、ソノ職員ハ、五年毎ニ、軍政ヲ舉行シ、其ノ檢閱
 ヲナス。此ノ年ニ當レハ、八旗大臣、內務府三旗護軍統領、及ビ各省將軍、都
 統、副都統等ハ、各經歷事實ヲ、兵部ニ送呈シ、兵部ヨリ、御覽ニ供ス。

又、各、其ノ長官等相詳議シテ、賞罰ヲ行フ。而シテ、賞罰ニ四則アリ。一ニ曰
 ク、操守、此レハ、廉ナリヤ、平ナリヤ、貪ナリヤヲ定ム。一ニ曰ク、才能、長、平、短
 ヲ定ム。一ニ曰ク、驕、財、優、平ヲ定ム。一ニ曰ク、年、歲、壯、中、老ヲ定ム。又、卓異ニ

擧ゲ糾劾ヲ加ヘ革職休致降級等各差アリ。訓練法ニ大閱アリ。三年毎ニ南園ニ於イテ行フ。合操ハ、每秋施行ス。其ノ他尙アリ。更ニ軍器點檢ヲ、毎年十月ニ行フ。制ヲ設ク。議功陣亡贈爵及ビ陣亡卹賞ハ、何レモ軍事ニ功勳アル者ニ與フル特典ナリ。綠旗ハ、漢人ヲ以テ編制シ、本部及ビ邊境ニ駐劄シテ、内外兵備ノ用ヲナス。各省綠旗兵ハ、該管總督ノ節制ニ從フ。總督ノ下ニ提督アリ。巡撫アリ。總兵アリ。副將アリ。參將、其ノ他アリ。營制ヲイヘバ、總督ノ統轄スル兵ヲ、督標トイヒ、巡撫ノヲ、撫標トイヒ、河道總督ノヲ、河標、漕運總督ノヲ、漕標、總兵ノヲ、鎮標トイフ。外ニ、軍標、提標、招標アリ。數年前ノ調査ニヨレバ、總計六十五萬人。勇兵ハ、國家ノ戰時ニ召集スルモノ、即、往年咸豐國亂ノ際、綠旗ハ、欠乏ヲ補足セシニ始マル。湖勇、准勇ハ、往年ノ勇兵ニシテ、當今尙、勇兵タルニ背カズトモイフ。練軍ハ、綠營ノ壯健ヲ訓練セルモノナリ。勇練合シテ、二十五萬人。

綠旗軍政ハ、五年毎ニ施行ス。其ノ御覽ニ供スル順次ハ、八旗ニ等シ。優劣ヲ區別スル事ナドモ、亦、相同ジ。武科。武職志願者ハ、武科考試ヲ受ク。此ノ考試ノ式ハ、略、文科ニ同ジ。武生ハ、每三年ニ試ム。問題ニハ、射御并ニ策論アリ。試官ハ、武官ト、文官トヨリ成ル。武鄉試ハ、每三年ニ、八日間、其ノ省城ニ行フ。馬步弓箭技藝ヲ試ミシ後、孫子、吳子、司馬法ニ就イテ、ノ論一題、策一題ヲ試ム。及第者ヲ武舉人トナス。武會試ハ、每五年ニ、八日間、北京ニ於イテ行フ。問題ハ、鄉試ニ同シ。及第者ヲ武進士ト稱ス。武殿試ハ、武士ヲ、大和殿ニ對策セシメ、皇帝紫光閣ニ於イテ親閱ス。武進士出身ノ名譽ハ、其ノ及第者ニ落ツ。藩部各旗ハ、理藩院所轄内外蒙古回部等ノ兵ニシテ、平時ハ、警防ノ備ニ供ス。

二海軍

支那ノ海軍ハ北洋南洋福建廣東ノ四艦隊ニ分ル。就中北洋艦隊最整備
スト稱ス。清廷ノ海軍ヲ擴張スルニ至リタルハ往年英佛兩國ト再三戰
ヒテ常ニ敗北ヲ取リシニ原因セリ。故ニ全ク近年其ノ政府ノ意ヲ專ラ
ニスル所ニシテ咸豐以前ハ漁船木艦ヲ以テ唯一ノ海防ニ充テタリキ。
海軍衙門ノ設置アリテヨリ海上ノ威權先操縦ノ宜ヲ得タリ。蓋コレガ
功ハ曾國藩李鴻章左宗棠等ノ肩ニ荷ハザルベカラズ。

北洋艦隊 現時ハ其ノ全權李鴻章ノ掌裡ニ存セリ。而シテ今日ノ如
ク稍壯大ナル艦隊ヲ組織シテ其ノ軍人ガ各國ノ海軍ニ等シキ技術ヲ
修習シタルモノハ英國海軍大佐ラング氏ノ力ナリ。獨逸ノ佐官セベリ
ン氏英國ノ佐官スクッアイヤ氏モ聊清國ノ恩人タルベシ。

光緒十一年練船章程トイフモノヲ發布セリ。此ノ章程ニハ練習正教習
槍礮洋教習帆纜洋教習測算洋教習等ヲ規定シタルモノニシテ頗詳細

ナリ我ガ大日本帝國清國ヲ征スル以前ノ艦數ハ大略左ノ如シ。

定遠鎮遠經遠來遠致遠靖遠濟遠平遠超勇揚威康濟威遠敏捷鎮海

鎮海鎮北鎮南鎮西鎮中鎮邊鎮安

サレド我ガ海軍ノ爲ニ擊沒セラレシ數艦ト老朽艦トヲ除ケバ戰鬪力
ニ堪フルモノ甚多カラザルベシ。

南洋艦隊 此ノ艦隊ハ固北洋ヨリ最良ナリトナシタリシガ今ハ則
及バズ其ノ中ニ於テ比較的ニ整頓セルハ開濟南瑞南琛ノ三艦ナリト
ス。

海晏馭遠南琛南瑞開濟凱濟保民寰泰澄慶威靖鈞和登瀛州測海操

江金甌飛霆策電龍驤虎威海鏡清

其ノ名壯ンニシテ艦亦少カラズト雖蓋概操江ニ似タルモノ。
福建艦隊 往年佛人ノ爲ニ沈メラレテヨリ舊態ニ回ラズ。

泰安伏波元凱超武靖遠定海滄雲

廣東艦隊。 實地ノ海戰ニ堪フルモノ無シ。海上ヲ警備スルニ過ギズ。
 海鏡、永保、琛航、蓬洲、海廣安、綏靖、安瀾、鎮濤、緝西、海東、雄、鉄甲艦、海長清、
 澄波、靖波、聯濟、澄清、利涉、鎮東、神機、執中、安濤。
 右四艦隊ノ製造ハ、内國ト、外國トニ係ル。内國ハ、廣東、福州、上海、外國ハ、英
 國、獨國、又、北洋ハ、北洋通商大臣ニ隸シ、南洋ハ、南洋通商大臣ニ屬シ、福建
 ハ、福建總督、コレガ總督ニシテ、廣東ハ、廣東總督ナリ。又、其ノ舊製ハ、慶應
 元年新造ハ、明治二十年ヲ以テ、最新トナス。
 長江水師。 ハ、即、楊子江中ノ軍備ニシテ、コレガ權輿ハ、咸豐三年長髮
 賊亂ノ際、江忠源、郭嵩燾ノ建言ニ基キヌ。九百里間ノ江岸防禦トス。同治
 五年、及ビ七年ニ、長江水師事宜數十條ヲ發布セリ。尙、今ハ、航數七百三十
 艘内外、兵員一万三千アリトイフ。
 兵器製造所。 天津ニ、河東製造局(西曆一千八百七十四年創設)下海光
 寺機器局トアリ。前者ハ、宏壯ナルモノニシテ、周回四英里ト稱ス。砲彈、火

藥、及ビ水雷等ヲ製造ス。後者ハ、其ノ三分ノ一ノミ、上海ニ在ル。江南製造
 局ハ、同治元年、李鴻章、其ノ部下ヲシテ、英、佛人ニ就キ、軍器製造ヲ傳習セ
 シメシニ始マリ、其ノ後、多少ノ經歷アリテ、今日ニ至レリ。製砲、製彈、機關
 製鉄、木料ノ各廠、及ビ製圖場、并ニ船槽アリ。龍華寺ニ、火藥局アリ。福建ノ
 福建船政局ハ、馬尾ニ在リ。同治元年、左宗棠ノ創設ニ係ル。此ノ局、最、整備
 シ、鑄鉄、脊鉄、輪機、截鉄、水缸、拉鉄、摸帆、繩、合構、砲、槽ノ各廠アリ。外ニ船臺三
 坐、製書所、辦公所、會計所等モアリ。四川ノ成都府ニ、兵器製廠アリ。又、吉林
 ニモ、吉林兵器製造局アリ。
 海陸軍學堂。 北京ノ武備學堂ハ、數年前ノ創設ニテ、學生ハ、旗人ナリ。
 天津ノ武備學堂ハ、一千八百八十四年ノ建設ニテ、學生ハ、官費ナリ。學科
 ハ、數學、製圖、理化學、地理、歷史、築城學、戰術、砲術、并ニ英學、獨逸學トス。又、陸
 軍大學、此ノ地ニ在リ。一千八百八十六年ノ建設ニ係ル。學科ハ、武備學堂
 ニ比シテ、多少高尙ナリ。水師學堂、亦、此ノ地ニ建テラル。我ガ海軍兵學校

ニ當リ機關航海ノ二科アリ福建ノ水師學堂ハ繙譯運轉術ヲ教フル學堂ト機關學ヲ教フル所トノ二ツニ分ル廣東ノ水陸師學堂ハ光緒三年兩廣總督劉坤一ノ創設ニシテ同十三年張之洞吳大澂ノ二人奏請シテ規模ヲ大ニセリ陸軍學生ヲ營學外學ノ二ツトシ海軍學科ヲ機關學運轉學ノ二ツトス以上ノ武人教育所ハ何レモ歐米ノ學者武人ノ教授ニ係リ其ノ學修スル所ハ皆文明國ノ兵事學藝ニシテ頗觀ルベキモノアリトモイフ

八、國民族藉

清ノ國民ハ分チテ三等トナス。一ニ曰ク宗室。二ニ曰ク旗人。三ニ曰ク民人。宗室亦十四等ニ分ル。

- 親王。世子。郡王。長子。貝勒。
- 貝子。鎮國公。輔國公。不入八分。鎮國公。
- 不入八分。輔國公。一、二、三等鎮國將軍。

一、二、三等奉國將軍。奉恩將軍。
旗人ハ三等ニ分チ。

- 滿州旗人。蒙古旗人。漢軍旗人。

此ノ旗人ハ商賈胥吏タルヲ得ズ其ノ制限ノ甚シキハ三十清里外ニ及ブ者旗人タルヲ免サソル規定アリ。

民人ハ支那本地ノ人ニシテ清廷ヨリ其ノ爲ス處ニ委キテ書ヲ讀ミテ士子トナリ田ヲ耕シテ農トナリ金ヲ積ミテ商トナル固其ノ心々ニシテ實ニ平民的自由ノ人ナリ。

此ノ三國民ノ一ナル宗室ヲ除キテハ孝科ニ由リテ官吏トナリ功績ヲ現シテ爵ヲ受ク其ノ人ノ能否ニ存ス爵ニ九等アリ。

- 公。侯。伯。子。男。輕車都尉。騎都尉。雲騎尉。
- 恩騎尉。
- 一文官品級。

正一品

太師、太傅、太保、太子太師、太子太傅、太子太保

從二品

各部院少傅、少保、左都御史、右都御史

正二品

太師少傅、各部左右侍郎、太子少保

從二品

各省總督、布政使、院學士

正三品

使部察院左副都御史、右副都御史、宗人府、府通政使司

從三品

府尹按察使司按察使

正四品

光祿寺卿、太僕寺卿、鴻臚寺卿、詹事府少詹事、天府丞、奉天府丞、會同

從四品

通政司副使、大理寺少卿、詹事府少詹事、天府丞、奉天府丞、會同

正五品

國子監祭酒、鹽運使、內閣侍讀學士、翰林院侍讀學士、各部院郎中、通政司參議、光祿寺少卿、天府治

從五品

翰林院侍讀、御史、各部院員外郎、宗人府副理事官、鹽運使、鴻臚寺副

正六品

鹽課司提舉、內閣侍讀、左右春坊中允、國子監司業、各部院主事、宗人府

從六品

兵馬司指揮、京縣知縣、神樂觀提點、各府通判、京府通判

正七品

左右春坊贊善、使司、翰林院直學、州、光祿寺署正、滿五官正、布政司經

從七品

知縣、各府衛學教授、司樂、通政司知事、兵馬司副指揮、京縣各縣

正八品

翰林院檢討、國子監博士、中書、內閣中書、詹事府主簿、光祿寺

從八品

翰林院主簿、博士、國子監、詹事府、各直隸州、州判、鹽運使

正九品

寺正、典簿、政司、國子監、照壁、運司、知事、各府、州、縣、監、學、訓導、正、太常

從九品

寺正、典簿、政司、國子監、照壁、運司、知事、各府、州、縣、監、學、訓導、正、太常

正九品

寺正、典簿、政司、國子監、照壁、運司、知事、各府、州、縣、監、學、訓導、正、太常

從九品

寺正、典簿、政司、國子監、照壁、運司、知事、各府、州、縣、監、學、訓導、正、太常

正九品

寺正、典簿、政司、國子監、照壁、運司、知事、各府、州、縣、監、學、訓導、正、太常

從九品

寺正、典簿、政司、國子監、照壁、運司、知事、各府、州、縣、監、學、訓導、正、太常

藩

從九品

翰林院待詔、製造、國子監典簿、刑部司獄、正教序班、鴻臚寺序班、博士、臚寺鳴贊、按察司、宣課司、大司獄、都稅司、大使、府司、各州吏目、大使、巡檢、大

未入流

兵馬司吏目、府庫大使、無項帶筆帖式、大使、鑄印局大使、崇文門大使、翰林院孔目、各部院無項帶筆帖式、大使、茶引批驗大使、文門大使、

二武官品級

正一品

領侍衛內大臣

從一品

內大臣、防將軍、滿洲、蒙古、漢軍都統、察哈爾都統、提督、九門巡捕五營步軍統領、

正二品

左右翼前鋒統領、外省駐防副都統、八旗護軍統領、八旗滿洲蒙古漢軍副都統、

從二品

總兵、(綠旗) 副將、(綠旗) 大臣、(八旗)

正三品

頭等侍衛、步軍翼尉、包衣管翼長、委署翼長、健銳營翼長、委署翼長、步軍翼尉、包衣管翼長、委署翼長、健銳營翼長、委署翼長、

從三品

圓明園包衣管總、黑龍江參領、察哈爾參領、駐防協領、辦頭步軍翼尉、

正四品

二等侍衛、雲慶使、前鋒侍衛、副護軍參領、副鳥鎗護軍參領、

從四品

城門參領、包衣副護軍參領、包衣副護軍參領、包衣副護軍參領、

正五品

三等侍衛、治儀正、步軍副尉、步軍校、監守信官、牛羊苑門

從五品

四等侍衛、包衣參領、前鋒參領、委署烏鎗護軍參領、三等護衛、委署前鋒侍衛、

正六品

藍翎侍衛、校、整儀尉、親軍校、前鋒校、護軍校、馬廠監生、長、委署步軍校、職騎校、陵寢祭祀、供應官、太僕寺、馬廠監生、長、黑龍江、吉林、等處管水手、六品官(以上八旗)

從六品

內務府、六品、翎長、六品典儀

正七品

盛京、遊牧、正尉、太僕寺、馬廠監生、固山、達、七品、監生(以上八旗)、把總、(綠旗)

從七品

盛京、遊牧、副尉、七品典儀

正八品

盛京、養息、牧、左右、翼、長、八品、監生

從八品

八品、典儀、校、委署、親軍、校、委署、前鋒、校、委署、護軍、校、委署、職騎、校、副護軍、校

正九品

各營、藍翎、長

從九品

太僕寺、委署、固山、達

第十三章 學術

清ノ康熙帝ハ卓眼ノ人ナリ。始メ、蒙古ノ人心ヲ統御セントスルヤ、先、其

ノ地方人民ノ心ヲ獲ンガ爲、喇嘛教ノ布教ヲ計リ、同時ニ、支那本部ナル、漢人ノ歡心ヲ求メントテ、儒教文學ノ振興ヲ企テタリ。則、孔孟ノ道ニ通、ゼル者ニハ、重職ヲ授ケテ、以テ、儒者ヲ優待シ、タトヒ、清朝ニ仕ヘザル、明ノ遺臣トイヘドモ、各、其ノ學ヲ所、修ムル所ニ、隨ハセタリトイフ。是レ、清代ニ於イテ、文學ノ勃興シタル、原因ナリトス。

乾隆帝、亦、儒者ヲ貴ビテ、學術ヲ獎勵シ、或ハ、文人ヲ、集メテ、典籍ヲ、作り、或ハ、學士ニ命ジテ、史學ヲ、究メシメタルナド、是レ、今日、尙、清國ガ、文章國タル名ヲ、保存スル、導火線ナリ。

今、光緒元年九月、張之洞ノ著述ニ係ル『書目答問』ヲ、閱スルニ、清祖以來、學術著作ノ、分類ハ、左ノ如シ、マタ、以テ、其ノ盛大ナルヲ、知ル可シ。

一、經部

正經正注

列朝經注經說經本考證

小學

二、史部

正史

編年

紀事本末

古史

別史

雜史

戴記

傳記

詔會奏議

地理

政書

譜錄

金石

史評

三、子部

周奏諸子

儒家

兵家

法家

農家

醫家

天文算法

術數

藝術

雜家

小說家

釋道家

類書

四、集部

楚辭

別集

總集

詩文集

五、叢書

六、別錄

右ノ書類ガ如何ナル學者、技術家ノ手ニヨリテ、著作セラレタルカトイ
フニ、實ニ左ノ如シ。

經學家ニハ、顧炎武、毛奇齡、胡渭、秦蕙田、畢沅、段玉裁、程瑤田、阮元、陵廷湛、及
ヒ江永、方苞等アリ。

顧炎武ハ、一名ヲ絳トイヒ、字ハ寧人。江南崑山ノ人ナリ。明ノ遺臣ニシテ、